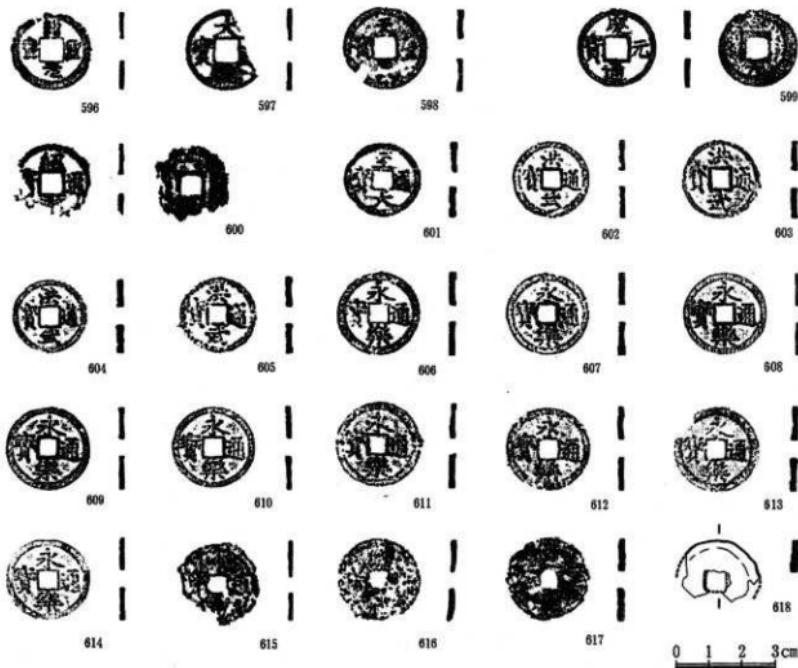


第143図 S K-78出土錢貨測図 (1)



第144図 SK-78出土錢貨実測図（2）

深鉢（189）、三足付鉢（186・194・255）、備前焼の擂鉢（187・188・190・199・200・202・204・223・228・233・236～237・242～245・249・252・253など）や壺・大壺（195・201・203・205・206・210・211・213・215～216・238など）、在地系の鉢や壺壺類、瀬戸の香炉（234）、輸入陶磁器の白磁・青磁・青花・褐釉陶器などが出土している。

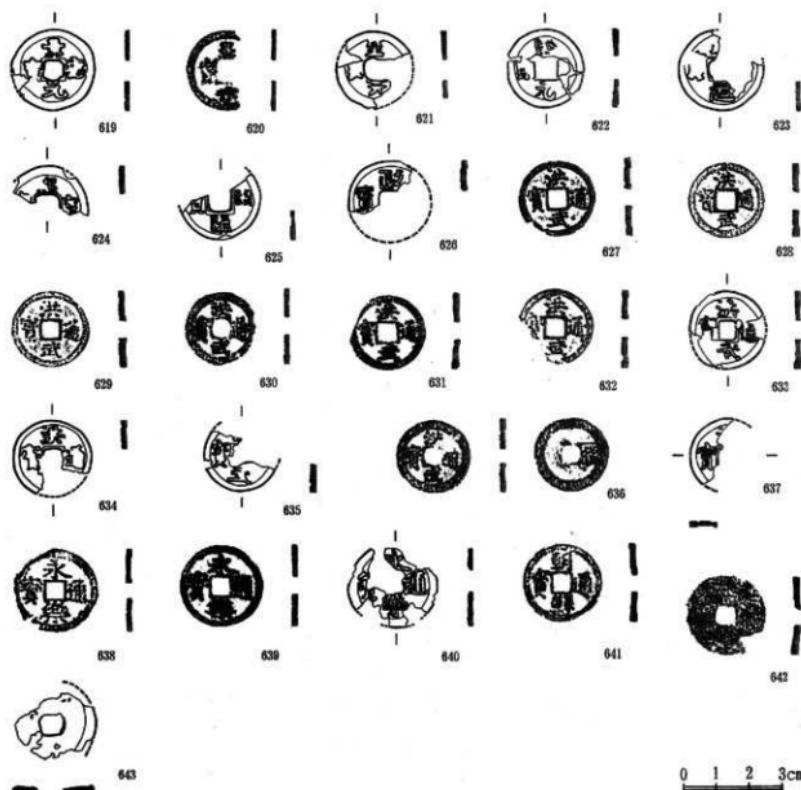
白磁（第134・135図）は、玉縁や口禿げ皿が1点もみられない。つまり、13世紀代までは細々とした居館だったと推定できる。全体的には、15世紀代を主とする八角小杯や切高台の皿と景德鎮の16世紀代の皿が多い。小杯と切高台の皿の量は、市内屈指である。321の皿外底には、「八」もしくは「二」の様な朱墨が認められる。当遺物は、西南部の24号建物西桁の北から2番目の柱穴から出土しており、地鎮祭で埋納された可能性がある。朱墨としては、市内2例目である¹¹⁾。

青磁（第135～137図）は、12～13世紀の劃花文碗から、鎬蓮弁文碗、ラマ式蓮弁文碗、印花文碗、雷文蒂碗、稜花型皿、稜花型盤、劍先蓮弁文碗へと16世紀前半まで、切れ目なく出土している。主体は13世紀後半の鎬蓮弁文碗からで、白磁とはほぼ同じくする。量的に突出したり著しく減退する時期は無いようであるが、稜花型盤は少ない。また、稜花型盤は市内初出土であり、当時の繁栄ぶり

りが窺える。

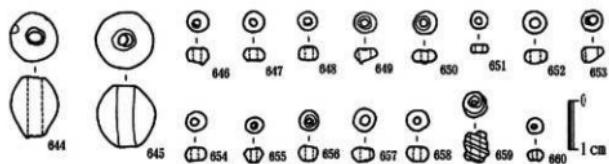
青花（第138～140図）は碗・皿類で構成され、景德鎮窯産が多い。446と447は同一個体かもしれないが、市内初の大型タイプの合子である。

褐釉陶器（第140図）は少なく、壺壺類の破片が若干出土している。



第145図 VI区出土銭貨実測図

619 : SK-100, 620, 623～624 : S2-31, 621 : S2-32, 625 : 2594, 626 : SD-61, 627 : 1405, 628, 632, 634 : S2-24, 629 : S2-27, 630 : 2920, 631 : S2-35, 633 : 2236, 635～637 : 1422, 638 : S2-08, 639 : SD-54, 639 : SD-61, 640 : SD-49, 642 : SK-65, 643 : 163, 622 : 砂土 茶褐色



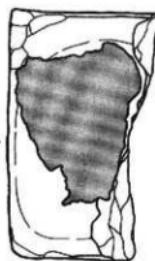
第146図 VI区出土 玉類実測図 644 : SK-111, 645～659 : S2-03, 660 : II型



661



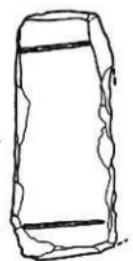
662



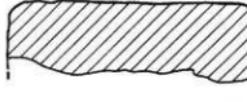
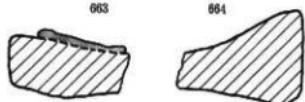
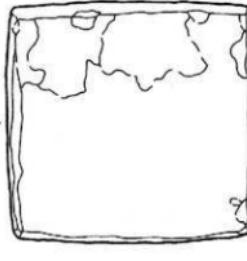
663



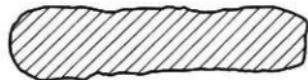
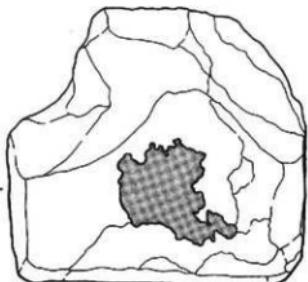
664



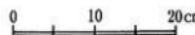
665



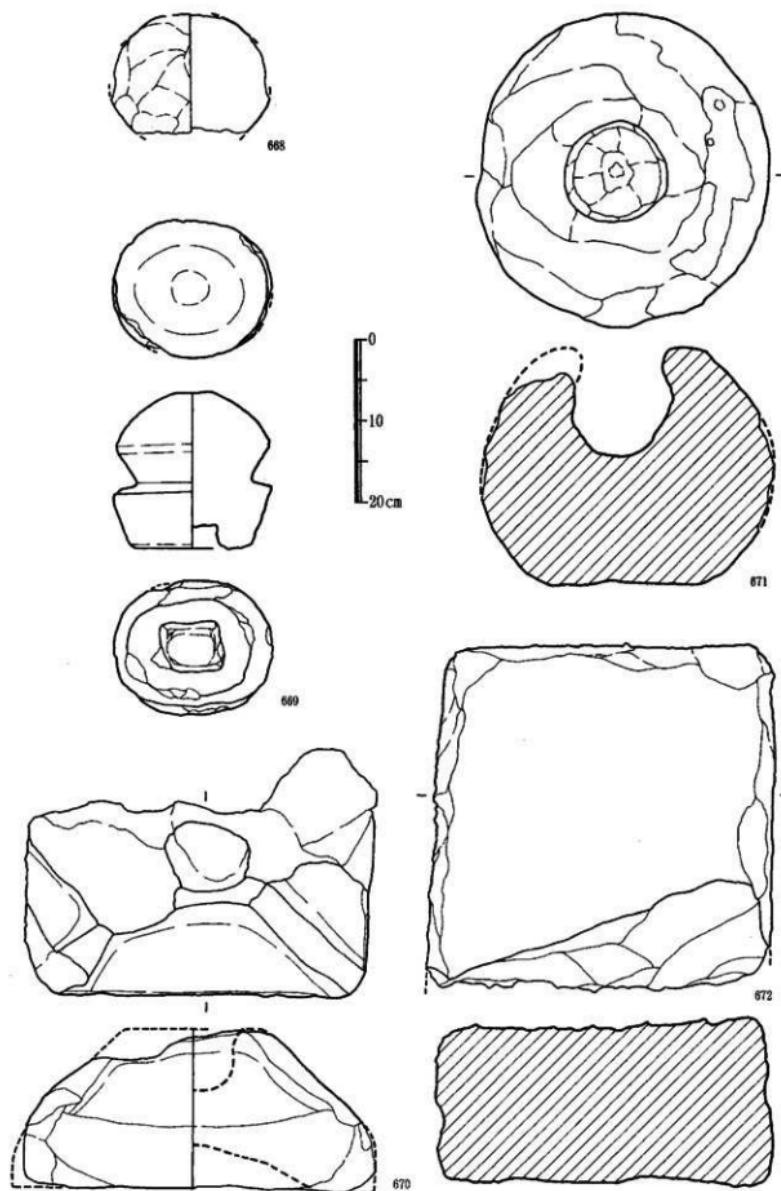
667



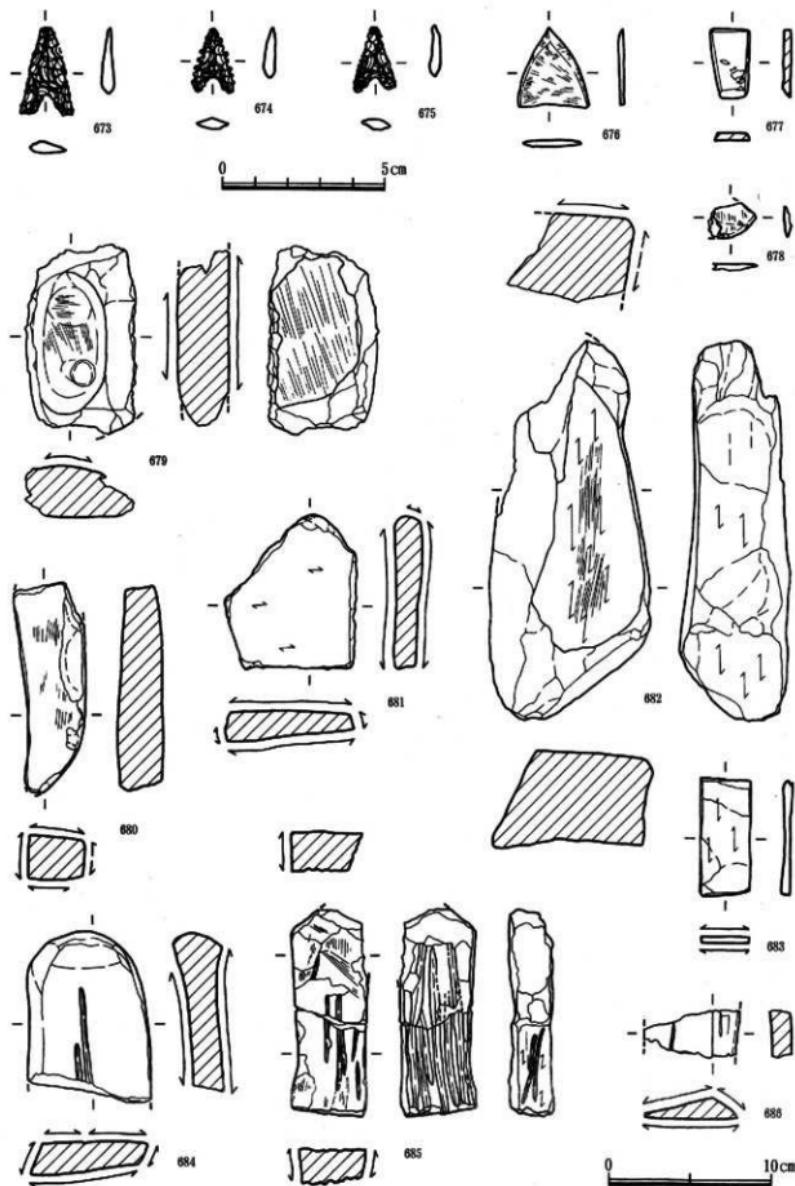
669



第147図 SK-17出土石材実測図 アミ目は白色粘土

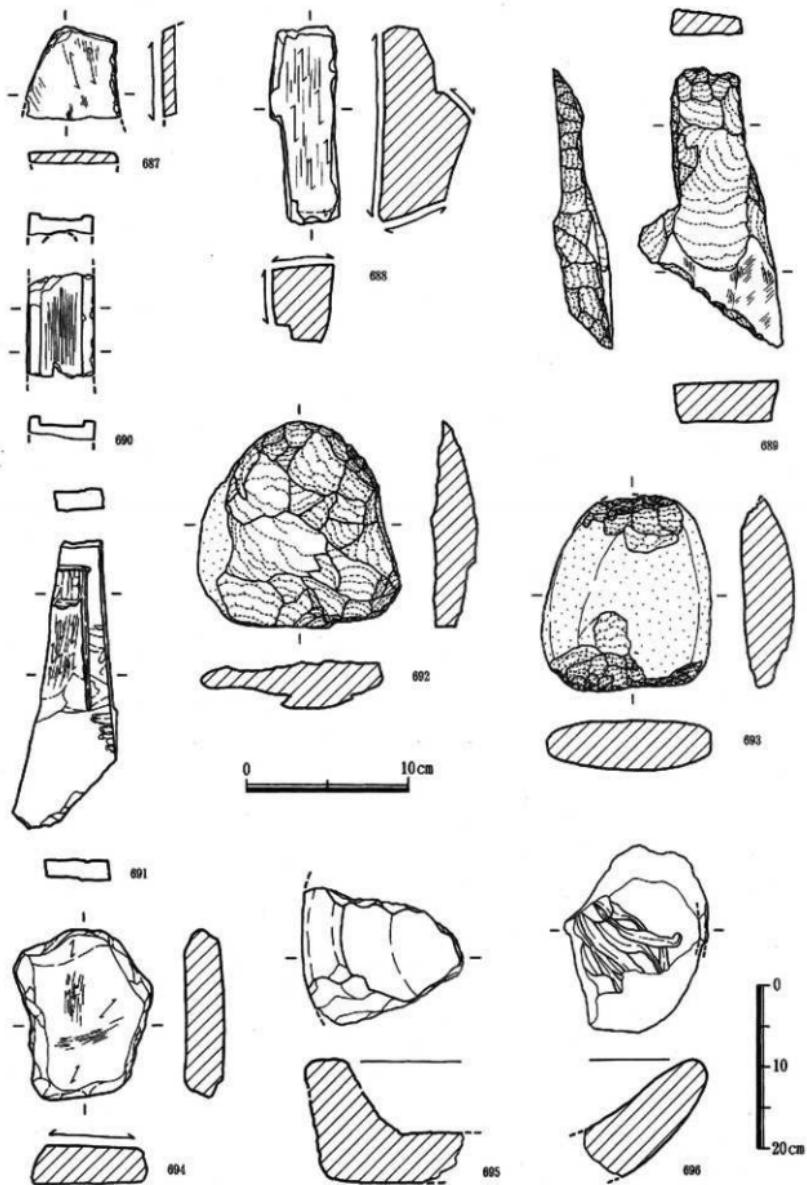


第148図 SD-40出土 五輪塔実測図

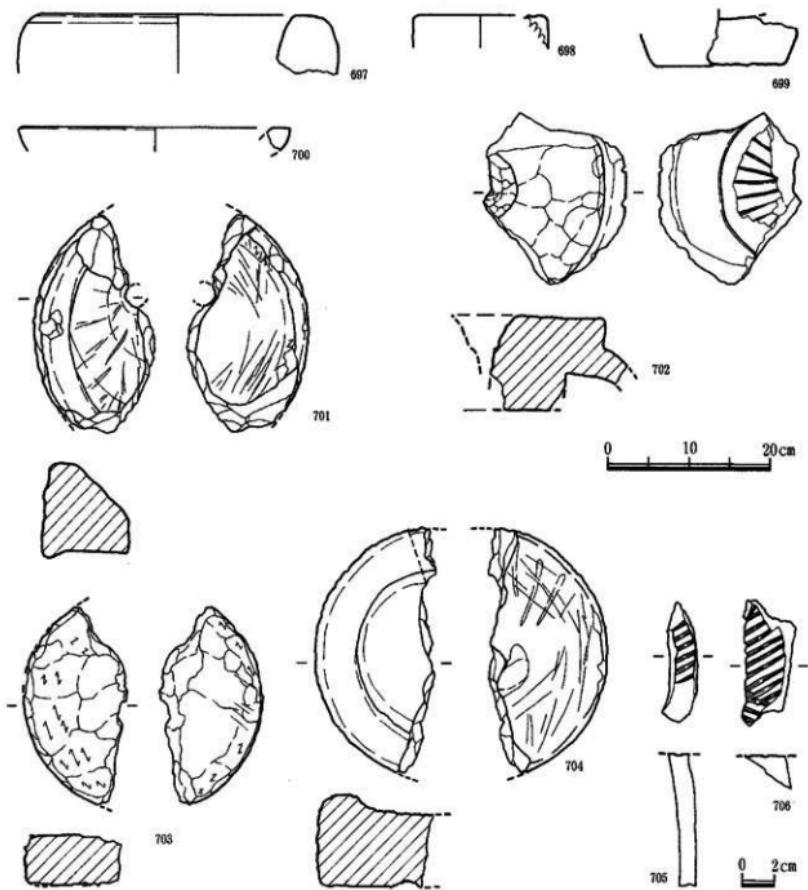


第149図 VI区出土石器・石製品実測図(1)

675: 2552, 676: 52-27, 677-680: 694-695: SR-01, 679: 1310, 681: SK-10, 683: SK-56, 686: 359, 673: 手斧, 674: 手斧, 676: 鋸土



第150図 VI区出土石器・石製品実測図 (2) 687: 420, 688: SR-01, 689-690: SD-64, 691: SK-58, 692: SD-48, 693: SZ-17, 694-695: SK-117, 696: SK-23



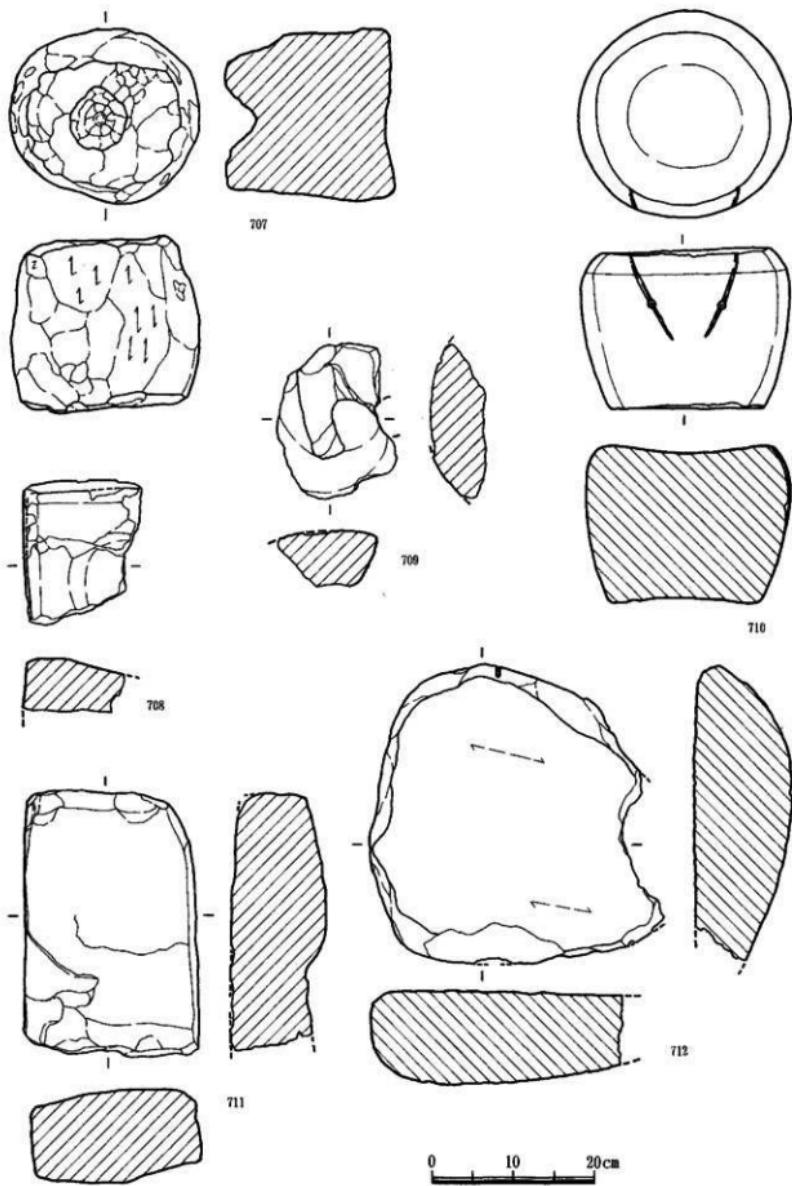
第151図 VI区出土石器・石製品実測図（3） 697: 2332, 698: SD-15, 699: SA-01, 700: 1716, 701: SK-111, 702: SR-01, 703: SD-64, 704: SD-39, 705: SD-27, 706: SD-32

中世末～近世初頭の時期は、肥前の陶器皿が目立つ（第141図）。

近世に移行して間もなく一国一城令が発布されたため、造構・造物の量が限られる。調査区東南部の搅乱状の土層や01号道路上面～上位にかけての覆土から、肥前と薩摩の陶器が出土している。これらの内、碗皿類は肥前、鉢・壺類は薩摩が主となる傾向は、市内共通である。

18世紀代の遺物は皆無に等しく、19世紀代は若干の陶磁器が出土している。近世以降の堆積土は重機で削平したために情報量は限られる。

土製品は少なく、土錐2点（257・258）と籠の羽口1点（259）が出土した程度である。土錐2



第152図 VI区出土石器・石製品実測図 (4) 707:SK-114, 708:SK-01, 709:SD-39, 710:SZ-09, 711:SD-18, 712:SA-02

点は同じタイプで、中世に属すると思われ、段丘下の川で使用していた漁網錐と思われる。轍の羽口は、23号土壙墓の覆土から出土しているが、周辺で検出した炉址で使用されたものと推定される。

銭貨は、78号土坑以外では26枚出土した。620・621・625・627・630・633～637の10枚は柱穴から出土し、619と642の2枚は土坑から、他は攪乱坑や溝状遺構から出土している。これらの殆どは覆土に偶然混入したものと推定されるが、柱穴から出土したものは地鎮目的のものもあったと思われる。

鉄鍋・銭貨以外の金属製品は、土壙墓出土の鉄釘が多い他、鉄鎌1点（第189図-952）、刀子4点（957・961・962・969等）が出土している。954の鉄製品には刃部が無く、素材として持ち込まれていた可能性もある。

石器・石製品（第147～150図）の殆どは中世の遺物であり、砥石と石臼が目立つ。700・702・705・706は茶白で、一般の石臼よりも粒子の細かい石材で製作されている。691は製作途中の硯で、城内で製作していた（量産ではなく、単品）と推定される。軽石製五輪塔の地輪は、半截されて長方形に加工され、耐熱用材として利用されている。662と664・710には沈線と穿孔があり、同一個体と推定される。710は、大型柱穴の根石として据えられていた。柱穴の半分程まで挙大の礫を5～6段重ねた上に据えられていたが、堅固ではなかったために出土状態の実測図も写真も残せなかつた。707は、114号土壙墓の南壁中央付近中位の壁面に密着して出土した。五輪塔水輪と推定されるが、磨滅・風化が著しい。灰色系の軽石塊は市内には露頭せず、鹿児島県錦江湾寄りの質感に似ている。

その他、96号建物の北西隅付近の、現代畦畔の土中から、宝曆7年（1757）製の「誘室妙線大師」銘の墓石（長さ120cm・幅20～26cm・厚さ12cm前後の溶結凝灰岩板石）が出土し、18世紀代にも居住者が居たことを物語る。

小結

遺構の密集・重複によって、掘立柱建物は20～30棟程度増加すると推定されるが、主要建物や明瞭な建物は復元できている。

区画溝は大きく3方向（東西～南北、北北西～南南東・西南西～東北東、北北東～南南西・西北西～東南東）の方画地割を基本とし、東西～南北方向が主体である。礫石建物は一棟も無いが、掘立柱建物は区画溝と同じ主軸方位をとり、計画的な構築がされている状況を看取でき、概略的変遷をたどることができそうである。大小様々な土坑も同様で、主軸方位によって分類可能である。

遺構の切り合いや出土遺物・文明ボラ混入の有無によって区画溝のある程度の変遷を想定し、その主軸方位と同一の建物がほぼ同時期の郭内建物と判断して、総体的な変遷を想定し、他の調査区も含めて第5節にまとめている。

註

- (1) 長江浦地区遺跡群小路下遺跡から青磁碗の外底に「下」と朱墨した底部片1点が出土している。
えびの市教育委員会 「長江浦地区遺跡群」 2002



第153図 VII・IX区 遺構分布図

○. VII区

圃場整備工事の都合上、西側10~15m程を先に調査して、工事用道路として明け渡した。また、北縁方面については、可能な限り広げて調査したが、結果的には、堀区との繋がりが未解決に終わってしまった。航空写真撮影後、中央の黒色帯の遺物包含層約800m²を掘り下げた。

当地区はVI区と同様、Ⅲ層とⅣ層の凹凸面が繰り返され、建物群は微高地となるⅣ層上面に集中することから、西群と東群に分布する。中間の黒色帯には、遺構が殆ど無い。

遺構は、竪穴住居1軒のほか、竪穴状遺構1軒、掘立柱建物跡28棟、土坑2基、土壙墓1基、用途不明大型土坑2基、溝状遺構10条、道路跡2条などを検出した。

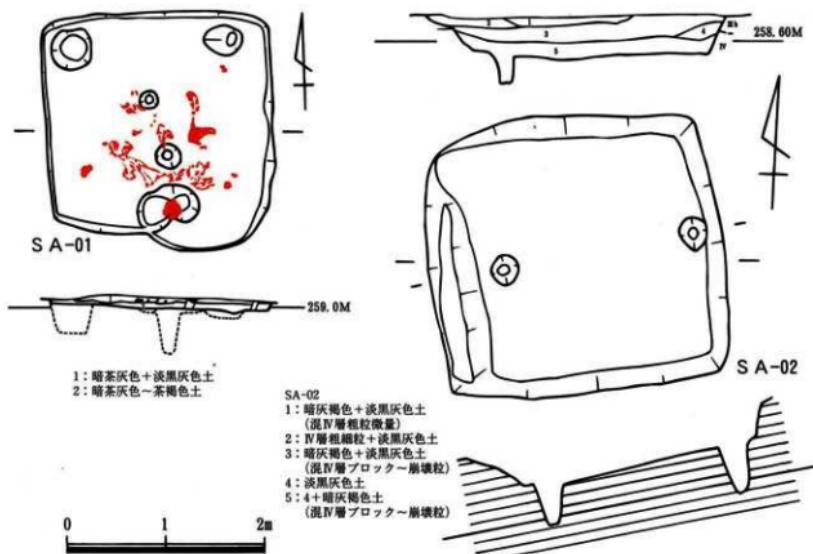
S A-01 (第154図)

調査区の北東部で検出した、東西2.30m・南北2.0~2.42mの、東南隅が若干変形した方形の竪穴住居と推定される。深さは4~14cmで、基底部しか遺存していない。中央付近の小柱穴2基が主柱穴と思われるが、北側は浅い。南東部では、若干の炭化材と焼土が検出された。

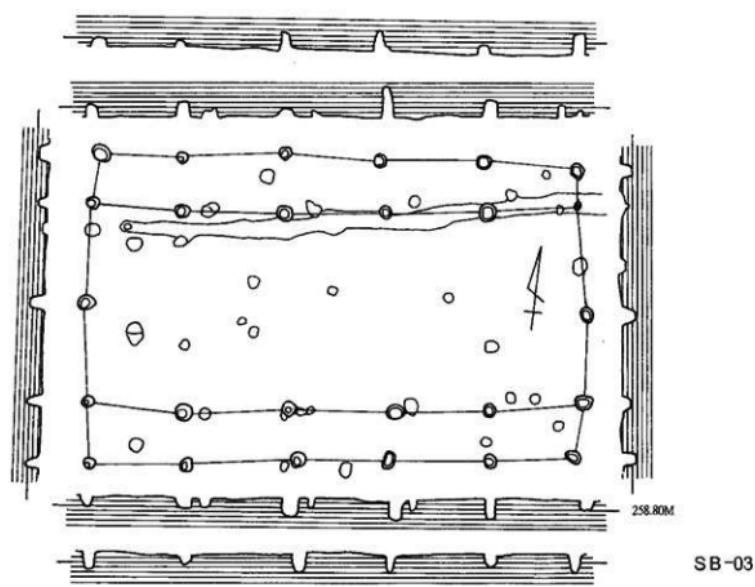
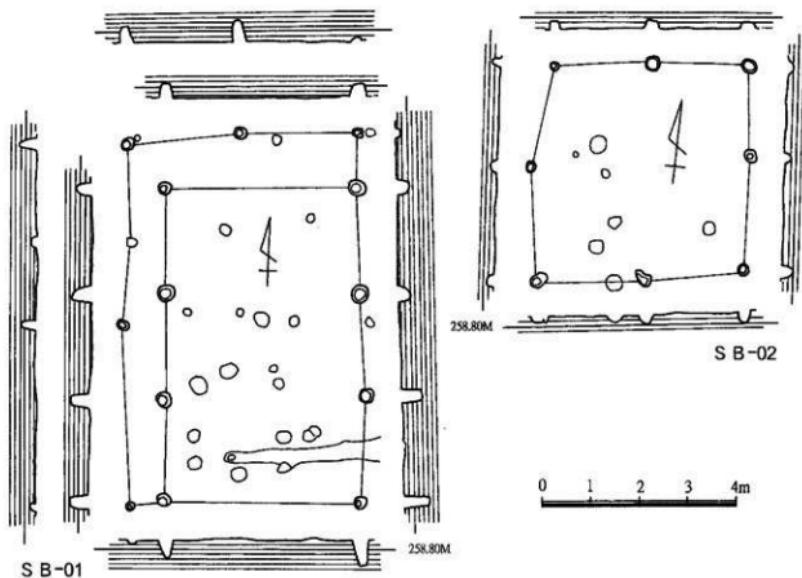
出土遺物は少なく、免田式土器片(第170図-715)と甕片(714)が出土したこと、周辺からの出土土器(717~721)から、弥生時代後期の遺構と推定され、且つ、外周は削失したと思われる。

S A-02 (第154図)

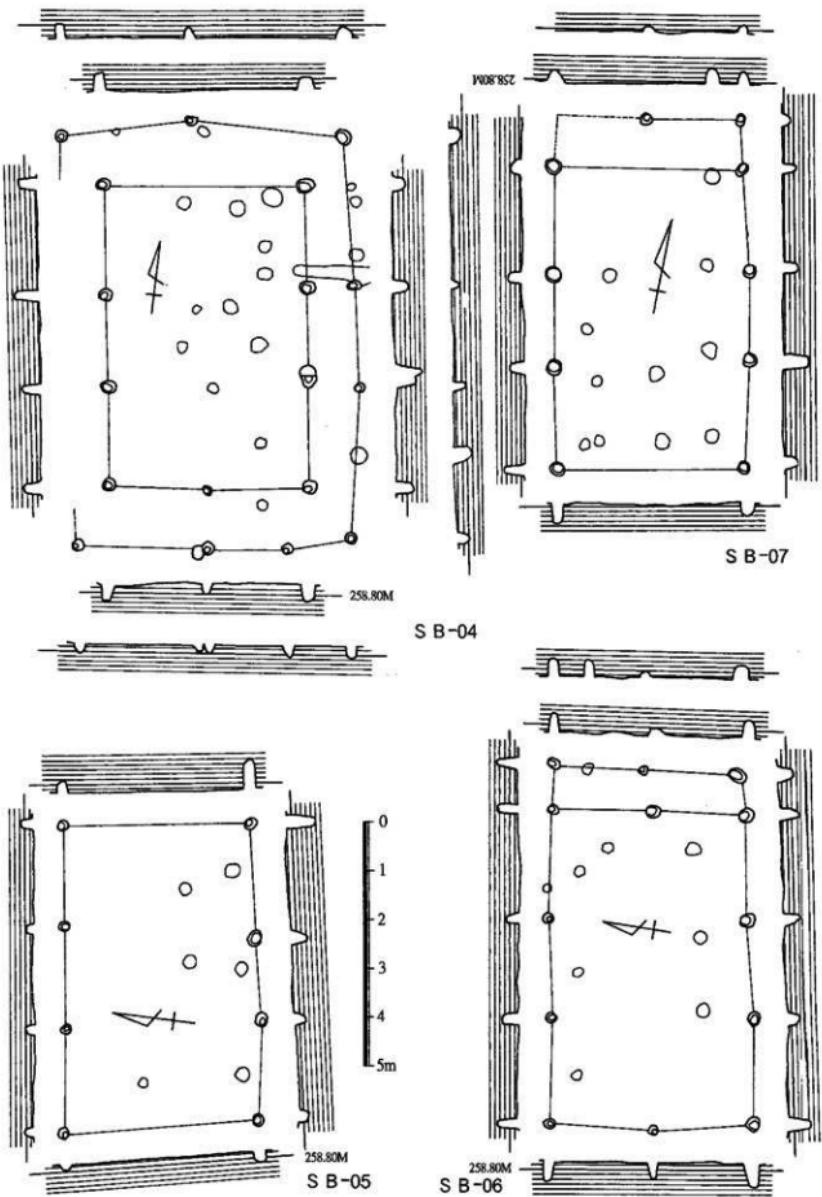
西側建物群の東南部に位置した、1辺2.8~3mの方形を呈する住居状遺構である。深さは40cm



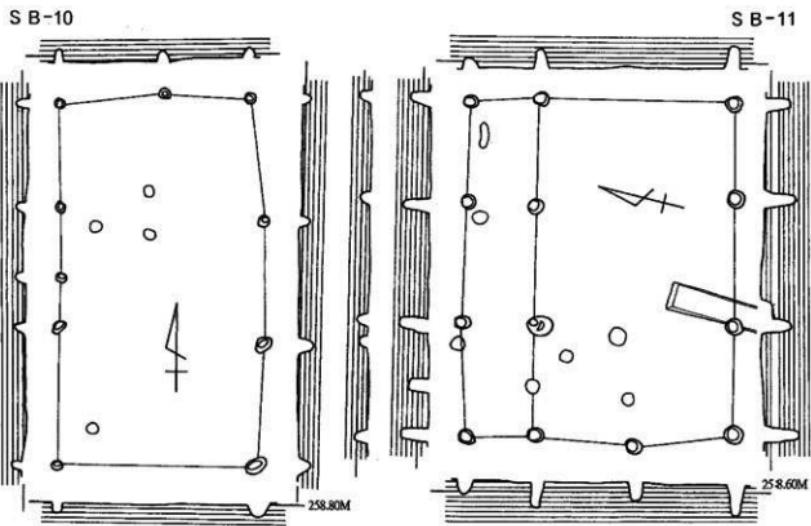
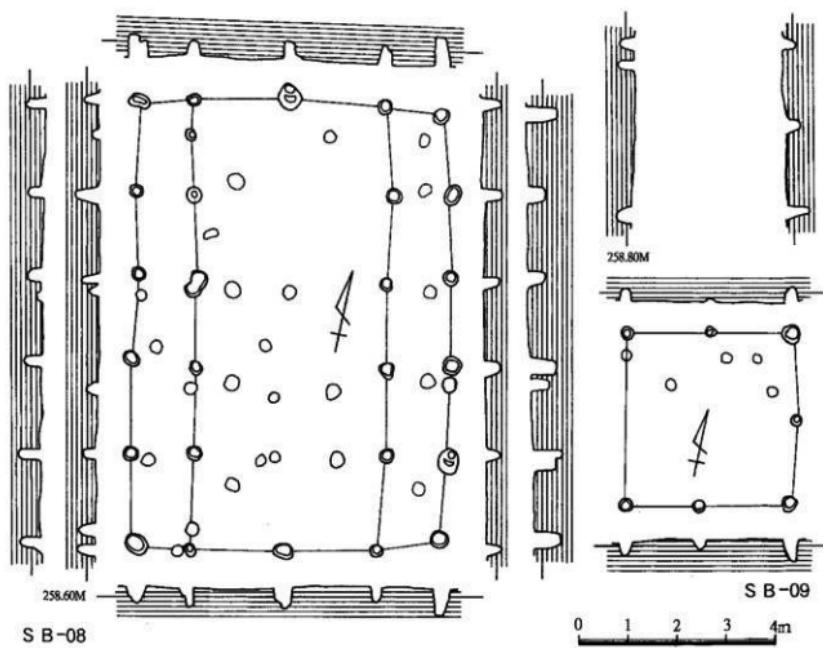
第154図 S A-01・02 遺構実測図



第155図 SB-01~03 造構実測図



第156図 SB-04~07 遺構実測図



第157図 SB-08~11 造構実測図

内外で、西壁に幅10~22cmのテラスがある。柱穴は2基で、直径26~33cm・深さ44~50cmを測る。

出土遺物は無いが、中世の竪穴状遺構と思われる。

建物遺構は掘立のみで、西側に19棟、東側に9棟を確認した。

S B-01 (第155図)

調査区の西端中央部に位置した、梁行1間(4.02~4.05m)・桁行3間(6.40~6.44m)の南北方向の身舎の、北~西面に廂が付く。柱穴の規模は、直径20~36cm・深さ10~52cmを測る。主軸方位は、N 2°Wである。北側は数10cm削失している。

S B-02 (第155図)

01号建物の東桁に重複した、梁行2間(4.0~4.28m)・桁行2間(4.16~4.44m)の方形の建物である。柱穴の規模は、直径16~32cm・深さ10~24cmを測る。主軸方位は、N 4°Wである。

S B-03 (第155図)

01・02号建物の南側に重複した、梁行2間(4.0~4.04m)・桁行5間(9.95~10.20m)の東西方向の身舎の、北と南面に廂が付く。柱穴の規模は、直径13~42cm・深さ10~42cmを測る。主軸方位は、N 84°Eである。廂を含む面積は60.5m²で、Ⅷ区の中で最大規模である。

S B-04 (第156図)

03号建物の西に重複した、梁行2間(4.05~4.12m)・桁行3間(6.17~6.21m)の南北方向の身舎の、4面に幅半間の廂が付く。柱穴の規模は、直径18~38cm・深さ18~50cmを測る。主軸方位は、N 8°Wである。

S B-05 (第156図)

03・04号建物の南側に位置した、梁行1間(3.80~3.91m)・桁行3間(6.08~6.33m)の東西方向の建物である。柱穴の規模は、直径19~34cm・深さ15~59cmを測る。主軸方位は、N 81°Eである。

S B-06 (第156図)

05号建物と重複した、梁行2間(3.90~4.10m)・桁行3間(6.34~6.45m)の東西方向の身舎の、東面に幅半間弱の廂が付く。柱穴の規模は、直径19~39cm・深さ13~47cmを測る。主軸方位は、N 82°Eである。

S B-07 (第156図)

06号建物の南に位置した、梁行1間(3.78~3.84m)・桁行3間(6.16~6.20m)の南北方向の身舎の、北面に幅半間の廂が付く。柱穴の規模は、直径21~33cm・深さ12~50cmを測る。主軸方位は、N 10°Wである。

S B-08 (第157図)

07号建物と重複した、梁行2間(3.80~3.90m)・桁行5間(9.12~9.20m)の南北方向の身舎の、西・東面に廂が付く。柱穴の規模は、直径23~48cm・深さ21~61cmを測る。主軸方位は、N 11°

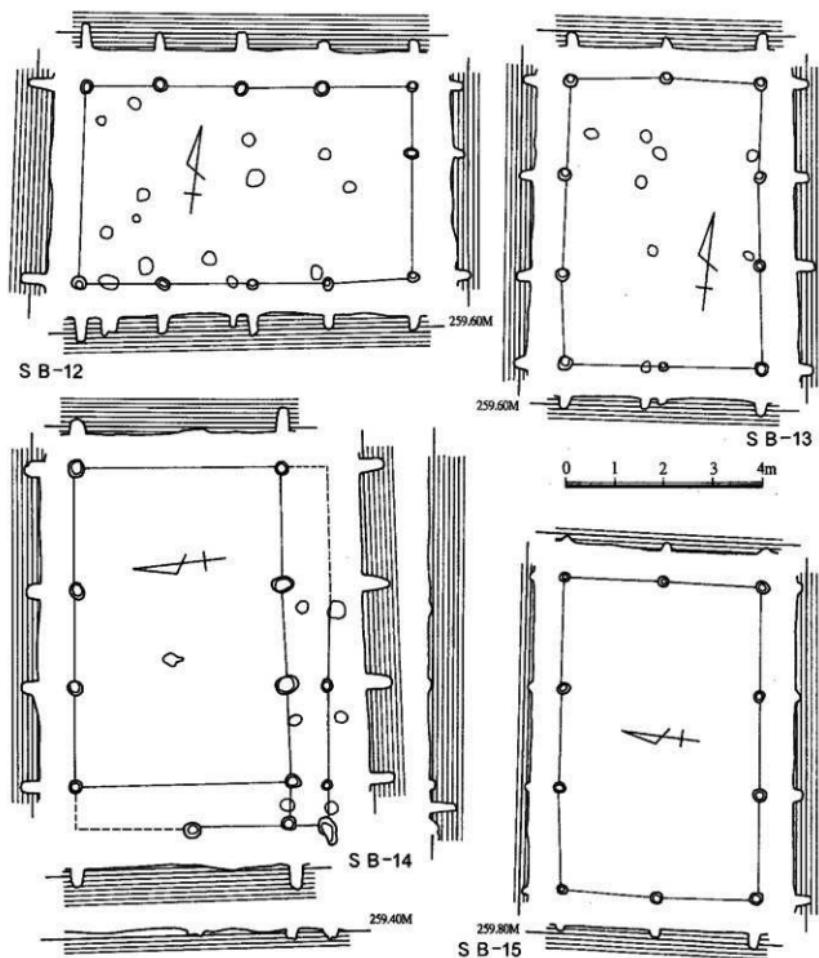
Wである。

S B-09 (第157図)

06号建物と重複した、梁行2間(3.33~3.35m)・桁行2間(3.48~3.55m)の方形に近い建物である。柱穴の規模は、直径21~37cm・深さ10~44cmを測る。主軸方位は、N12°Wである。

S B-10 (第157図)

西群の東端に位置した、梁行2間(3.82~4.0m)・桁行3間(7.39~7.48m)の南北方向の建



第158図 S B-12~15 透構実測図

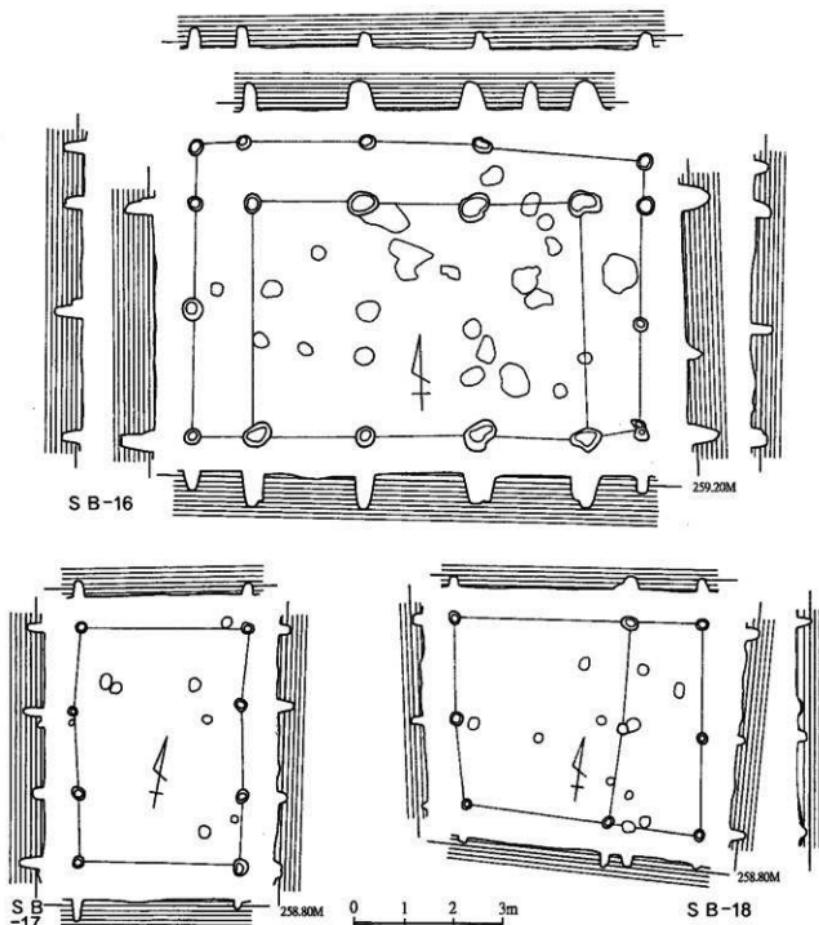
物である。柱穴の規模は、直径16~37cm・深さ16~30cmを測る。主軸方位は、北である。

S B-11 (第157図)

西群の南端に位置した、梁行2間(3.94~4.04m)・桁行3間(6.78~6.91m)の東西方向の身舎の、北面に扉が付く。柱穴の規模は、直径26~38cm・深さ20~64cmを測る。主軸方位は、N78°Eである。

S B-12 (第158図)

10号建物の西側に重複した、梁行1間(3.88~4.06m)・桁行4間(6.55~6.73m)の東西方向の建物である。柱穴の規模は、直径20~28cm・深さ20~50cmを測る。主軸方位は、N83°Eである。



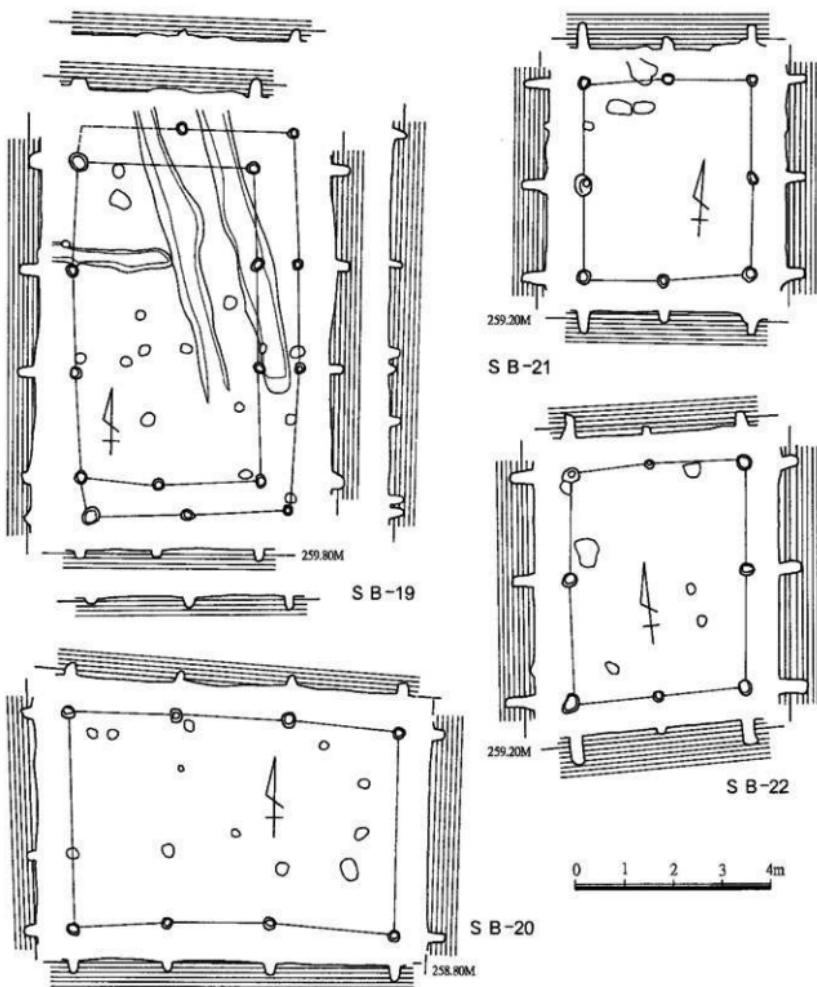
第159図 SB-16~18 造構実測図

S B-13 (第158図)

12号建物の南に位置した、梁行2間(3.85~3.97m)・桁行3間(5.78~5.88m)の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径16~26cm・深さ10~38cmを測る。主軸方位は、N 7°Wである。

S B-14 (第158図)

西群の北端に位置した、梁行2間(3.97~4.0m)・桁行3間(6.38~6.42m)の東西方向の建

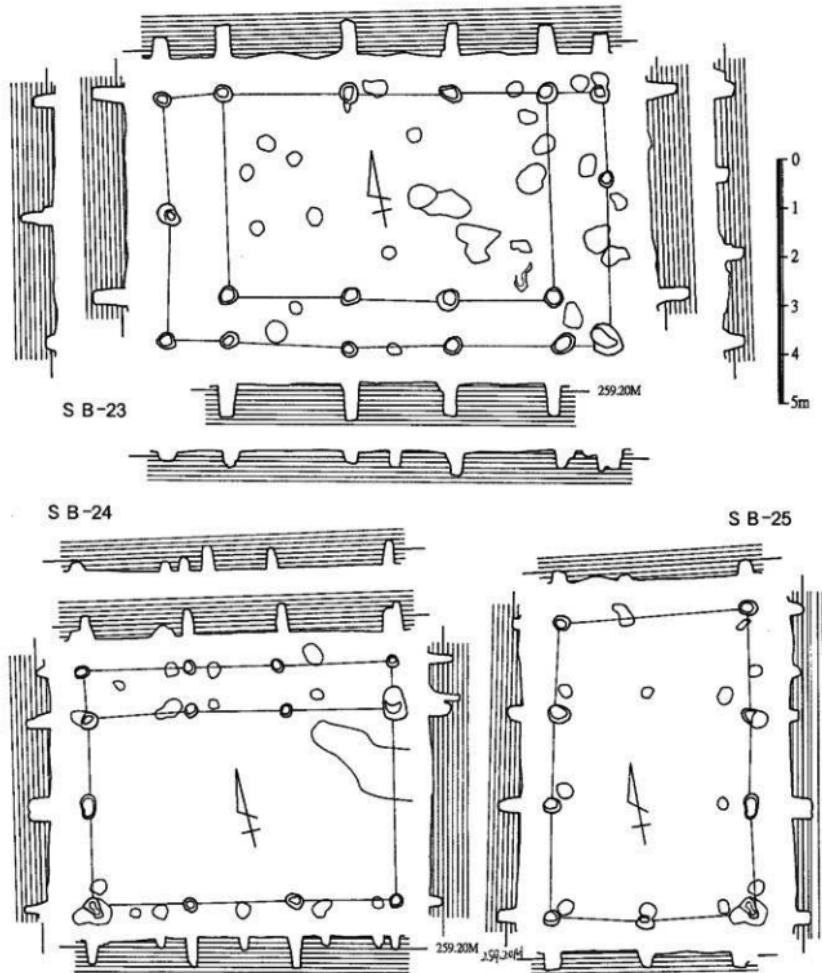


第160図 S B-19~22 造構実測図

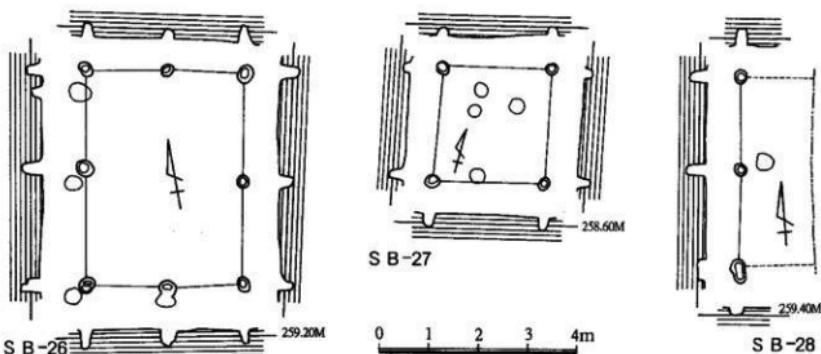
物である。柱穴の規模は、直径16~27cm・深さ8~32cmを測る。主軸方位は、N83°Eである。柱穴の上位は、数10cm削失している。

S B-15 (第158図)

東群の東中央部に位置した、梁行1間(4.11~4.32m)・桁行3間(6.40~6.54m)の東西方向の身舎の、西~南面に廟が付く。柱穴の規模は、直径20~46cm・深さ10~56cmを測る。主軸方位は、



第161図 S B-23~25 遺構実測図



第162図 SB-26~28 造構実測図

N85°Wである。

SB-16 (第159図)

東群の南西部に位置した、梁行1間(4.76~4.84m)・桁行3間(6.75m)の東西方向の身舎の、西~北~東面に廟が付く。柱穴の規模は、直径26~52cm・深さ28~72cmを測る。主軸方位は、N87°Eである。廟を含めた面積は51.2m²で、VII区では3番目に大きい。南桁の柱穴から、青磁碗の破片(776)が出土している。

SB-17 (第159図)

西群の中央寄りに位置した、梁行1間(3.24~3.34m)・桁行3間(4.80~4.84m)の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径17~27cm・深さ16~44cmを測る。主軸方位は、N9°Wである。南に廟が付く可能性がある。

SB-18 (第159図)

17号建物の北に隣接した、梁行1間(2.90~3.60m)・桁行2間(3.82~4.10m)の南北方向の身舎の、東面に廟が付く。柱穴の規模は、直径14~30cm・深さ7~28cmを測る。主軸方位は、N2°Wである。

SB-19 (第160図)

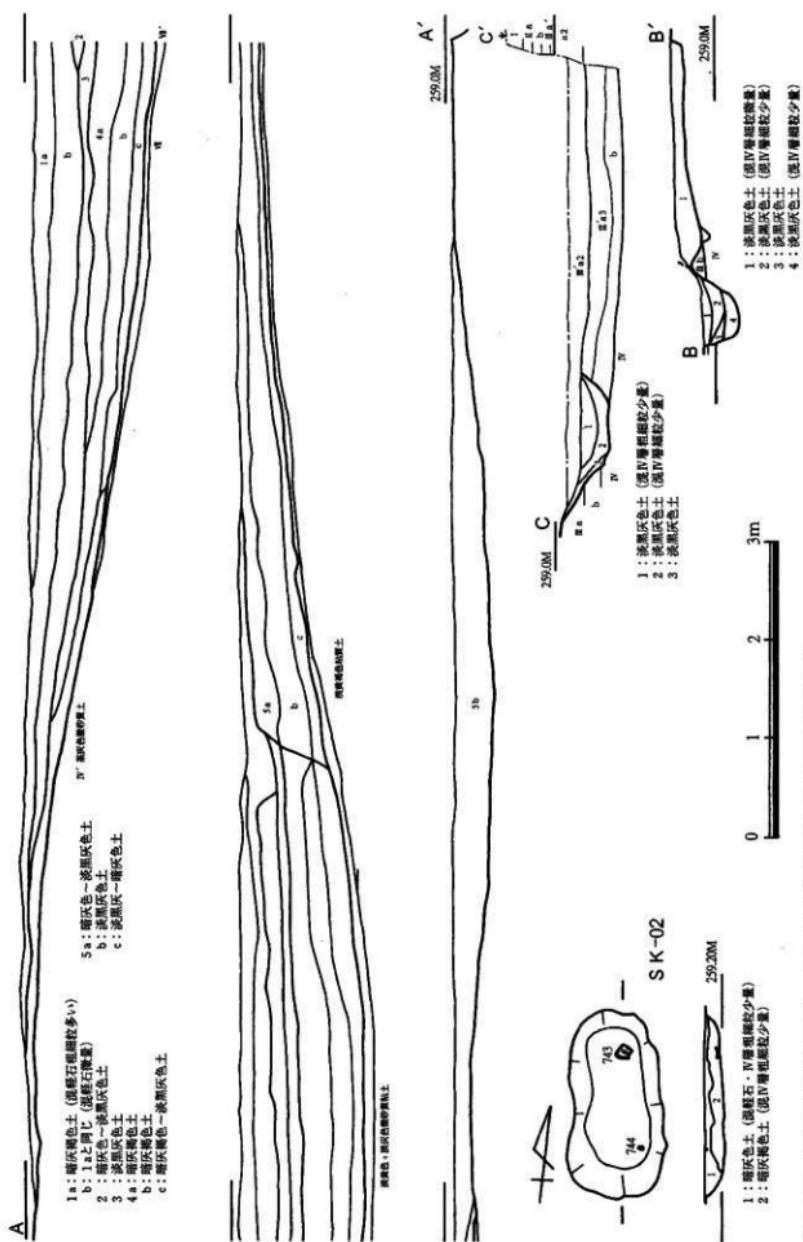
西群の北東部に位置した、梁行2間(3.50~3.60m)・桁行3間(6.40~6.44m)の南北方向の身舎の、北~東~南面に廟が付く。柱穴の規模は、直径17~39cm・深さ15~39cmを測る。主軸方位は、N2°Wである。

SB-20 (第160図)

西群の中央東寄りに位置した、梁行1間(4.14~4.45m)・桁行3間(6.44~6.66m)の東西方向の建物である。柱穴の規模は、直径20~28cm・深さ17~34cmを測る。主軸方位は、N87°Wである。

SB-21 (第160図)

東群の南端に位置した、梁行2間(3.38~3.45m)・桁行2間(3.98m)の南北方向の建物である。



第163图 中央黑色带断面层序, SK-02断面实测图, SD-03断面层序图

柱穴の規模は、直径19~42cm・深さ23~52cmを測る。主軸方位は、N 3°Wである。

S B-22 (第160図)

21号建物の北に位置した、梁行2間(3.50m)・桁行2間(4.60~4.70m)の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径15~36cm・深さ12~60cmを測る。主軸方位は、N 5°Eである。

S B-23 (第161図)

16号建物と重複した、梁行1間(4.16~4.22m)・桁行3間(6.53m)の東西方向の身舎の、西~南~東面に扉が付く。柱穴の規模は、直径30~47cm・深さ20~77cmを測る。主軸方位は、N77°Wである。

S B-24 (第161図)

23号建物の北1mに位置した、梁行2間(3.80~3.93m)・桁行3間(6.12~6.17m)の身舎の、北面に扉が付く。柱穴の規模は、直径22~45cm・深さ22~64cmを測る。主軸方位は、N78°Wである。

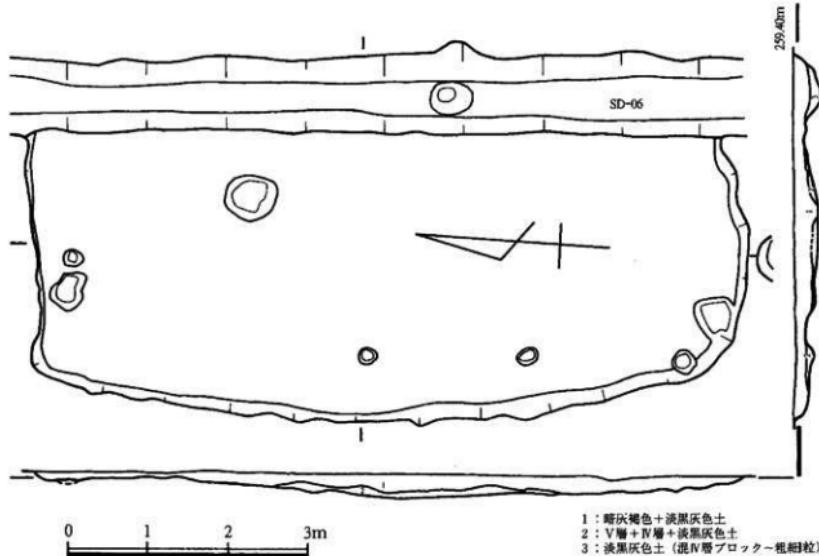
S B-25 (第161図)

24号建物の西に位置した、梁行2間(3.76m)・桁行3間(6.0~6.22m)の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径28~43cm・深さ14~43cmを測る。主軸方位は、N11°Eである。

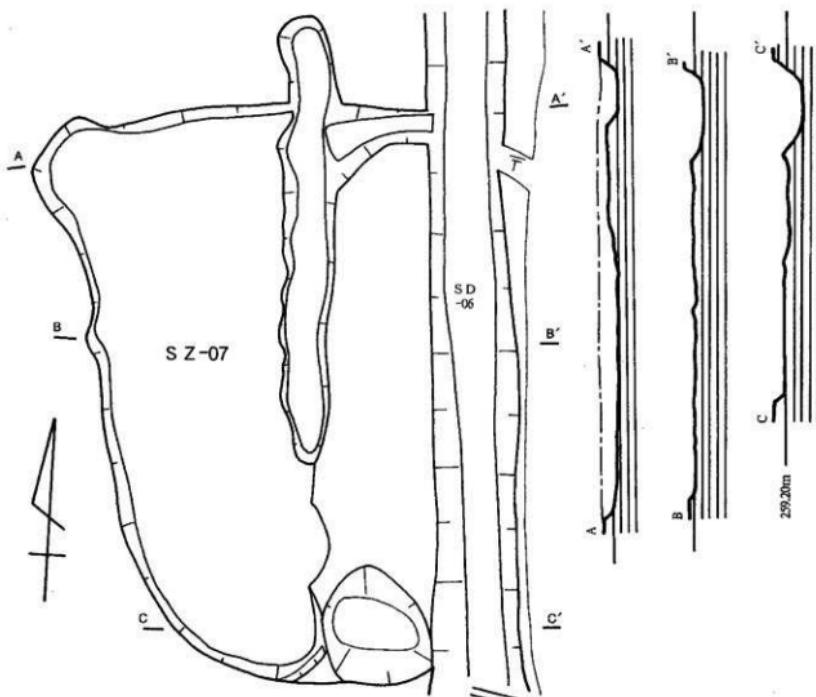
S B-26 (第162図)

25号建物と重複した、梁行2間(3.18~3.22m)・桁行2間(4.33~4.46m)の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径19~26cm・深さ16~27cmを測る。主軸方位は、N 9°Eである。

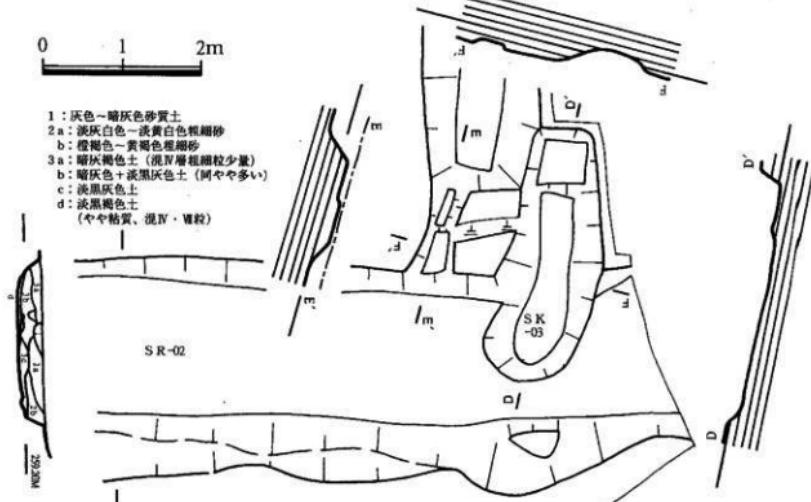
S B-27 (第162図)



第164図 S Z-06 遺構実測図



- 1: 暗灰白色～暗黃白色砂質土
 2a: 淡灰白色～淡黃白色粗細砂
 b: 灰褐色～黃褐色粗細砂
 3a: 暗灰褐色土 (塊状層粗細粒少量)
 b: 暗灰色～淡黑色土 (同やや多い)
 c: 淡黑色土
 d: 淡黑色土
 (やや粘質、混泥・雜粒)



第165図 VII区南東部 遺構実測図

西群の07・08号建物の西南部に重複した、梁行1間（2.22m）・桁行1間（2.30～2.38m）の方形に近い建物である。柱穴の規模は、直径23～28cm・深さ18～38cmを測る。主軸方位は、N 8°Wである。

S B-28 (第162図)

東群の北東端に位置した、梁行2間（3.90m）の東西方向の建物と推定される。柱穴の規模は、直径23～28cm・深さ18～38cmを測る。

その他、27号建物の北側に重複する1間×1間の建物など、西・東各群に数棟存在したようであるが、明瞭ではないため、省略する。

建物にならない柱穴として、13号建物の東2m程の所に、長さ3間の南北方向の並びがあり、構状の遺構としておく（S F-01）。

土坑は、3基検出した。01号土坑は調査区の西端北寄りに位置した、長径85cm・短径65cm以上の楕円形を呈し、深さは31cmを測る。

S K-02 (第163図)

調査区の東南部に位置した、長径1.93m・短径0.8～1.0mの楕円形を呈する土壙墓と推定され、深さは15～20cmを測る。南側が広く深いことから、頭位は南かもしれない。出土遺物としては、陶器皿の破片（744）と備前焼擂鉢の破片（743）があるが、副葬品とは言い難い。

S K-03 (第165図)

調査区の南東端に位置した、長径3.3m・短径0.8～1.27mの楕円形を呈し、深さは30～40cmを測る。北側60cmまでの底面は、南側よりも10cm程高い。出土遺物は無く、性格は不明である。

S Z-02

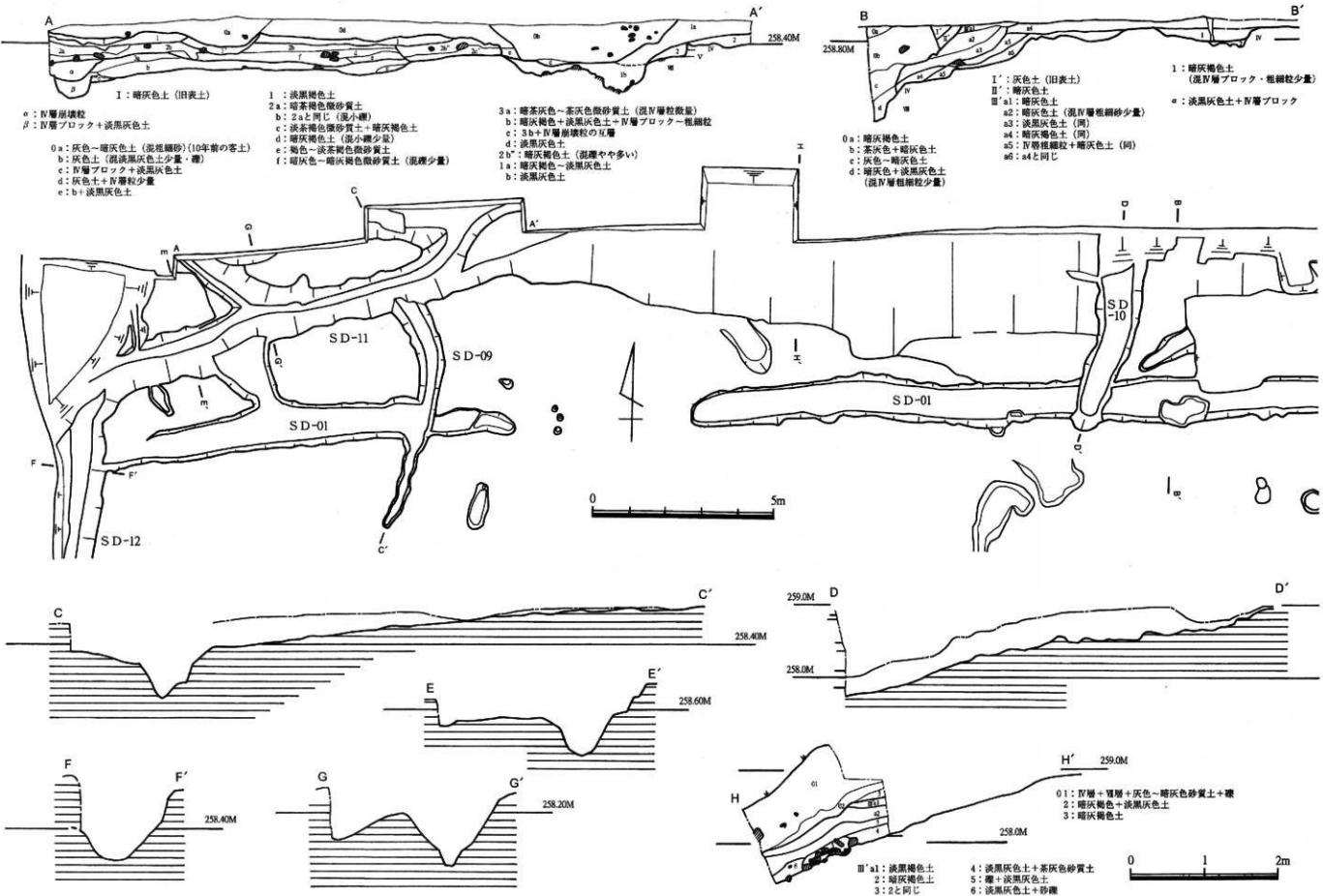
調査区の北東部に位置した、長さ7.5m・幅4.5mの歪な形を呈し、深さ35～50cmを測る。壁面は垂直一抉れ、流水によって覆土が充填しており、西に隣接する不定形土坑も同時に埋没している。人為的掘り込みではないが、近世初期の陶器皿1点（856）が出土している。

S Z-06 (第164図)

調査区の東端中央やや南寄りに位置した、長さ9m・最大幅3.7mの大型土坑で、東側は06号溝と一体化している。深さは7～32cmを測り、底面は鉄製工具（鍬）痕を残す荒掘りのままである。柱穴は伴わない。出土遺物としては、白磁の皿（761）や青磁の皿（788）などがある。

S Z-07 (第165図)

06号の南2.2mに位置した、長さ7.4m・最大幅5mの逆D字型を呈する大型土坑で、東側は、06号溝と一体化する。深さは10～25cmを測り、底面は06号と同様である。中央部には、長さ5.7m・幅0.52～0.65mの、溝状を呈するように見える部分がある。機能は06号と同様、推定し難い。



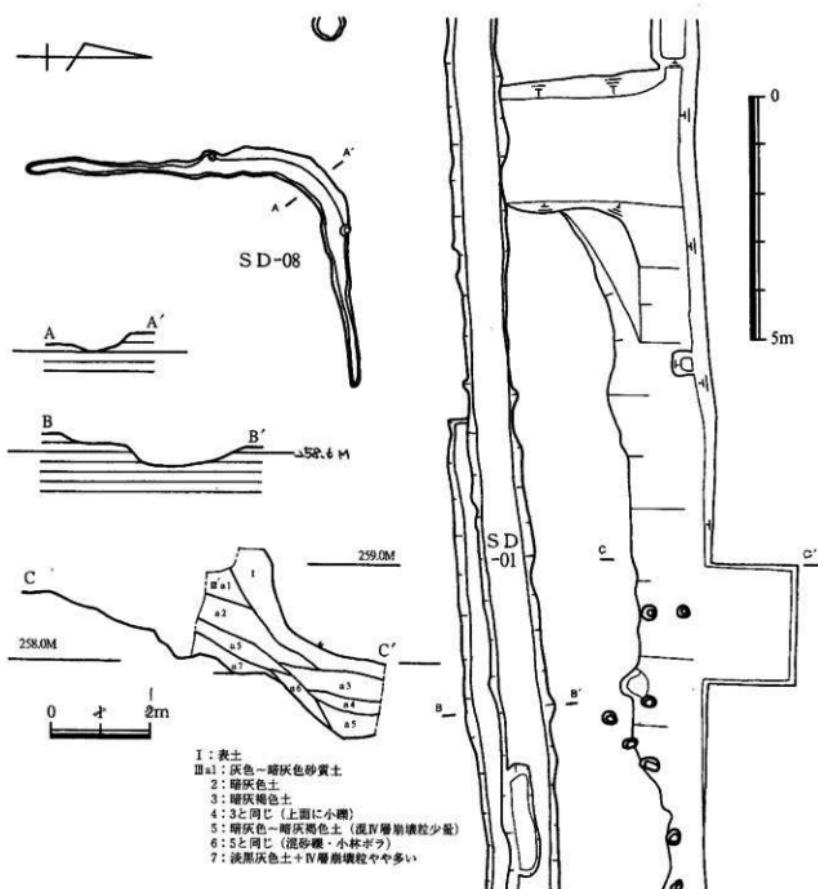
第166図 北西端～北縁 造構実測図

溝状遺構は、VI区と同様、郭の区画溝と考えられるもの（01・03～06・08・12溝）と、北の低い郭（Ⅴ区）へ下りる階段状の掘り込み（09・10号溝）がある。07号溝は、南縁の02号道路跡埋没後の近世～近代の溝である。

SD-01 (第153・166図)

調査区の北縁寄りに位置した、幅0.92～1.8mの東西方向の溝で、63.8mを検出した。途中、09号溝の東側で、長さ4.8m分が途切れている。

SD-02



第167図 北縁中央付近 遺構実測図

西建物群の03号建物から18・19号建物まで重複した、長さ18m・幅25~65cm・深さ3~10cmの溝である。

S D-03

東群の建物を囲む溝で、南端から50mで東へ屈曲し、東端まで続く。東端は幅広くなっていることから、06号溝と東へ延びる分岐点の可能性もある。ただし、06号溝は主軸方位が異なる。幅は0.7~1.7mで北側が広く、深さは18~60cmを測り、東側が深い。北東部は埴層が露呈し、60cm前後削失している。

S D-05

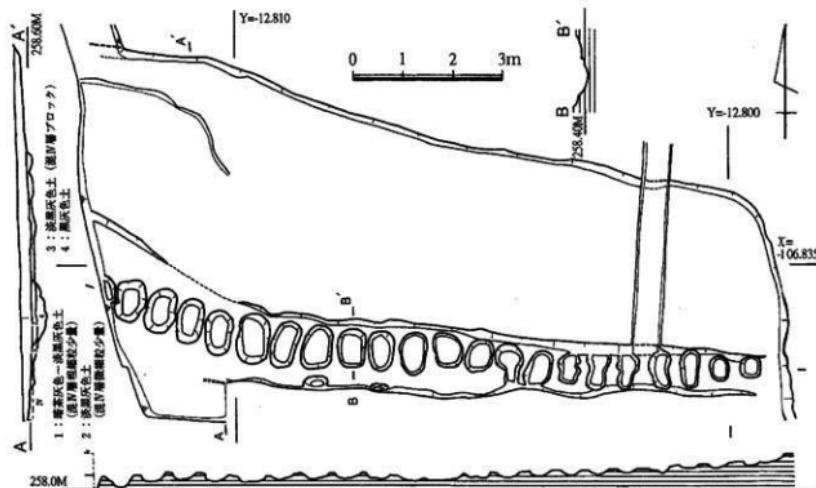
調査区の北東部、03号溝の3~3.5m南側に位置した、幅35~43cm・深さ4~10cmの溝で、東西方向は長さ12m程で南へ屈曲し、8.5m程を検出した。

S D-06

調査区の東縁に位置した、幅1.05~1.62m・深さ45~55cmの溝で、北端は03号と重複するか、東へ屈曲すると推定される。南端は収束するが、02号道路跡と幅32~65cm・深さ5~10cmの小溝で繋がっている。出土遺物は少ないが、備前焼大甕の胴部片等が出土している。

S D-07

調査区の南縁に位置する02号道路跡の東端部に重複し、東端から西へ10m程で02号道路跡の南肩部に重複し、西へ延びているが、現代の用排水路構築時に擾乱されているため、明確なプランは検出していない。出土遺物は豊富で、近世初頭~近代までの陶磁器（第174図-835~第176図-918）や



第168図 S R-01 造構実測図

土製品（第170図-750～754）などがある。

S D-08 (第167図)

調査区の中央北側で検出した、幅17～65cm・深さ3～17cmのL字型で、東の延長は05号溝に当たり、幅・深さ・覆土とも類似することから、05号溝に対応する北西隅の区画溝として位置づけられる。出土遺物は無いが、Ⅲ b層上面から切り込んでいることから、山城初期の区画溝の可能性がある。

S D-09 (第166図)

調査区の北西部、01号溝と直交し、北側へ降りる階段状掘り込みであるが、南端から北へ4.6m程で大きく北西へ屈曲する。幅25～85cm・深さ4～47cmを測る。

S D-10 (第166図)

09号溝の17m東に位置した、幅0.9～1.25m・深さ36～42cmを測る階段状掘り込みである。形状は09号溝と類似し、途中で屈曲する。

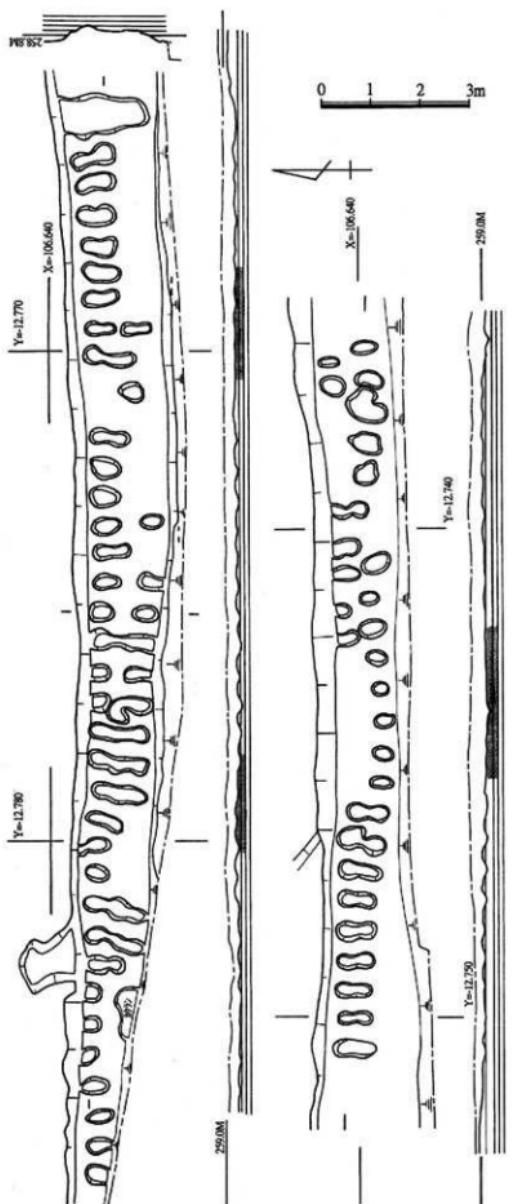
S D-11 (第166図)

調査区の北西端、傾斜変換部に位置した、幅0.9～1.4m・深さ0.7～1mの薬研掘り状を呈する。

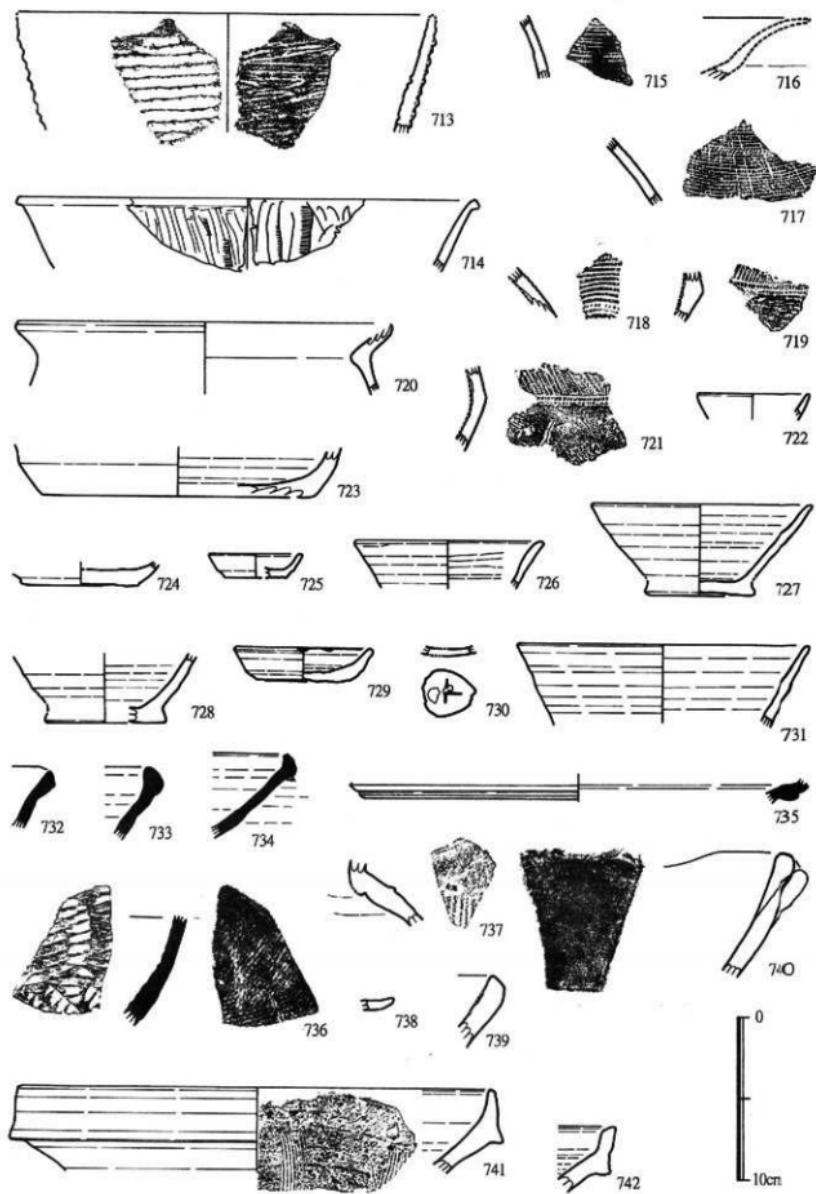
西端は、約10年前に埋められた水田の開墾時に削失している。東端の高位面の掘方は、斜面削平面の掘方と繋がっている。

S D-12 (第166図)

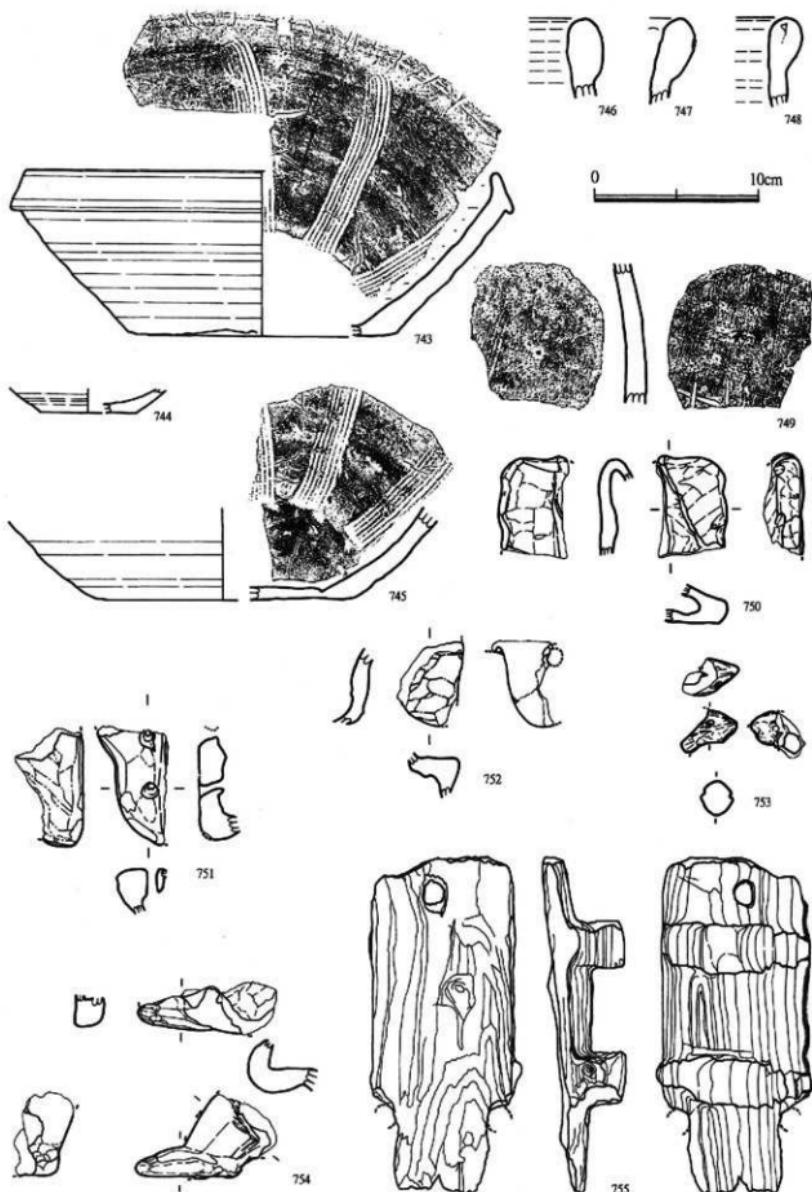
調査区の北西縁、現代の谷と並行する、幅1.3m以上・深さ80～



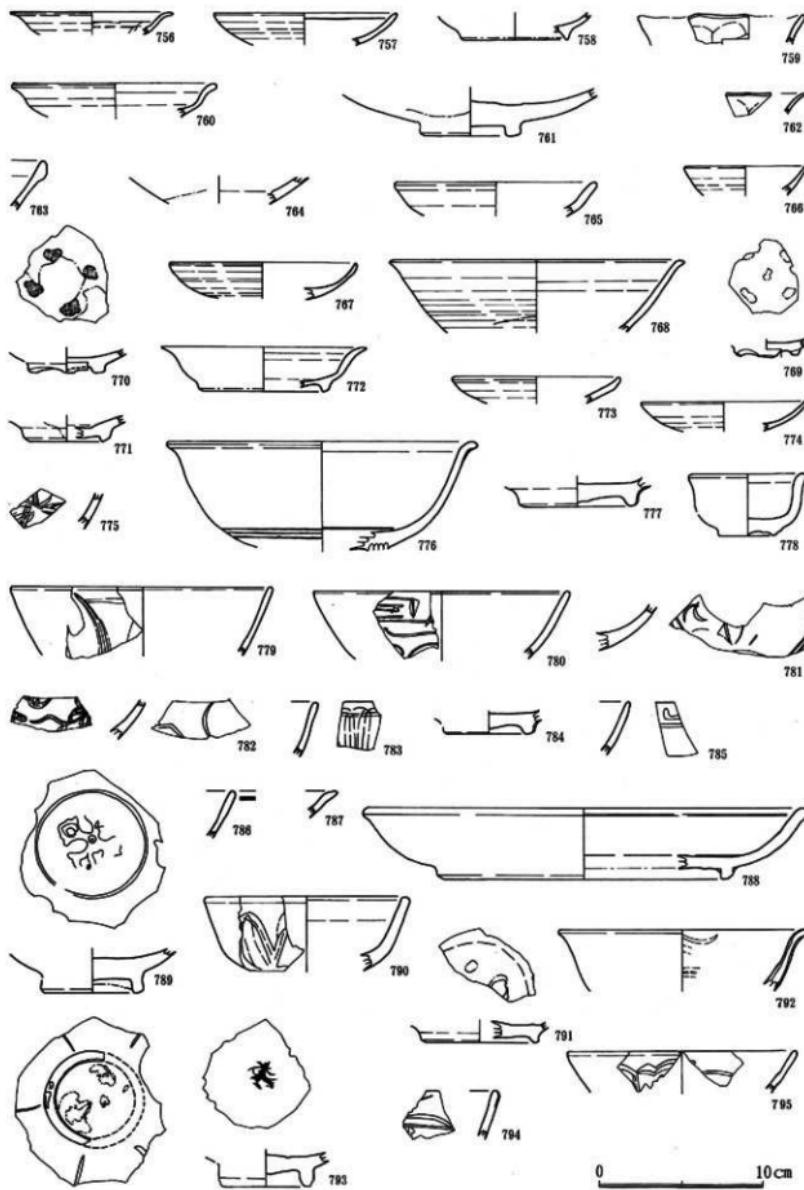
第169図 S R-02 波板状土坑 造構変測図 アミ日は鉄分沈積硬化面



第170図 VII区出土遺物実測図（1） 714～715：SA-01, 722：SK-02, 723～724・730～737・739～742：SD-07, 725：SZ-06, 731：SH-01
713・716～718・720～721・726～727・729・732～733：IIa, 719・728・735～736：IIa層, 734・738：IIa層中央擾乱



第171図 VII区出土遺物実測図 (2) 743~744: SK-02, 745: SD-02, 746~755: SD-07, 747: SK-01, 748: II層

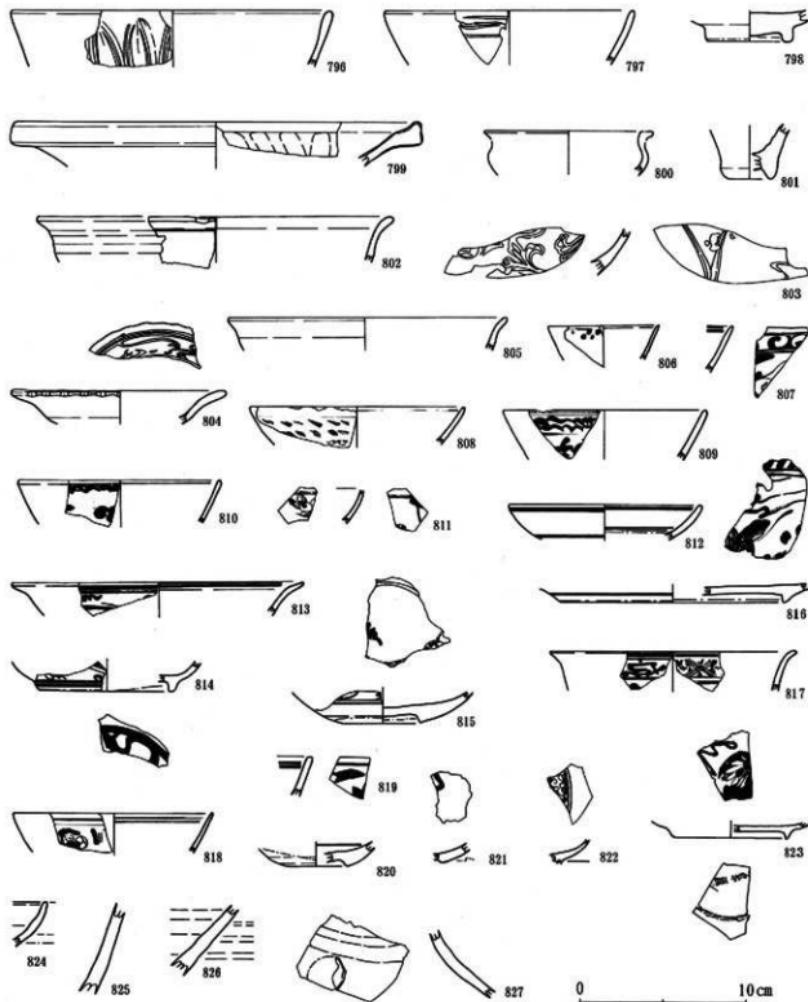


第172図 VII区出土 輸入陶磁器実測図（1） 白磁・青磁

756-758・760-780・782-784 : SD-07, 781 : SD-36, 757 : SD-01, 759-761, 785-786, 788-790, 795 : SA-01, 777-779 : SA-02, 783-784, 791-793 : SA-03, 782-786-788-790-794-795 : SA-04, 771-773-778 : II-01, 779-781-783-784-786-788-790-792-793 : II-02, 790-791-793-794-795 : II-03, 776-777-778-779-780-781-782-783-784-785-786-787-788-789-790-791-792-793-794-795 : III-01, 775 : III-02, 776 : III-03, 777 : III-04.

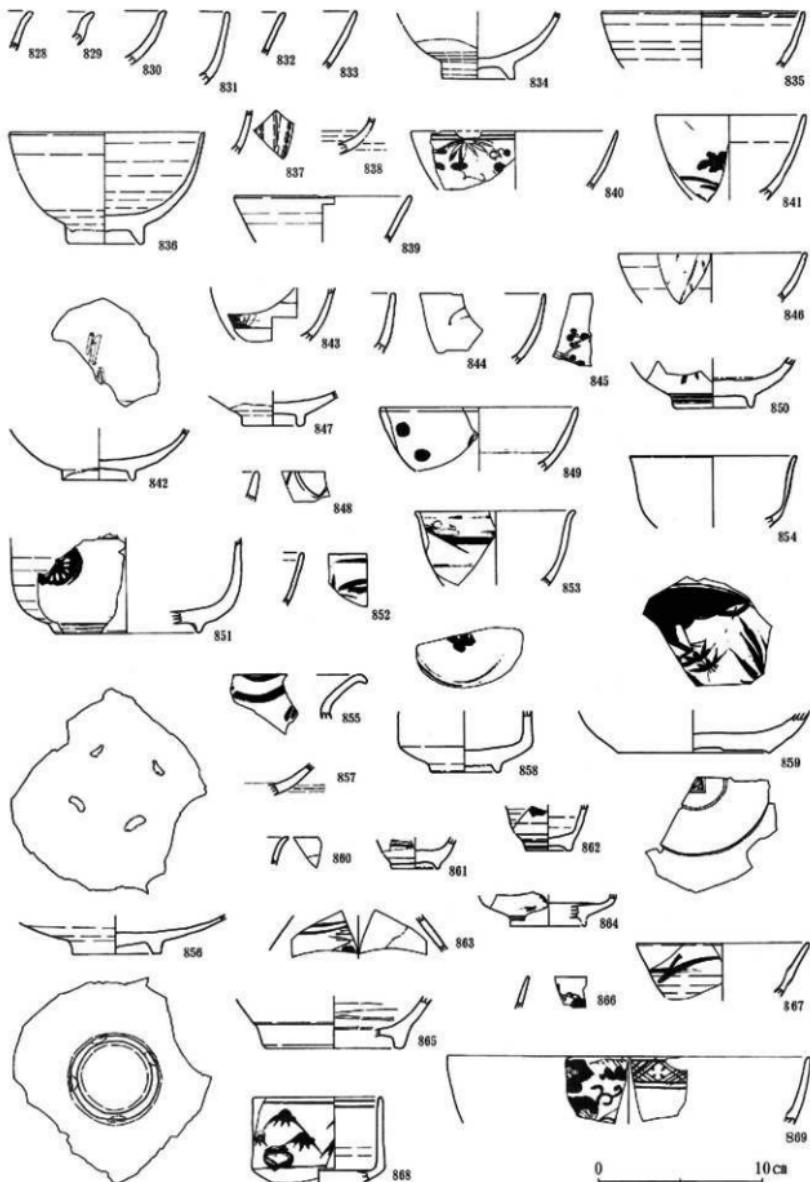
98cmの溝で、底面の幅は20~30cmと狭い。規模的には、11号溝とは繋がらない。

道路状遺構は2条検出し、若干の時期差があると推定される。



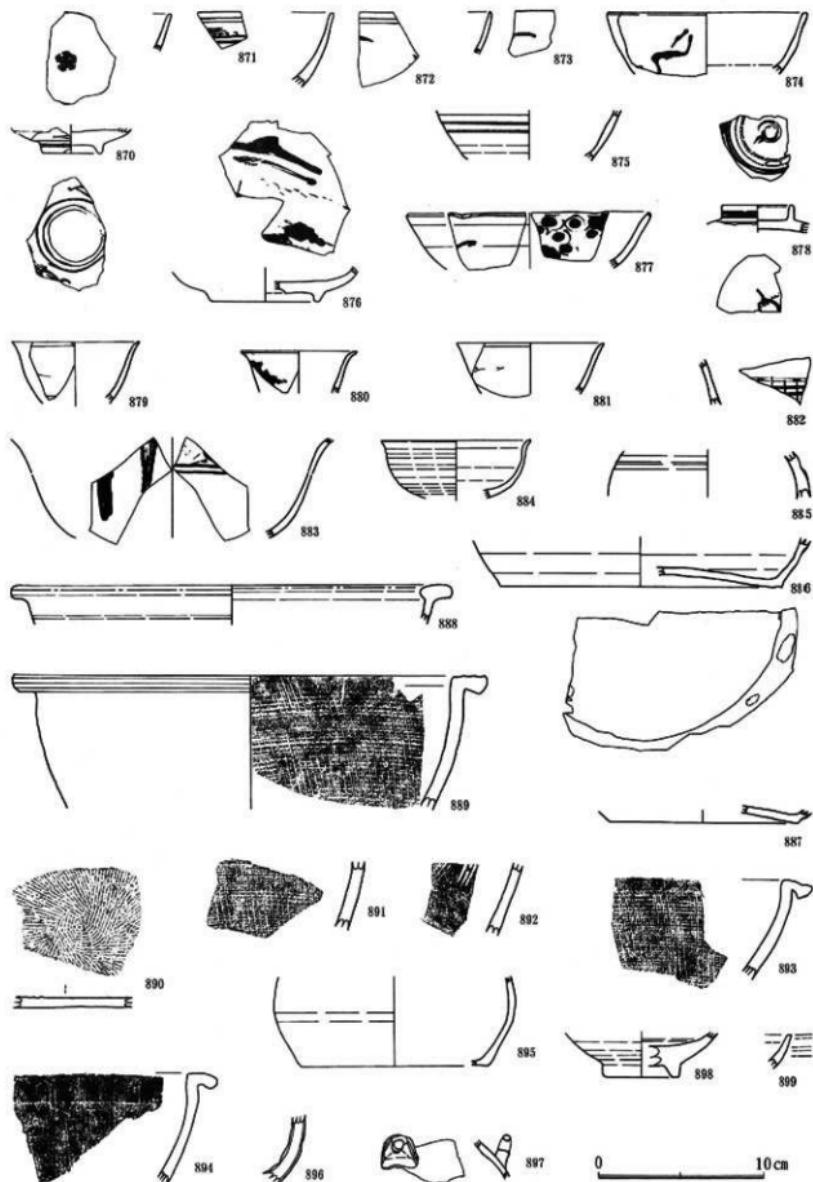
第173図 VI区出土 輸入陶磁器実測図(2) 青磁(2)・青花

806~816・825: SD-07, 796~801・817~824・827: 西壁,
802~804・818~822・825: 北壁, 805: 北端壁面, 823: 北
端中央底面

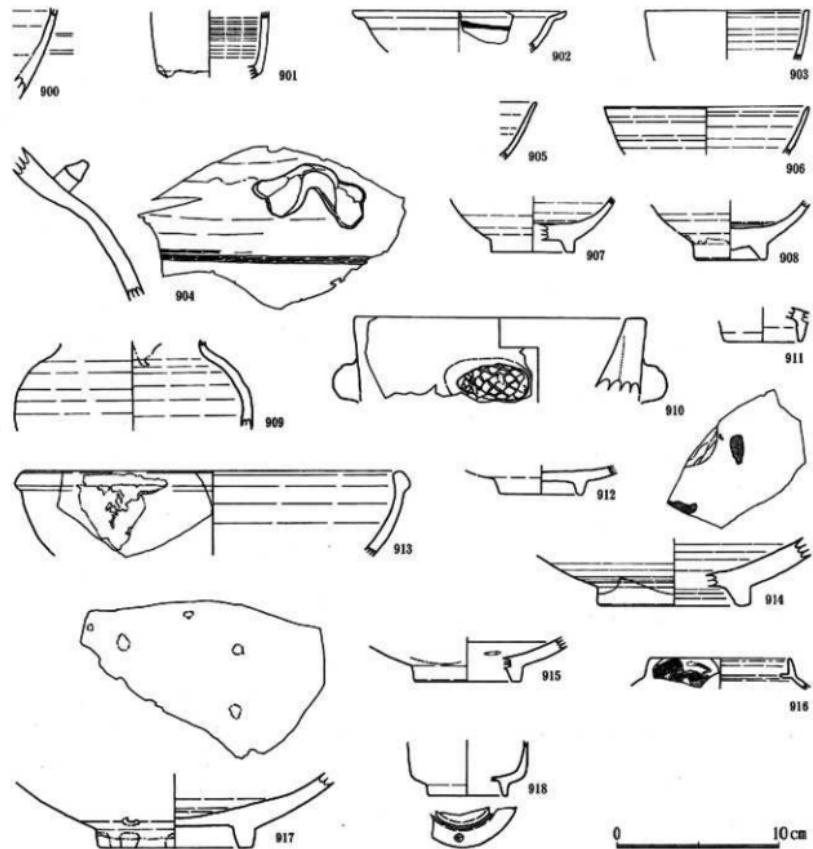


第174図 VII区出土 近世国産陶磁器実測図（1）

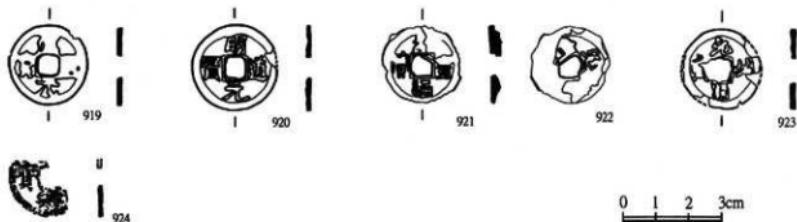
828・830～833・835～837・840・843・845～853・855・858・860～863・865・867～869：
SD-07, 856・SD-03, 829・838：II-16, 834・841・844・857・864：II-15, 854：II-17号,
859：I-16, 839・866：北海三号、842：北海中央挖孔。



第175図 VII区出土 近世国産陶磁器実測図（2） 870-872・874-892・894-897・899: SD-07、873・883: II層、888: 北端-07
底孔



第176図 VI区出土 近世国産陶磁器実測図（3） 900・904～910・913～914・916～918：SD-07、901～903：II号、911：I-II号、912：II号、915：北端部器
：II号、916～918：SD-07、901～903：II号、911：I-II号、912：II号、915：北端部器



第177図 VI区出土 錢貨実測図 919：237、924：492、920：II号、921～923：II号

S R -01 (第168図)

調査区の西南部において、東西14m・南北6~7.6mの範囲で、深さ12~20cmの掘り込みを検出しさるに幅0.8~1.8mの範囲が掘り下げられ、楕円形~双円形の波板状土坑が連続する。波板状土坑は、長さ43~103cm・幅27~65cm・深さ8~15cmを測る。西端の土坑2基は深さが25~30cmと深くなっているが、全体的には、底面は東から西へ緩やかに下降している。

底面は固く、相当年の使用を推定できる。西の延長は、推定困難である。覆土は殆ど混じりの無い淡黒灰色土で、遺物も含まないが、文明ボラを含まないことから14~15世紀前半の遺構と推定される。

S R -02 (第169図)

東西77m程を検出したが、延長部分の行方は推定困難である。

東端16m程は南の肩が検出でき幅2.1~2.45mで、深さは16~42cmを測る。

西側22m分と、中央やや東寄り15m分には、楕円形~双円形~三連円形の波板状土坑が連続する。波板状土坑は、長さ35~170cm・幅20~85cm・深さ5~10cmを測る。底面3ヶ所・各々2~3mの範囲に、鉄分が沈積して硬化した面が認められた。

覆土は01号と同様で、出土遺物も殆ど無い。

航空写真終了後、調査区中央の黒色帯を掘り下げた（第163図）。

覆土の中位まで（1a~3層）は中世の土器細片が少量出土するが下半~底面までは殆ど出土しない。下半~下層は水分が多く粘性が強くなり、IV層も純粹ではない。軟弱な地層であることから、あえて遺構を構築することがなかったと推定される。

最深部は1.35mを測り、覆土は緩やかな自然堆積であり、15世紀には完全に埋没している。

なお、北西隅の落ち込みは、10年程前まで存在した水田の整地跡であり、調査区北縁中央部の搅乱は、10年程前の地滑りに伴う重機による削平痕である。

出土遺物（第170~177・189・190図）

縄文時代の遺構は無いが、縄文土器片1点（713）が出土している。

弥生時代、01号住居関係以外では、打製石錐1点（979）と石包丁片（980）が出土している。

古墳時代~9世紀後半頃の遺物は、VI区と同様、出土していない。

古代、9世紀後半以降、土師器のほか、瓦器（730）・灰釉陶器（731）・須恵器（735・736）などが出土したが、当該期の遺構は無い。ただ、中央黒色帯の上層から細片ながら比較的多く土師器片が出土しているので、削平著しい北西部に、何らかの遺構が存在していた可能性が高い。白磁の碗1点（763）は、遺物包含層出土であるがかなり磨滅しており、古代末頃と推定される。

中世の遺物は多く、土師質土器のほか、東播系須恵器（733・734）・瓦質土器（740）・備前焼雷鉢（741~743・745）・甕（746~749）等の国産品に加え、相当量の輸入陶磁器が出土している。白磁は切高台の皿と景德鎮の皿が多く、15~16世紀が主体である。青磁は、剣先蓮弁文碗と雷文帶

碗が多い。青花は景德鎮の碗・皿類が多い。このほか、褐釉陶器片も若干出土している。

金属製品は少ないが、錢貨6枚(919~924)や、用途不明品(968)などが出土している。

近世の遺物の殆どは02号道路跡の東端部から南縁にかけて重複する水路跡および攪乱層から出土しており、近世全般にわたる。前半の碗皿類は肥前が主体で、鉢・甕類は薩摩が主体であり、後半の主体は薩摩や南九州であることは、市内他遺跡と同様である。攪乱層からは近現代の陶磁器も相当出土したが、図化は割愛した。

750~754は素焼きの土人形片で、他に24点の部位不明片が出土しており、2~3個体分の一部だと思われる。755は02号道路西端付近の攪乱坑から出土した下駄で、磨滅・風化が著しい。遺存する長さは21cm・幅8.7cm・厚さ4~4.6cmの杉材で、近世末~近代の所産である。石製品は少なく若干の砥石や石臼のほか、用途不明の軽石製品(973~975)が出土している。

小結

弥生時代後期、堅穴住居1棟(検出した01号住居は、住居中心の一段低い面のみ遺存していたものと推定される)のみで構成された短期間の居住が営まれる。

古墳時代から9世紀前半までは、VI区と同様、生活の痕跡が無い。

古代、何らかの居住があったと推定されるが、遺構が遺存していない。

中世に入るとVI区のように区画溝で郭が形成され、建物も主軸方位によって大きく4期に分けられる。遺構の大略的変遷は、第5節にまとめている。15世紀頃には、VI区との境に波板状土坑を有する道路状遺構が構築され、山城外(西側)へ延びている可能性がある。

VII区へ繋がる斜面は斜めにカットされ、下り道が階段状に構築される。斜面下半は全く未調査に終ってしまったが、VIII区南縁の中程からVII区の高位面に上る幅1.5m程の農道が存在していたことから、人々、通路が存在していた可能性がある。

P. VII区

VII区の中間17~28m分は、土置き場としたために未調査となった。また、西端部12m分は、遣表土~Ⅲ層を重機で剥いだ後に遺構検出を実施し、顕著な遺構を検出しなかったことから、工事用道路の用地として早々と明け渡した。

遺構検出面はアカホヤの2次堆積層~VII層上面で、中央南側のみⅢb層上面で柱穴群を検出している。遺構面の標高は、VI区よりも3.2m前後低い。IV層(アカホヤ火山灰)の殆どは流失しているが、Ⅲ層以降は他地区と同様の自然堆積であり、客土や削平等の地形改変は認められず、元来、低い面であったようである。

遺構は、掘立柱建物跡17棟のほか、5~6棟分の柱穴、溝状遺構1条、土壙墓1基、円形土坑35基等を検出した。その他、自然陥没坑10基を確認した(第178図)。

S B-01 (第179図)

調査区の北東部に位置した、梁行2間(3.48m)・桁行3間(5.50~5.60m)の建物である。柱穴の規模は、直径16~28cm・深さ12~44cmを測る。主軸方位は、N 48°Eである。

S B-02 (第179図)

01号建物の80cm南に隣接した、梁行1間(3.44~3.48m)・桁行3間(4.82~5.04m)の身舎に、北~西面に幅半間の廊が付く。柱穴の規模は、直径16~25cm・深さ13~30cmを測る。主軸方位は、N 43°Wである。

S B-03 (第179図)

調査区の中央南寄りに位置した、梁行2間(4.0~4.03m)・桁行3間(6.44~6.66m)の身舎に北~西面に幅半間の廊が付く。柱穴の規模は、直径15~35cm・深さ11~43cmを測る。主軸方位は、N 79°Wである。**VII区**では最大の建物で、廊を含む面積は28.3m²を測る。

S B-04 (第179図)

調査区の中央やや西寄りに位置した、梁行1間(3.10~3.13m)・桁行3間(5.70~6.05m)の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径26~35cm・深さ36~50cmを測る。主軸方位は、N 13°Wである。

S B-05 (第180図)

04号建物の西に位置した、梁行2間(3.27~3.35m)・桁行3間

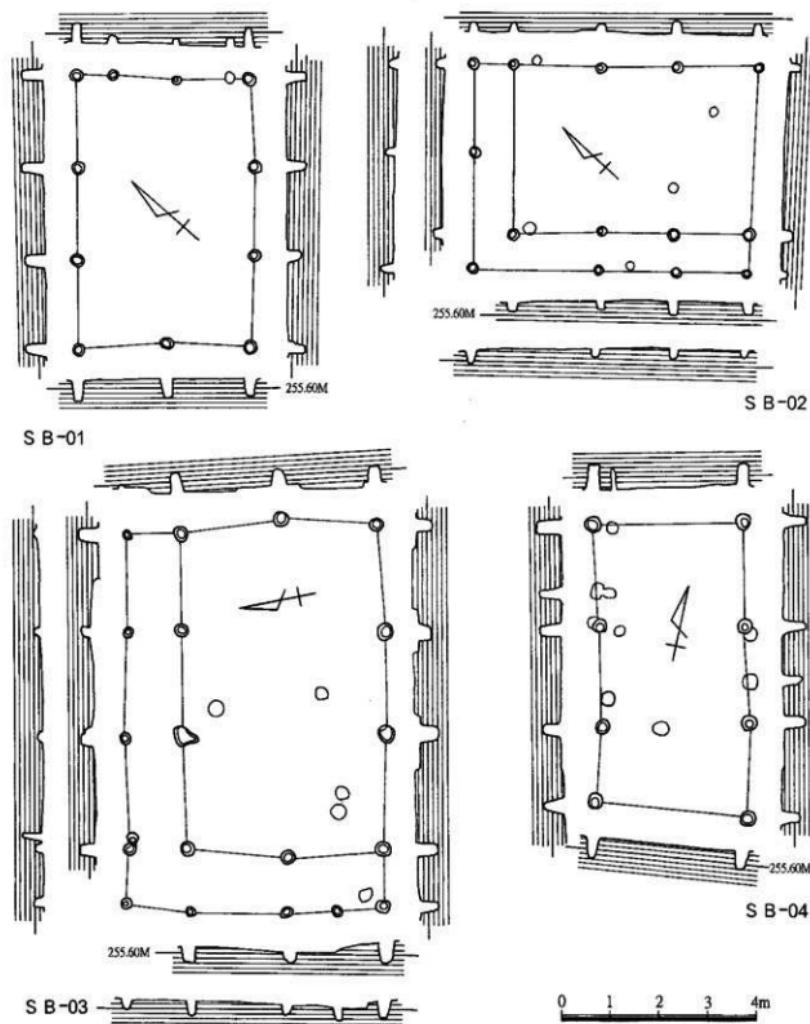


第178図 **VII区** 遺構分布図 2桁番号はSB

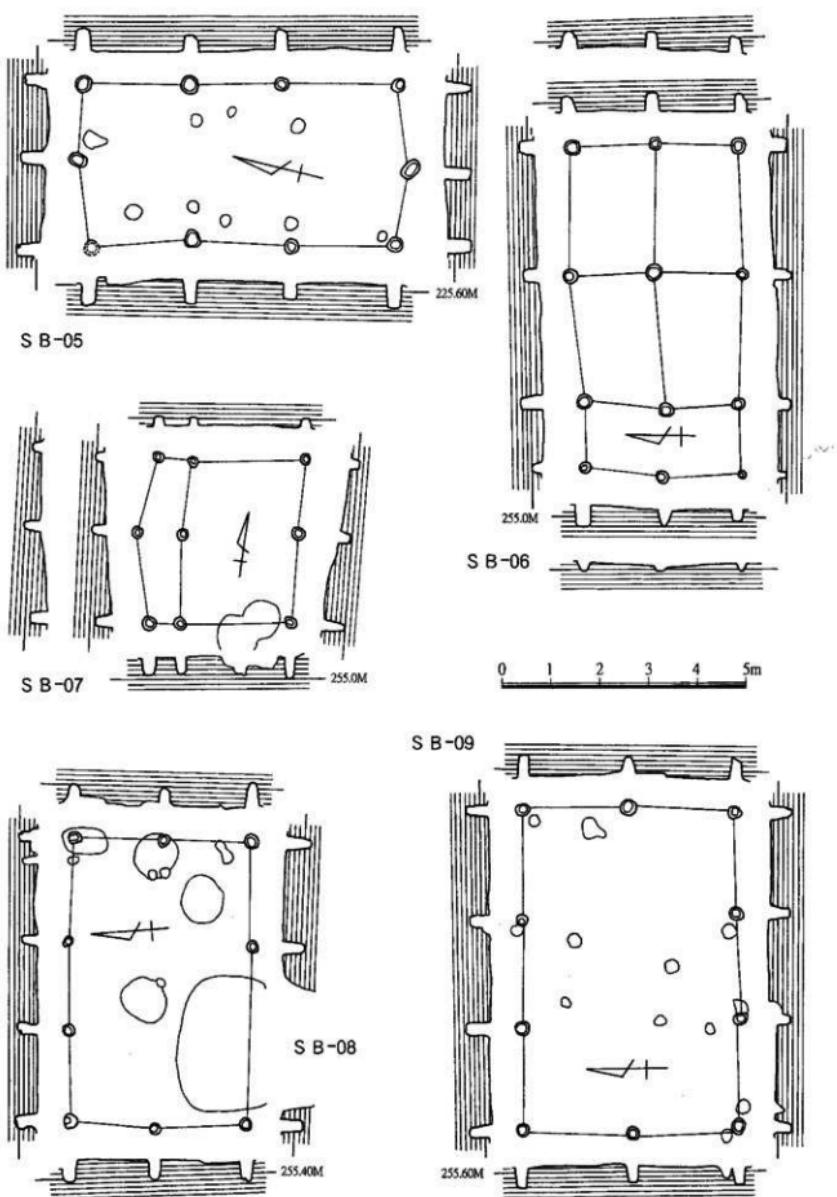
(6.20~6.42m) の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径24~42cm・深さ33~52cmを測る。主軸方位は、N13°Wである。

S B-06 (第180図)

調査区の北西端に位置した、梁行2間(3.13~3.38m)・桁行2間(5.20~5.30m)の総柱の身舎に、



第179図 S B-01~04 遺構実測図



第180図 SB-05~09 造構実測図

西面に扉が付く。柱穴の規模は、直径15~34cm・深さ10~44cmを測る。主軸方位は、N 88° Eである。

S B-07 (第180図)

06号建物の1.4~1.6m西に位置した、梁行1間(2.26~2.30m)・桁行2間(3.33~3.35m)の南北方向の身舎に、西面に扉が付く。柱穴の規模は、直径20~36cm・深さ17~44cmを測る。主軸方位は、N 2° Wである。

S B-08 (第180図)

調査区の中央やや北側に位置した、梁行2間(3.60m)・桁行3間(5.80m)の東西方向の建物である。柱穴の規模は、直径16~26cm・深さ28~50cmを測る。主軸方位は、N 85° Wである。

S B-09 (第180図)

08号建物の南、03号建物に重複した、梁行2間(4.30~4.40m)・桁行3間(6.40~6.58m)の東西方向の建物である。柱穴の規模は、直径22~33cm・深さ36~50cmを測る。主軸方位は、東西である。

S B-10 (第181図)

調査区の西寄りに位置した、梁行2間(2.40~2.60m)・桁行3間(3.55~3.70m)の建物である。柱穴の規模は、直径20~31cm・深さ3~50cmを測る。主軸方位は、N 38° Eである。

S B-11 (第181図)

10号建物の北東1.4mに位置した、梁行1間(2.24~2.56m)・桁行2間(3.08~3.20m)の建物であるが、10号と繋がっていた可能性もある。柱穴の規模は、直径13~26cm・深さ10~46cmを測る。主軸方位は、N 38° Eである。

S B-12 (第181図)

05号建物の北東部に重複した、梁行2間(3.26~3.83m)・桁行3間(5.16~5.60m)の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径21~36cm・深さ30~45cmを測る。主軸方位は、N 7° Eである。

S B-13 (第181図)

08号建物の東側に重複した、梁行2間(3.40~3.68m)・桁行2間(4.55~4.58m)の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径14~23cm・深さ16~30cmを測る。主軸方位は、N 8° Eである。

S B-14 (第181図)

調査区の東端、02号建物に重複した、梁行2間(3.88~4.29m)・桁行3間(5.36~5.60m)の東西方向の建物である。柱穴の規模は、直径14~23cm・深さ17~32cmを測る。主軸方位は、N 77° Eである。

S B-15 (第181図)

14号建物の北、01号建物の東梁と重複した、梁行2間(2.34~2.42m)・桁行2間(2.76~3.20m)の建物である。柱穴の規模は、直径16~33cm・深さ13~44cmを測る。主軸方位は、N 56° Eである。

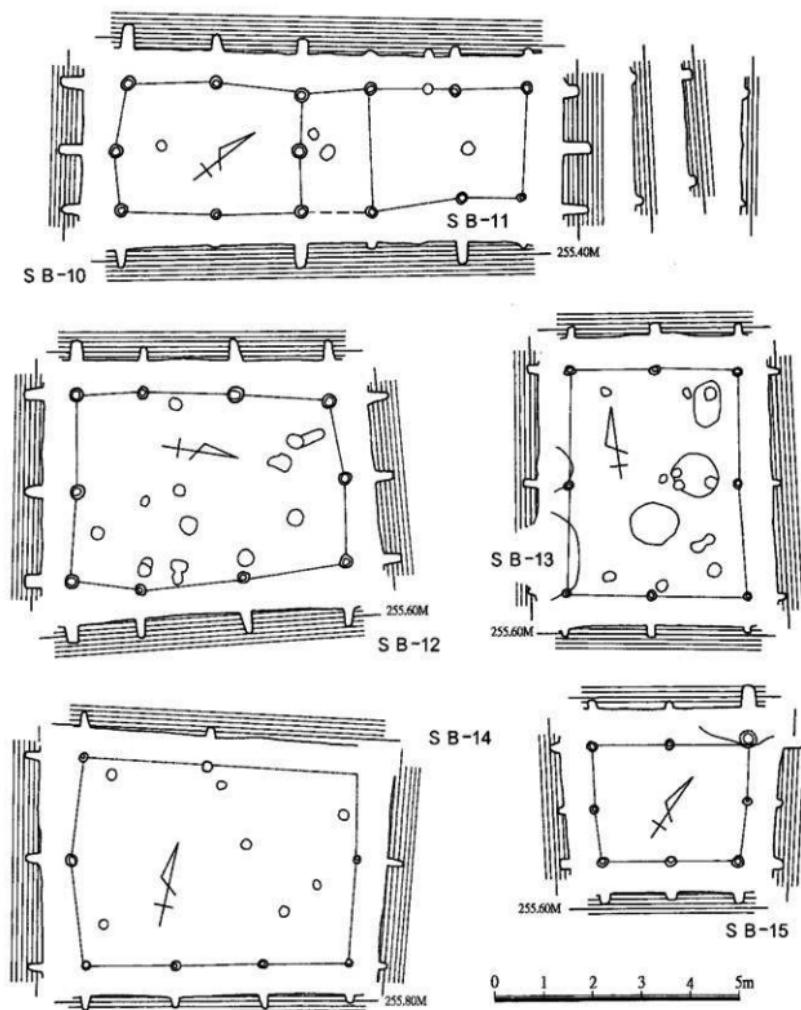
S B-16 (第182図)

08・13号建物と重複した、梁行2間(3.44m)・桁行2間(3.96m)の南北方向の建物である。柱穴の規模は、直径15~30cm・深さ22~38cmを測る。主軸方位は、N 13° Eである。

S B-17 (第182図)

調査区の中央寄りに位置した、梁行2間(4.58m)・桁行2間以上(5.1m以上、推定3間)の建物である。柱穴の規模は、直径23~33cm・深さ20~48cmを測る。主軸方位は、N40°Wである。

S F-01



第181図 SB-10~15 造構実測図

02号建物の北東2mに位置した、3間(4.62m)の構造遺構と推定される。柱穴の規模は、直径16~21cm・深さ10~23cmを測る。主軸方位は、N40°Wである。02号に伴う遺構もしくは、北東に2間の梁が延びた建物遺構であった可能性もある。

溝状遺構は、1条のみ検出した。

S D-01

調査区の西端中央において、長さ9m分を検出した。幅は27~38cm、深さは3~9cmを測る。形状はやや蛇行するが、10・11号建物の時期に伴う可能性が高い。

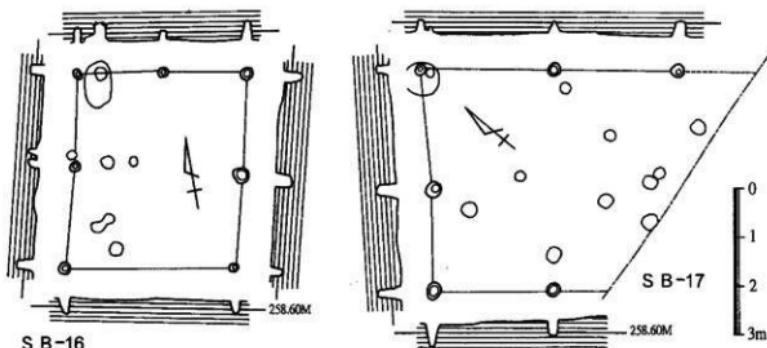
円形土坑は、直径0.6~1.2m・深さ10cm前後のもの35基を検出した。顯著な遺物は出土していないが、中世の小児~若年の土壙墓であろうと思われる。01号溝の東側においては、L字状に配置された状況で、01・02・17号建物と並行しており、計画的配置と言える。

確実な土壙墓としては、01号1基がある。

S K-01 (第183図)

調査区の中央北縁に位置した、長さ1.85m・幅0.87~0.97mの隅丸長方形を呈し、深さは39~46cmを測る。南東寄りの土層中位から、土師質土器皿の完形品1点(929)が出土したことから成人の土壙墓と推定される。また、1~2層には拳大の礫が混入していることから、木蓋の上に錐として置かれ、皿が供獻されたことが想定される。

当調査区では、明瞭な検出ができない落ち込み(S Z)を10基確認した。当初は03・05・08号は竪穴住居の可能性を推定したが、すべて天井(Ⅳ層)が陥没した状況を把握し、自然陥没坑である



第182図 S B-16・17 遺構実測図

ことが判明した。これらは帶状に分布することから、水の通り道があると推定される。

S Z-03 (第184図)

中央北縁に位置した、長径3.3m・短径2.5m程の楕円形を呈し、最深部は1.45mを測る。土層の状況から、古代以前の陥没と推定される。覆土上層から、甕の底部片1点(927)が出土している。

S Z-04 (第184図)

08号建物の南西部に位置した、長径2.8m・短径2.2mの楕円形を呈し、深さは1.2~1.9mを測る。東壁下部は抉れており、底面は傾斜している。覆土上層から、坏片1点(929)が出土している。

S Z-05 (第184図)

04号の西に隣接した、直径3.6m前後の略円形を呈し、深さは1.3~1.5mを測る。底面は中心付近が若干凹む程度で、凹凸も少ない。

S Z-06 (第184図)

調査区のやや西寄りに位置した、長径4.1m・短径3.2mの楕円形を呈し、北西部に突出部のあるプランである。深さは1.7~2.2mを測る。埋没過程から、弥生~古墳時代の陥没坑と推定される。北壁上部には、新たに(現代の)陥没坑が形成されようとしている。

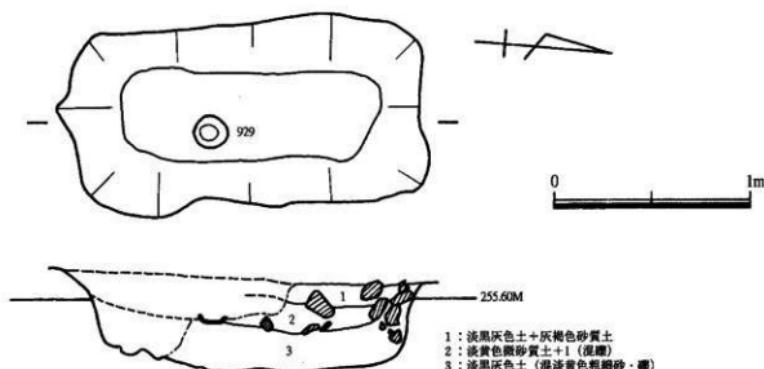
S Z-09

11号建物の北東に位置した、長径2.7m・短径0.9mの楕円形を呈し、深さは1.7mを測る。土層断面の実測をする前にセクションが崩壊してしまったので、詳細は省く。

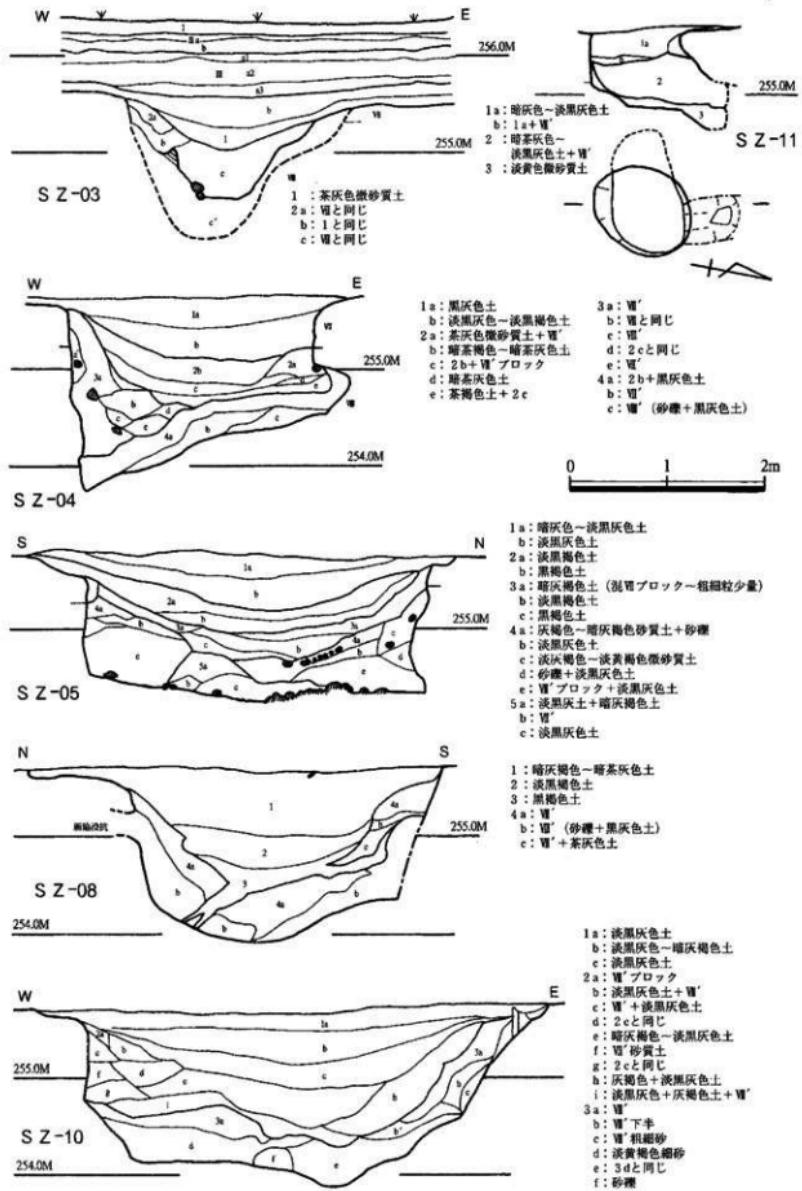
S Z-10 (第184図)

09号の南に位置した、長径5.4m・短径3.6mの不整楕円形を呈し、深さは1.54~1.88mを測る。

S Z-11 (第184図)



第183図 SK-01 造構実測図



第184図 自然陥没坑 断面層序図

10号の南西1mに位置し、長径1.08m・短径0.86mの楕円形を呈し、1段目の深さは80cm前後である。北壁は抉れ、2段目が下降して行くが、深さは未確認である。

これら自然陥没坑の殆どは、弥生～古墳時代の形成と推定される。

出土遺物（第187～189・191図）

出土遺物は少ないが、弥生土器（925～927）のほか、土師器壺（928）・東播系須恵器・土師質土器・輸入陶磁器の白磁（933）・青磁（935～936）・鉄釉陶器（934）、打製石鎌（984）、磨製石鎌（985）、器面調整具（986）、滑石製石鍋片を加工した温石と推定されるもの（987）などが出土している。

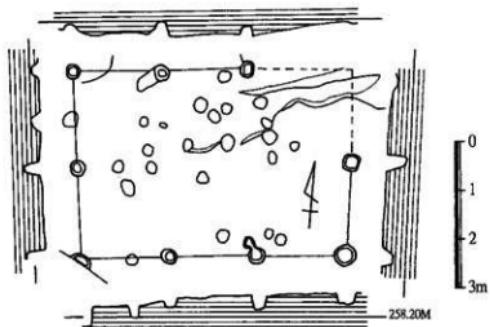
小結

他の地区の様な区画溝は検出されなかったが、建物は5群に分かれ、主軸方位も大きく5期に分類できる。年代推定の根拠となる遺構・遺物の良好なセットは無いので、VI～VII区の建物と連動させて変遷を推定する（第5節）。01号土壤墓出土の土師質土器皿は12世紀後半頃と推定されるが、田之上城築城前の遺構と推定される。

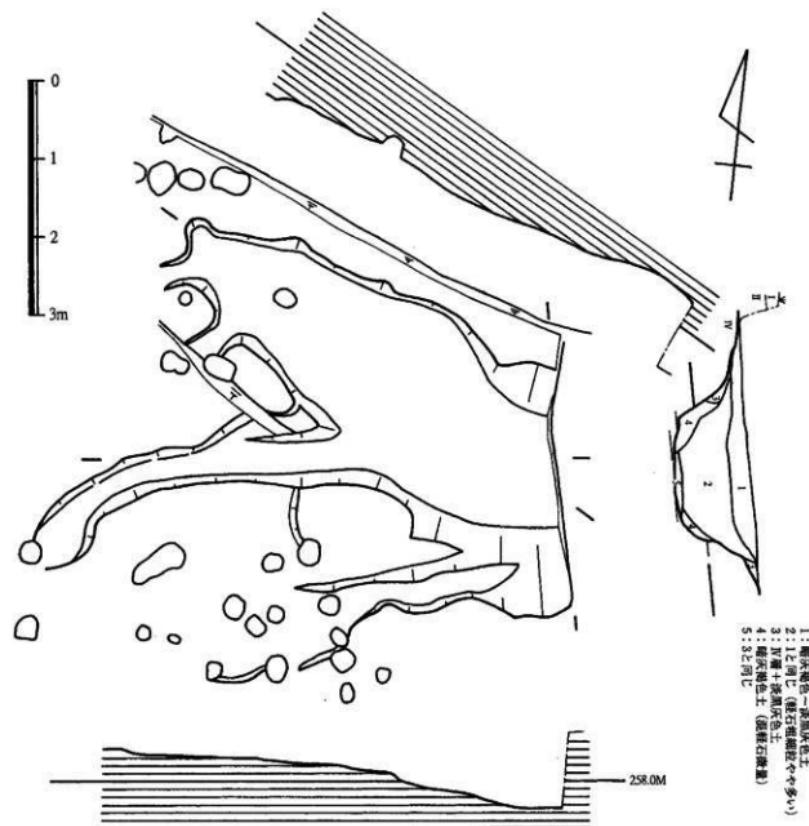
q. IX区

VII区西側の谷を挟んだ位置の、道路建設予定地内の調査である(第153図)。

調査区の大半は、天地返しと開墾によって30cm前後の削平を受けている。遺構は柱穴が多いものの建物復元に至らず、1棟のみ明瞭である。他は、枝別れ



第185図 S B -01 遺構実測図



第186図 S D -01 遺構実測図

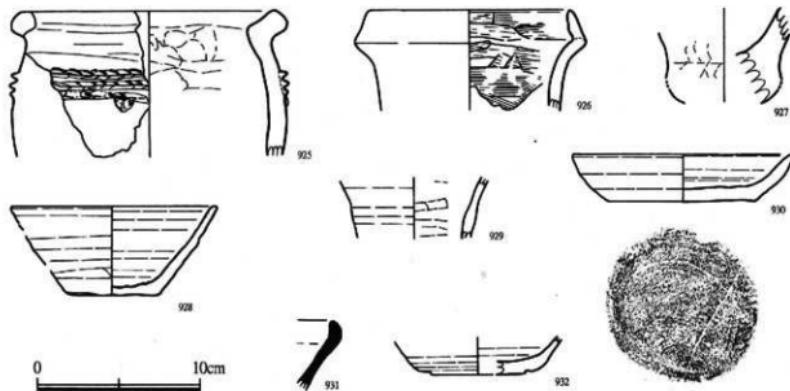
した溝状遺構 1 条を検出した。

S B-01 (第185図)

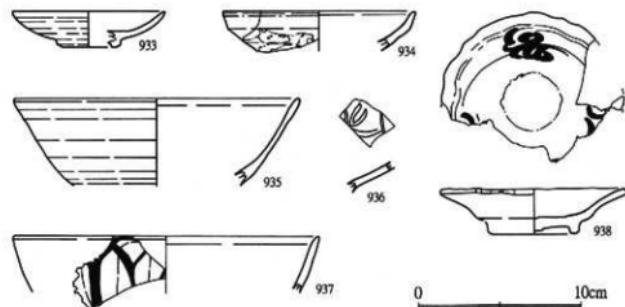
調査区の中央南東寄りに位置した、梁行 2 間 (3.86m)・桁行 3 間 (5.4m) の東西方向の建物で、北東隅の柱穴は 01 号溝によって削失している。柱穴の規模は、直径 27~44cm・深さ 20~40cm を測る。主軸方位は、N84°E である。

S D-01 (第186図)

調査区の北東部に位置した、最大幅 3.5m・深さ 0.98m の溝状遺構で、4 条の枝別れがある。形状は歪で、本体に流れ込む水流によって形成されたと推定される。本体は、東の谷（外堀）へ注いでいたと推定される。覆土上層から青磁碗（937）と稜花型皿（938）が出土しており、15世紀末頃の年代が与えられる。



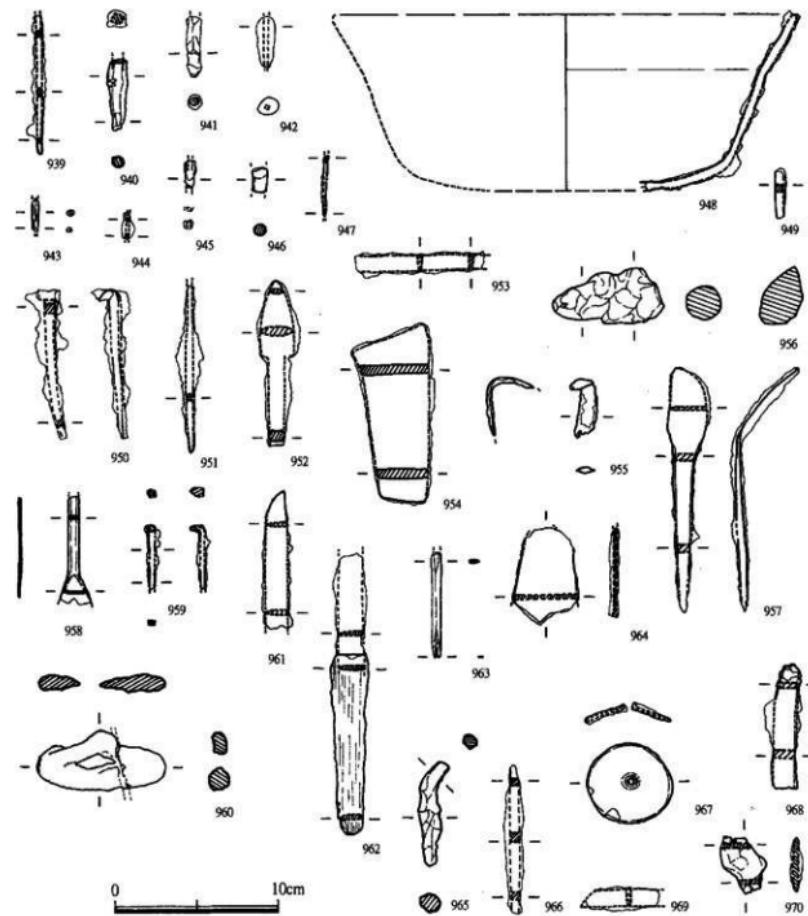
第186図 VII・IX区出土 遺物実測図 (1) (西区) 926: S2-06, 927: S2-03, 928: S2-04, 930: SK-01, 925・929: II層, 931: III層, (北区) 932: 02



第186図 VII・IX区出土 遺物実測図 (2) 輸入陶磁器 (西区) 933~936: II層、(北区) 937~938: SD-01

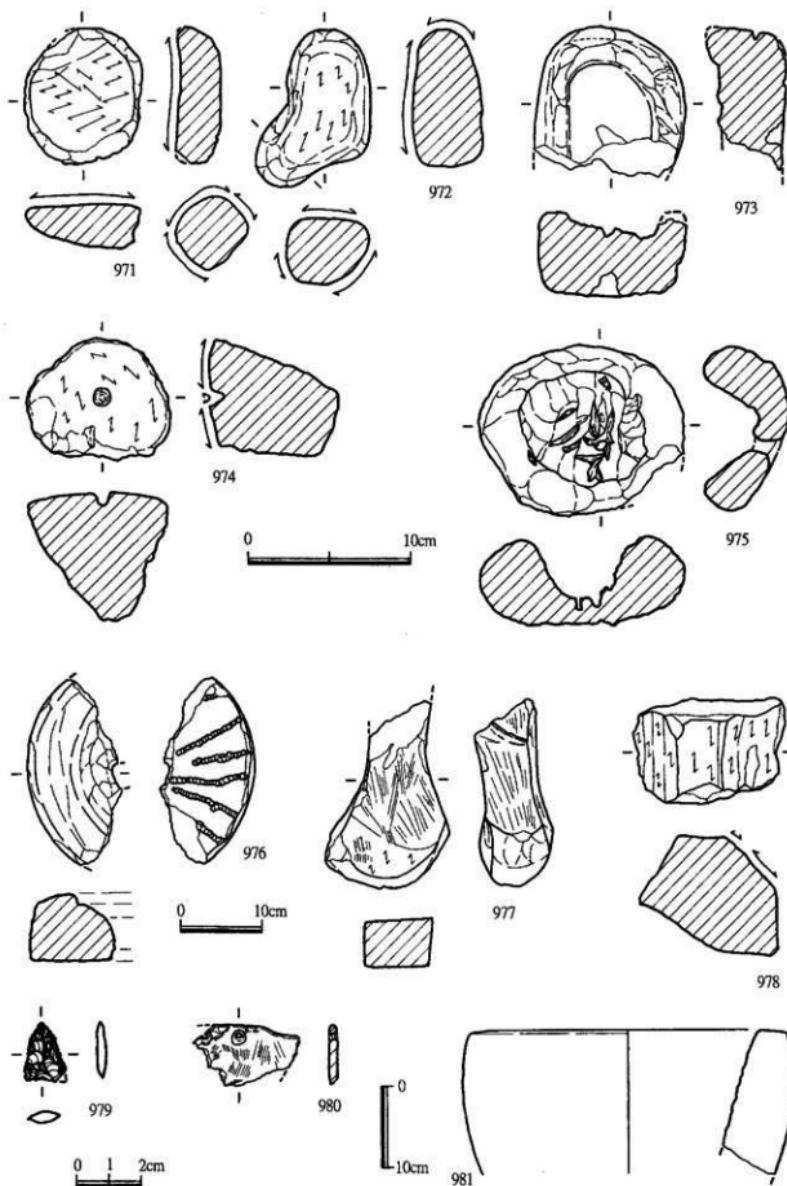
小結

柱穴は覆土の土質から14~15世紀代が多いと思われ、田之上城の外縁にも集落が営まれていたことが判明した。15世紀には外堀はほぼ埋没しており、小規模な区画溝による郭で構成されていた田之上城の西隣も郭を形成し、砦を拡大していった可能性もある。

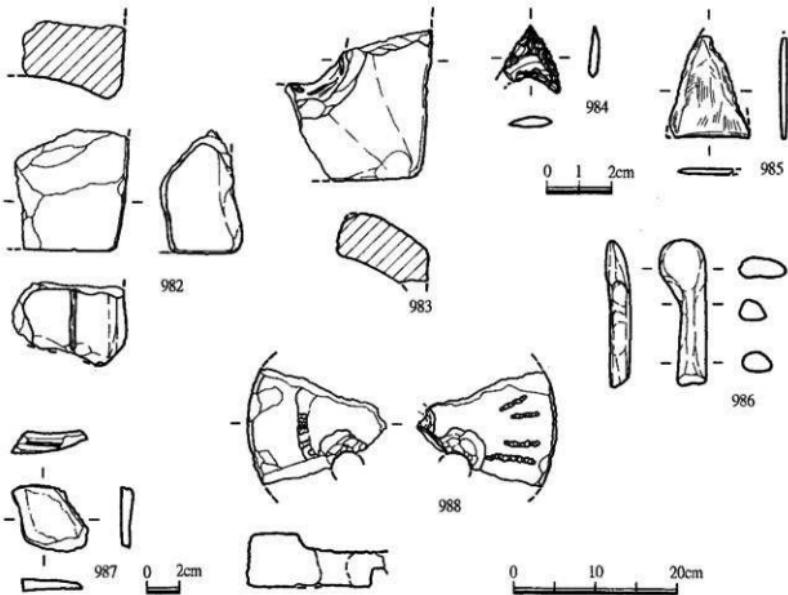


第189図 V~Ⅷ区出土 鉄器・鉄製品実測図

(V区) 939: 30, (VII区) 940~942: SK-10, 943~946: SK-11, 947~948: SK-76, 949~950:
SK-99, 951: SK-117, 952: SK-118, 953: SK-04, 954: SD-13, 955: SD-35, 956: SD-48,
957: SD-56, 958: S2-63, 959: S2-05, 960: S2-12, 961: S2-32, 962: S2-29, 963: 197, 964:
198, 965: 1253, 966: 1714, (VI区) 967: 295, 968: 三番, 969: 三番, (Ⅷ区) 970: 146



第190図 VII~X区出土 石器・石製品実測図(1) (971~976: SD-07、977: 815、978: 220、979: 816、980: 815、981: 816)



第191図 VII~IX区出土 石器・石製品実測図（2） 982~983：VII区出土、984~987：VIII区出土、988：IX区SD-01

第5節 まとめ

田之上城跡は、郭内の面積が約70,400m²、外堀を含むと約93,250m²の面積がある。城内の調査面積は約16,420m²であり、約17.6%の調査をしたにすぎない。また、郭の中心部にかかったのはVI区の北東部のみで、標高の最も高い所や外堀の途切れる地点など、重要ポイントについては何のデータも無いが、限られた範囲内での居住形態の変遷を追ってみたい（第192～200図）。

弥生時代（先Ⅲ期）の遺構（第192図）

段丘の北縁に竪穴住居（VII区の01号住居）が営まれ、沖積地との中間部では自然陥没（VII区のSZ）が多発する。石包丁片も出土しており、沖積地での小規模な水田が営まれていたと想定されるが、当該期の地層は流失している。

古代Ⅰ期（先Ⅱ期）（第193図）

北田遺跡検出の04号溝と繋がる、II区の03号溝・VI区の14号溝が掘削された時期で、9世紀後半頃である。同時期の箱掘りの溝としては、上田代遺跡の05号溝⁽¹⁾と馬場田遺跡の05号溝⁽²⁾があり、いずれも墨書き土器が出土している。これらは埋没途中での祭祀行為で、北田遺跡・田之上城跡例も共通する。しかし、上田代・馬場田遺跡例は用水路であるのに対し、当該溝は村境的区画溝（空堀）の様な機能しか考えられない。底面は時には20～30cmの段を有し、礫層や砂層内に底面があることから掘削当初は用水路としては機能しない。段差や礫の凹凸の存在から馬道でも無いが、排水路的機能は充分にある。大雨の後でも殆ど水は溜まらず、全て地下へ吸収される。踏み締められた黒色土には水が溜まることから、集落内の水を排水する機能を兼ね備えている。

これだけの大土木事業をした人々の生活遺構は無いに等しく、VII区の15号建物が唯一、主軸方位が近い。

古代Ⅱ期（先Ⅰ期）（第194図）

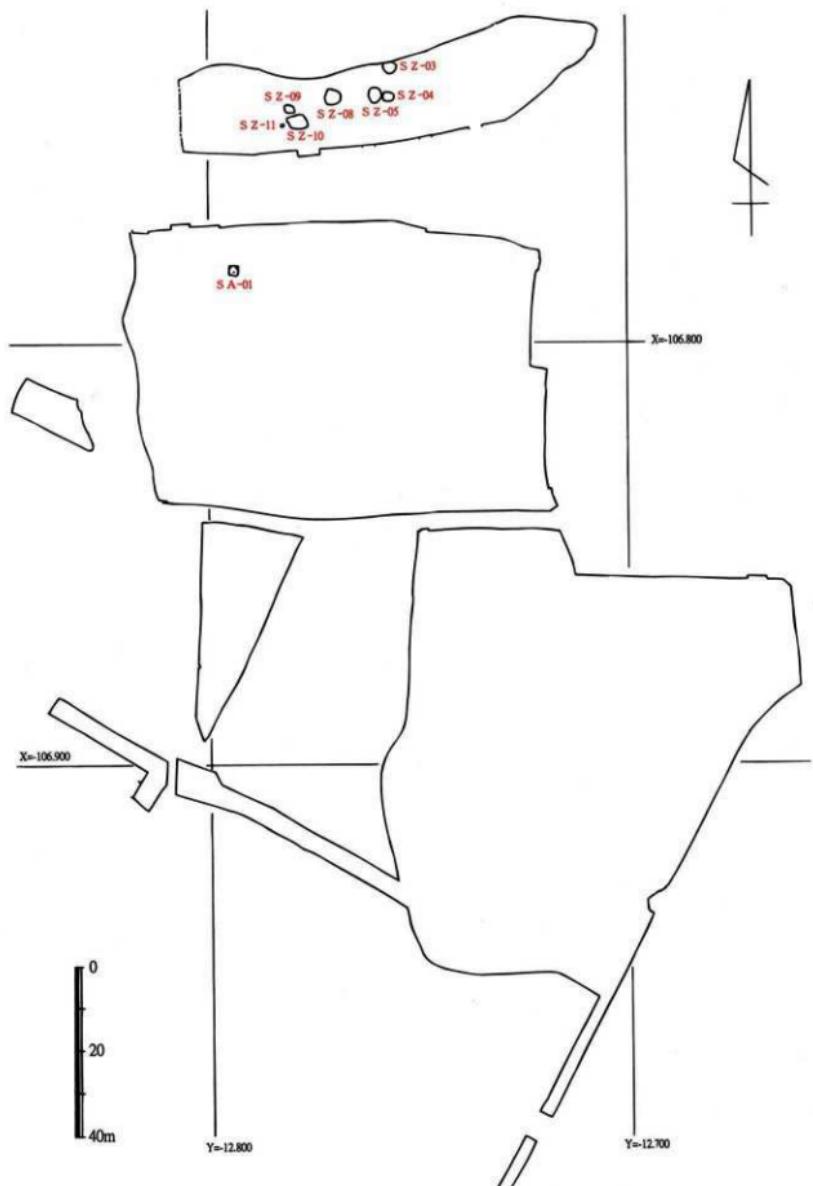
VII区の遺構に限られるが、主軸方位を北西もしくは北東にとる建物（01・02・10・11号）と円形土坑群がある。これらは15号建物廃絶後および14号溝埋没後の集落であり、近接的位置から2小間に細分されると思われる。

当該期の年代は推定困難であるが、12世紀後半頃に置きたい。

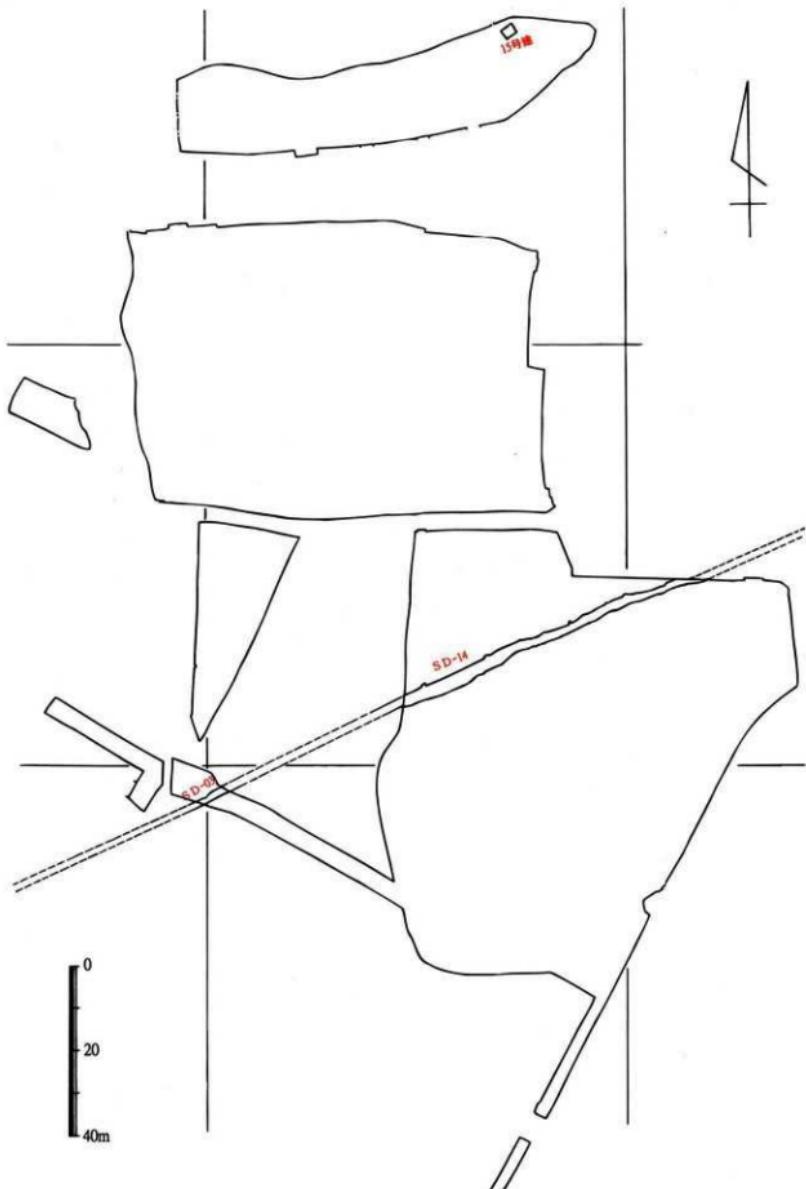
田之上城Ⅰ期（第195図）

外堀が掘削され、築城された初期の遺構であるが、区画溝の方位によって3小期（a・b・c期）に分けられ、13世紀後半～14世紀前半の時期である。

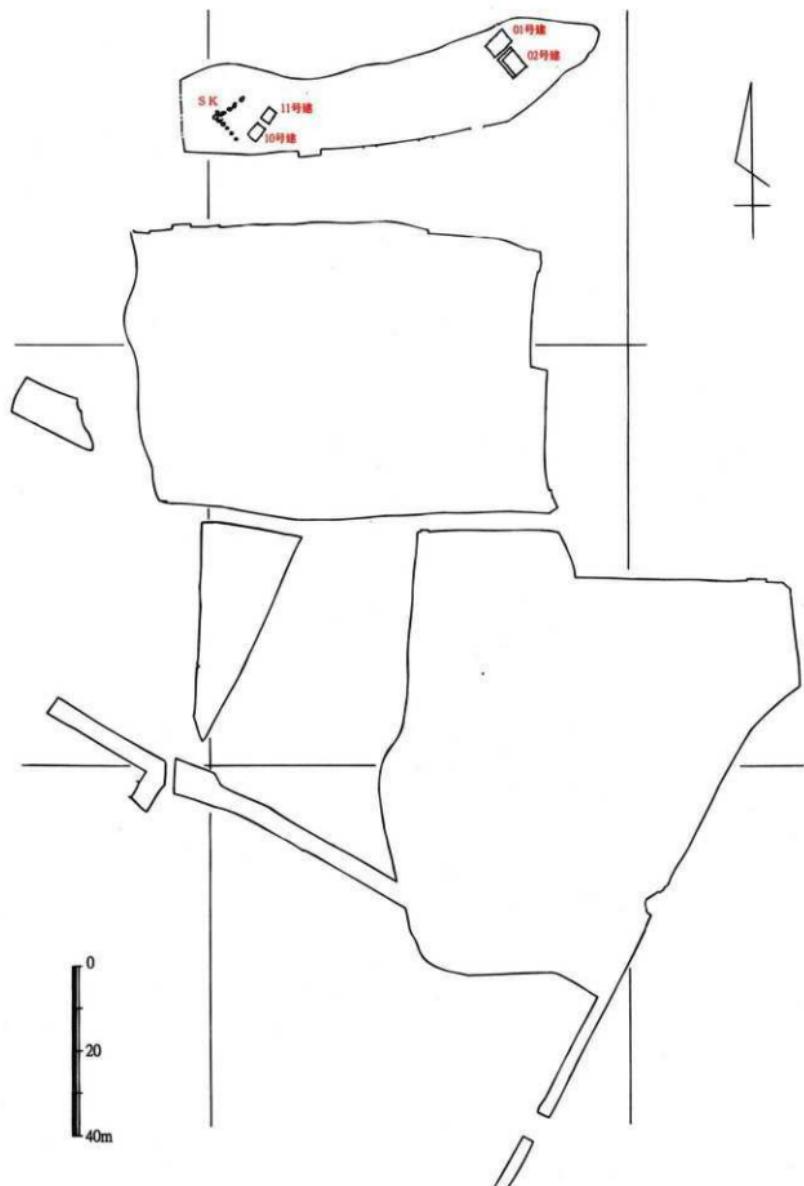
Ia期は、浅く幅の狭い区画溝のVI区35・53号溝で囲まれる郭内の36・53号建物および同一主軸の74・99号建物、VII区の15・23号建物およびVII区の03号建物がほぼ同時期と推定される。



第192図 弥生時代の遺構



第193図 古代Ⅰ期の遺構



第194図 古代Ⅱ期

I b期は、主軸がかなり北向きになるVI区の67・79・128号建物と、VII区の03号溝で囲まれる25・26号建物およびVIII区の13号建物の時期である。

I c期も、浅く幅の狭い区画溝（IV区06号溝・VI区47号溝）で囲まれる郭が存在すると思われるが、主軸方位を同じくする建物は発見されない。

a～c期の先後関係は不明であるが、建物の長軸が東西か南北かで時期差が明白である。

田之上城Ⅱ期（第196図）

I期と同様、建物の長軸方向で、東西方向・南北方向ともに2小期（以上）に分けられる。具体的な変遷は不明確であるが、当該期に布掘り建物が出現する。08・65号は類似した構築であり、09・60号は全く異なる構築であるが区画溝で計画的に配置されたと思われる。東西方向の建物は、31・35号建物と41・42号建物の重複によって2小期に分けられると推定される。

VI区の南北方向の建物は中央北側に2棟存在するのみで、VII区西群に集中する。

VII区については、初期は57・27・49・21号溝で区画した郭内を32号溝および09号建物を囲む溝（内郭）が存在し、68・08・60号建物など主要建物が配置される。14世紀後半～15世紀前半と推定する。

田之上城Ⅲ期（第197図）

主要区画溝（V区07号・VI区63・16・57・48号溝）と建物の主軸方位が東西・南北に移る時期で布掘り建物（06・10号）とVII区の12号建物以外は全て南北方向の建物である。16・63・57・48号溝で囲まれる郭内には様々なタイプの建物が立ち、建物の重複によって2小期（以上）に分けられる。

当該期は15世紀後半～16世紀前半と推定され、城主の館的建物が10号建物である。その萌芽は、II期の09号布掘建物にある。VI区とVII区の間には運搬用道路も構築され、発展期を思わせる遺構である。10号建物の土間に使用された白色系粘土の混じる遺構（鉄鍋と錢貨が出土した78号土坑など）も当該期の遺構である。

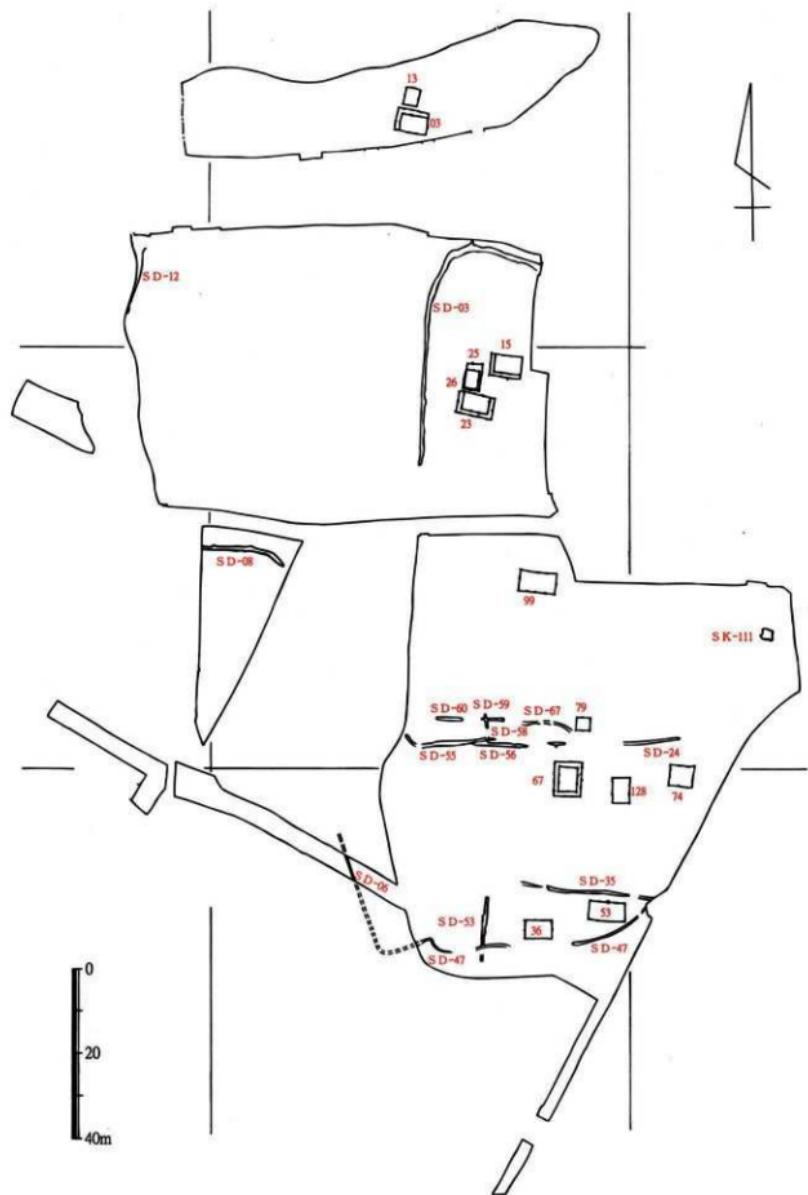
外堀は殆ど埋没しているが、V・VII区の西限としては機能させていたと推定される。

田之上城Ⅳ期（第198図）

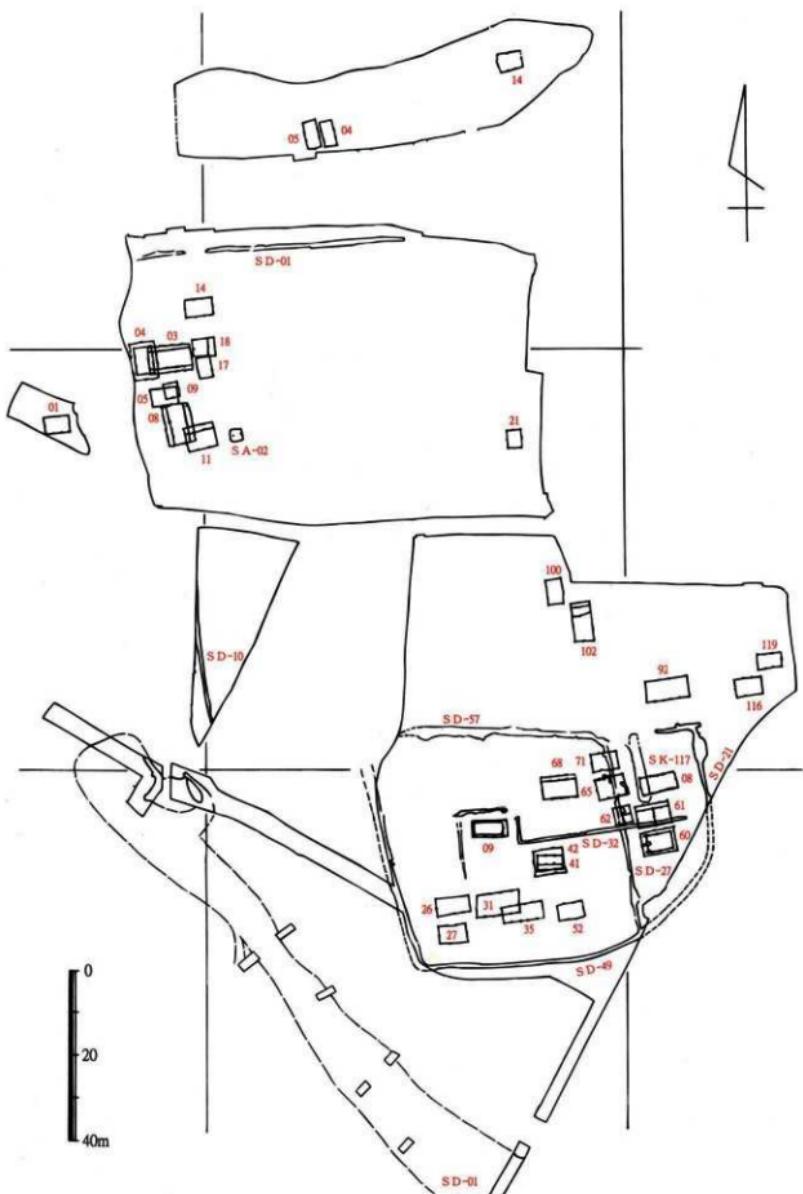
建物の主軸方位はIII期と殆ど変化なく東西・南北に近い。50・62号溝のように幅広く若干深めの区画溝で中核部を囲んだり、64号溝のような空堀を掘削して防御体制を強化し、大型建物を増大させた時期である。主体は16世紀後半であるが、主軸方位が南北の時期、東西の時期2期以上があると推定される。

IV～V期の建物は密集し、未確認の建物も多数存在しており、仮に全て網羅復元できた状況を推察すると、4～5小期に分けられるであろう。

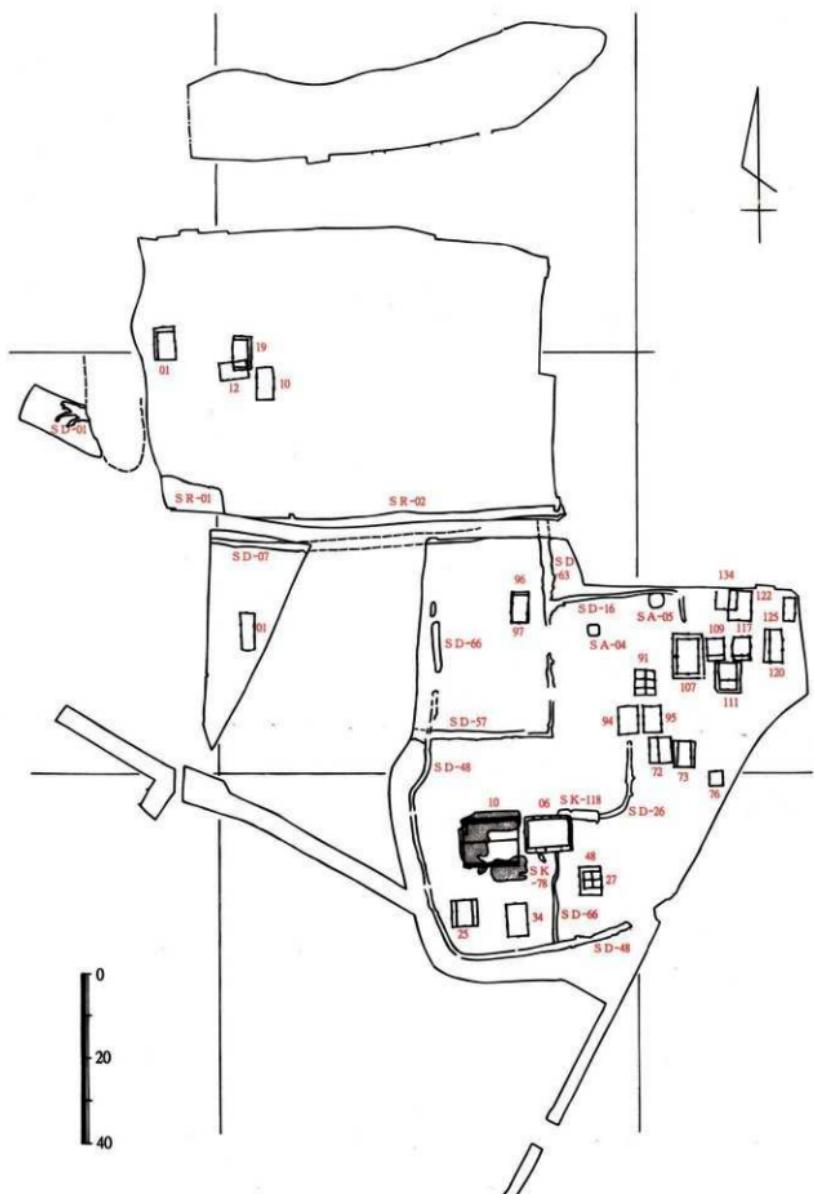
建物としては最大規模を誇った10号布掘建物も2～3回建て替えられ、小規模化する。05号建物は布掘りの工法を簡略化しているものの、掘方の大きさ、直径20cm前後の柱を使用した大型建物である。



第195図 田之上城 I期

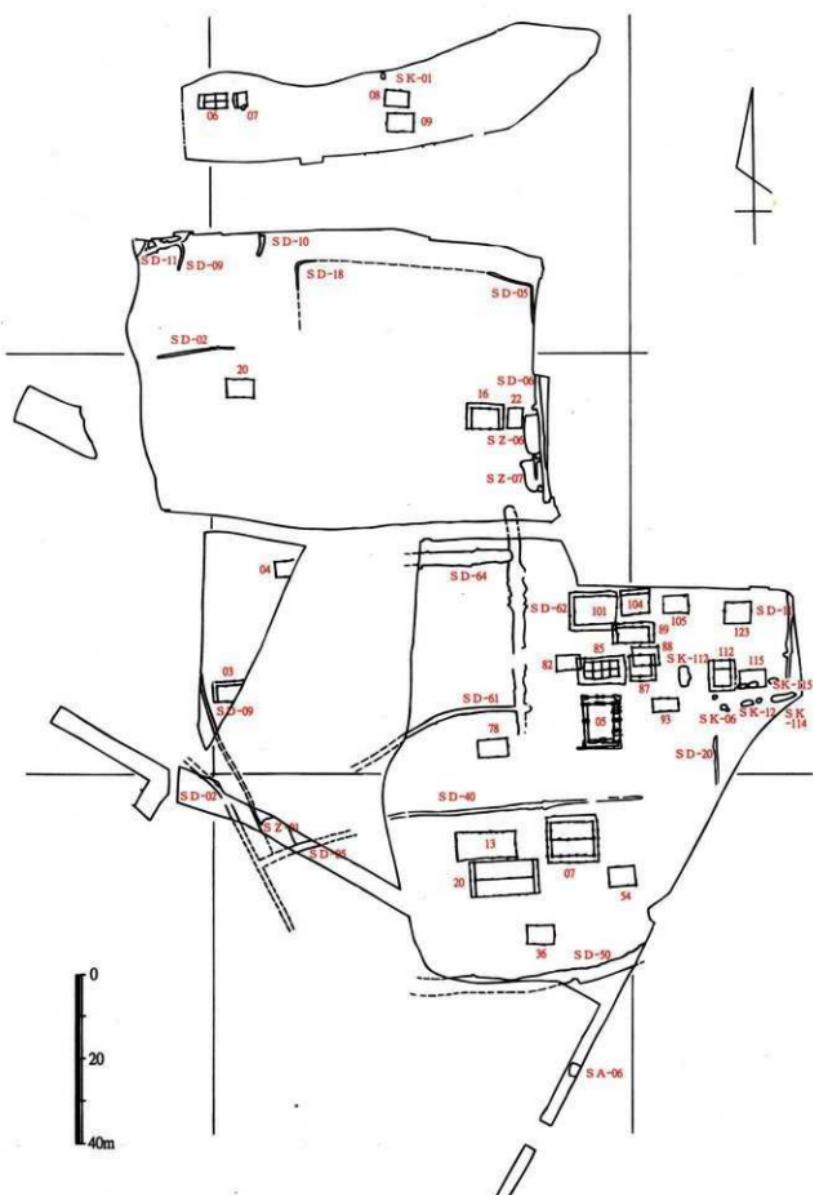


第196図 田之上城Ⅱ期

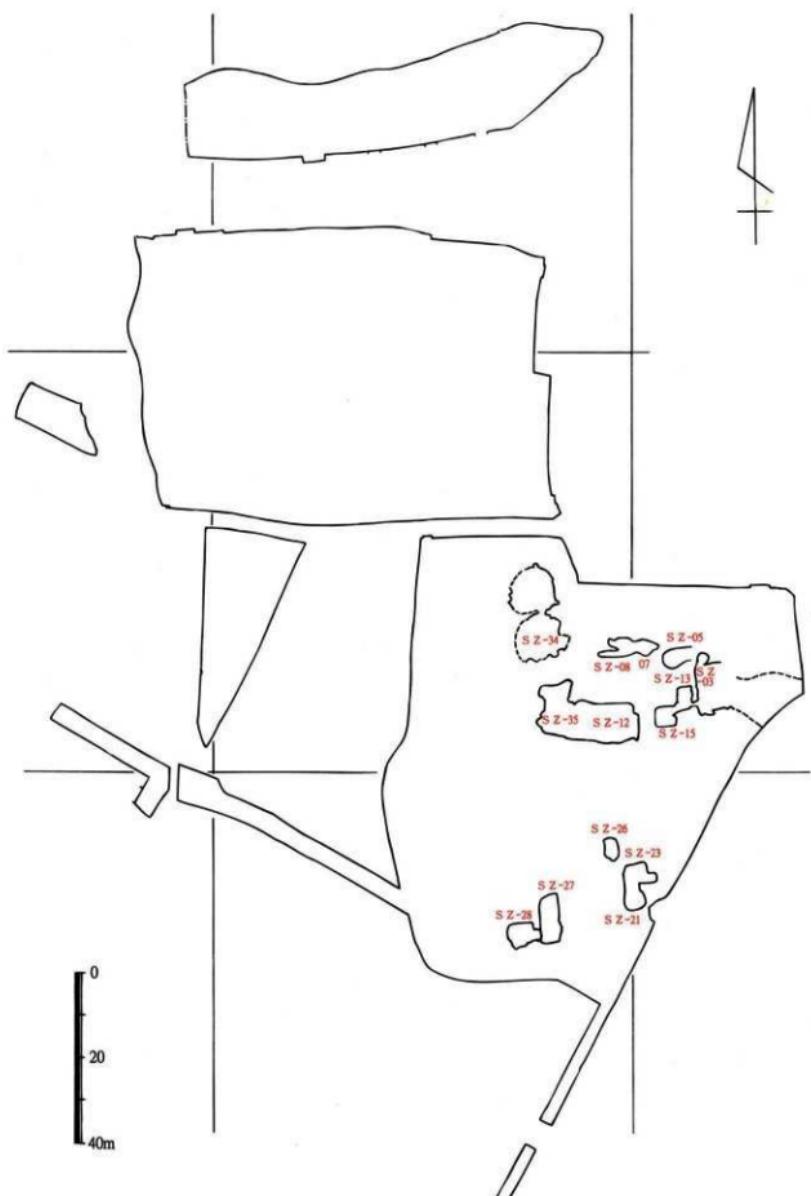


第197図 田之上城Ⅲ期

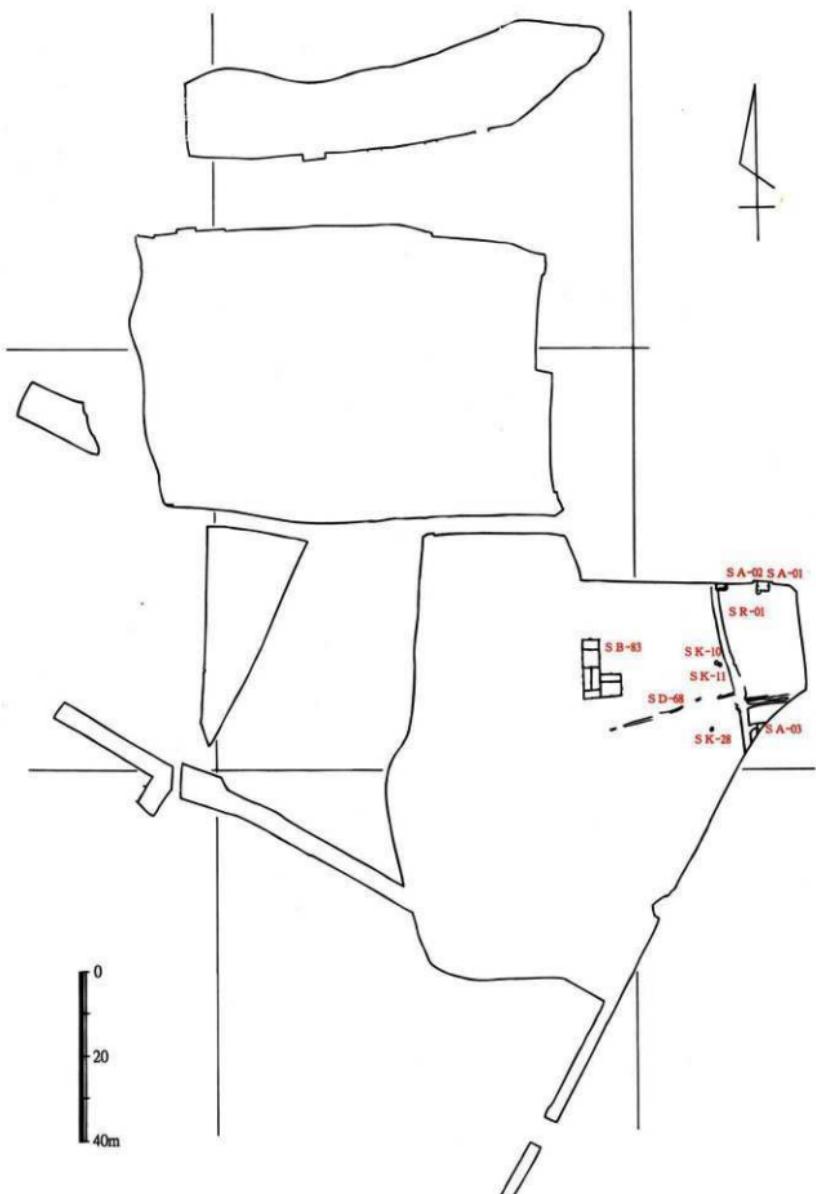
アミ目は白色粘土混じり土の範囲



第198図 田之上城IV期



第199図 田之上城跡V期（城破り）



第200図 近世

田之上城跡V期（第199図）

VI区の大型建物集中部や区画溝上において、長さ5~23m前後の、不整形な掘り込みが10ヶ所余確認された。覆土には中世末~近世初頭の陶磁器類を含み、生活遺構とは考えられない掘り込みである。

元和元年（1615）、一国一城令が施行され、市内で機能していた山城は全て取り壊される。当該山城も例外ではなく、瞬時に廃城になったであろう。その痕跡こそが当該期の土坑群で、いわゆる“城破り”の遺構と推定される。

IV期の主要遺構であった空堀（64号溝）や50号溝、さらにはVI区以外の郭には大規模な搅乱が無く自然堆積で埋没している。

近世（後I期）（第200図）

廃城後間もなくVI区東部に01号道路が敷かれ、側溝と直交する溝状遺構（68号溝など）も掘削される。17世紀後半には建物（83号など）も立ち始め、若干の土塙墓（10・11号墓）もみうけられる。

近世中頃~後半には竪穴状遺構（SA-01~03）が構築され、鍛冶職人の仮住居もしくは産小屋としての空間と推定される。竪穴状遺構は、市内では共通して出土遺物が殆ど無く、使用後に放火している例が多いことから、特殊な機能を推定しなければならない。

28号土坑（墓か）は19世紀代であり、幕末以降に耕地化されると推定される。

註

- (1) えびの市教育委員会『田代地区遺跡群・妙見原遺跡』 1997
- (2) えびの市教育委員会『長江浦地区遺跡群』 2002

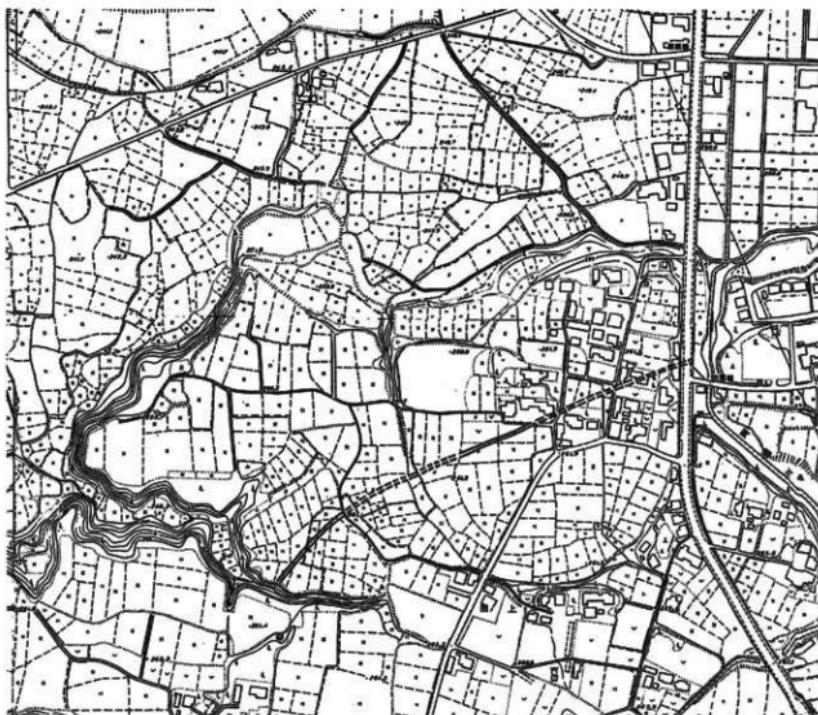
第5章 総括

小岡丸地区遺跡群の出土遺物は縄文時代前期の轟式土器1点に始まり、間断はあるものの、中世に繁栄し、現代まで連続と続いていることがわかる。

弥生時代中期、極短期間、集落が営まれたが、その後、9世紀に至るまで不毛の地であった。

9世紀中頃、幅2~3mの道路状遺構が掘削され（第201図）、総延長は500m以上と推定される。両端には谷があり、橋を架ければ延長できるが、続きは定かでない。谷で挟まれた10町余の段丘縁を区画したものか、東方の段丘縁近くから延びて、北田遺跡の南西部から南へ800m程で官道に合流する道であったのかは、将来の調査に委ねる。

13世紀後半頃、田之上城として郭が形成され始め（I期）、直径300m前後の外堀も掘削されたようである（第202図）。氾濫原の外堀は幅25m前後の広いものであるが、段丘上は幅10mも無い位であり、南側は1段（2~3m）高くなっているために攻撃を受けやすい立地になっている。陸橋も幅が広く、防御面が劣る山城である。北西部と北東部の構造は不明瞭で、今後の課題である。

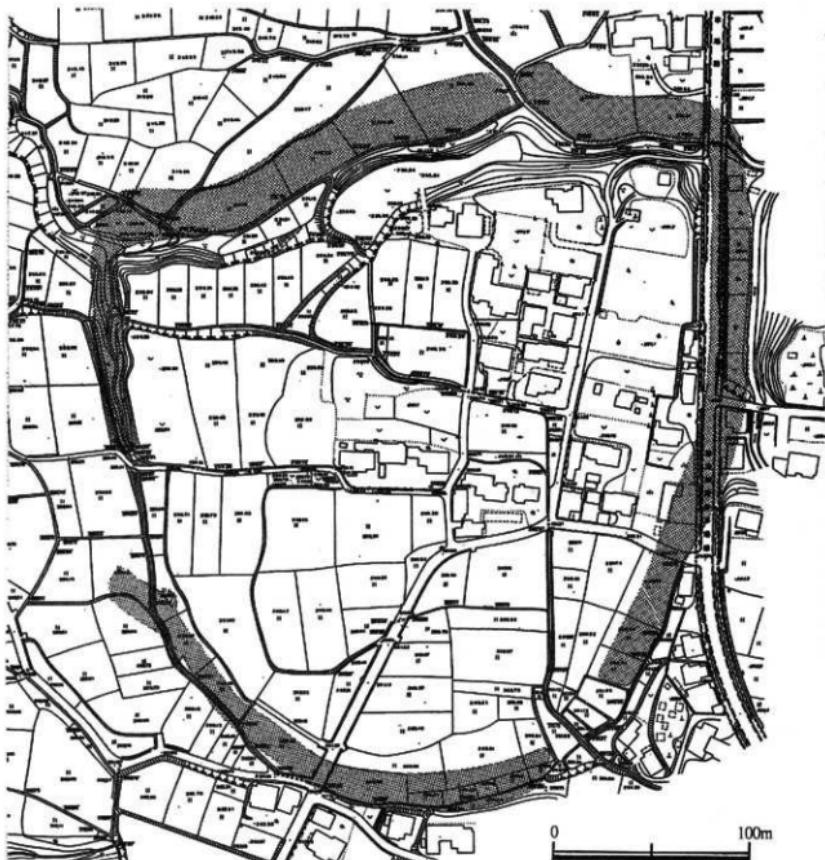


第201図 古代I期の溝状遺構と周辺の地形

14世紀中葉、相良氏に攻略された時点では、外堀と郭・建物が若干存在した頃（Ⅱ期）であろうと推測される。また、同時期、日下部氏が滅亡し、北原氏が飯野城に入る。本市の盆地東部の重要な拠点である飯野城の1.5km対岸に位置する当地が山城として再整備される。

15～16世紀代は建物が林立し、山城として最も機能した時期（Ⅲ・Ⅳ期）である。永禄7年（1564）、島津義弘が真幸院領主となり、飯野城に入った。恐らく継続して重要拠点として機能させていたと推定される。義弘は天正15年（1587）に羽柴秀長に降伏し、天正18年には飯野城から鹿児島県栗野町の松尾城へ移っている。この頃から田之上城も衰退し始め、一国一城制の時点で消滅（Ⅴ期）したと推定される。

中世の建物構築には相当の規制がみられ、田之上城内に限らず、周辺の村（北田遺跡など）にま



第202図 田之上城跡 外堀推定図

で連動している。柱穴底面は礫層に達するものも多く、根石を必要としない。反面、火山灰土は有機物を早く腐植させ、20~30年おきに建物の建て替えを余儀なくされる。VI区の10号建物に代表されるような、間柱を有する（土壁の）堅牢な布掘り建物でさえ同様である。では、なぜ礫石建物にしなかったのか、建築時の安定性を優先したのか、南九州山間部特有なのか、定かでない。08・65号建物（布掘り）に類似する例として、鹿児島県新平田遺跡検出の1~3号建物があり、鎧兜弁文碗を伴う13世紀代に比定されている⁽¹⁾。

大型土坑の機能は推定困難であるが、VI区中央北西部に集中する109・110号土坑や91号土坑等はトイレ遺構ではないかと推定している。壁面下部~底面は砂~礫層であることから水分はどんどん吸収され、土砂で埋没するまでは使用可能である。ただ、出土遺物が殆ど無く、有機物的土壤も確認されていないので、確証は無い。

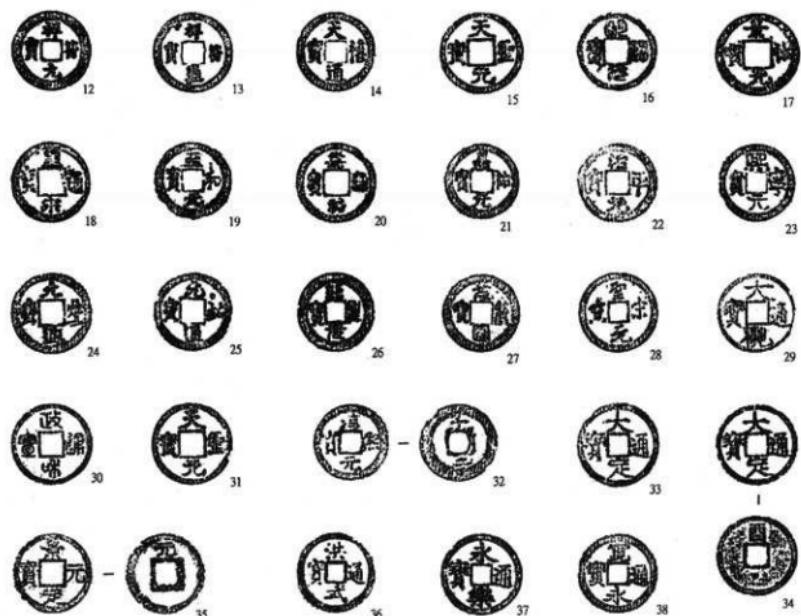
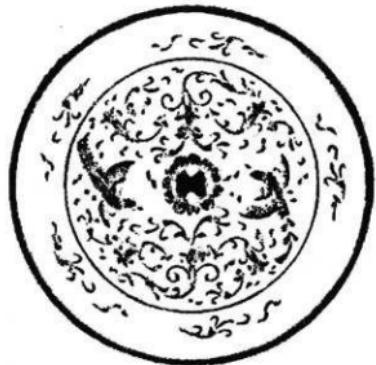
117・118号土坑は長大な土坑であり、段差以外は整形された底面であることから、屋外（屋根がない）作業を想定するならば、馬の洗い場もしくは穀類の半地下式保存土坑など限られた用途の遺構と推定される。

近世初頭、一国一城令に伴う城破りが実施され、田之上城は廃城となる。ほどなく、道路（S R -01）が構築され、村落の再形成・再開発が徐々に行われる。

以上、根柢が希薄なまま大略的変遷を追ってみたが、大きな変更を生じることは無いと思われる。ただ、外堀の掘削年代や落城時の状態などは確定的でなく、また、VI区の建物はさらに数10棟存在することから、これらを再度、最大限復元し、時期別に変遷しないと、眞の遺構変遷はできない。

註

- (1) 大口市教育委員会『新平田遺跡・辻町B遺跡』 大口市埋蔵文化財調査報告書(20) 1997



0 5cm

第203図 市内上江431番地出土 和鏡と錢貨

表38 市内上江431番地出土 錢貨一覧

	錢貨名	初鋤年	出土枚数
2	開元通寶	621年	A種 12
3	開元通寶	621年	B種 2
4	乾元重寶	758年	A種 3
5	乾元重寶	758年	B種 1
6	宋通元寶	960年	2
7	太平通寶	976年	2
8	淳化元寶	990年	2
9	至道元寶	995年	9
10	咸平元寶	998年	6
11	景德元寶	1004年	6
12	祥符元寶	1009年	9
13	祥符通寶	1009年	8
14	大德通寶	1017年	6

	錢貨名	初鋤年	出土枚数
15	天祐元寶	1023年	12
16	明道元寶	1032年	1
17	景祐元寶	1034年	5
18	皇宋通寶	1038年	42
19	至和元寶	1054年	4
20	嘉祐通寶	1056年	9
21	嘉祐元寶	1056年	4
22	治平元寶	1064年	5
23	熙寧元寶	1068年	28
24	元豐通寶	1078年	36
25	元祐通寶	1086年	33
26	紹聖元寶	1094年	18
27	元符通寶	1098年	6

	錢貨名	初鋤年	出土枚数
28	聖宋元寶	1101年	10
29	大觀通寶	1107年	2
30	政和通寶	1111年	13
31	天禧元寶	1158年	2
32	淳熙元寶	1174年	2
33	大定通寶	1178年	1
34	大定通寶	1189年	1
35	聖定元寶	1260年	1
36	洪武通寶	1368年	4
37	永樂通寶	1406年	3
38	寔永通寶	1624年	1
	不明		18
	合計		329

上記資料は、市内在住の福留幸雄氏寄贈品であり、約50年前、井戸掘削の際に一括して出土したらしい。和鏡は12世紀後半と推定され、保存状態が良い。錢貨には寔永通宝1枚もあるが、福留氏の他の収集品が混入したものとみた。とすれば最新の錢貨は永楽通宝であり、15世紀初頭～前半の埋納もしくは貯蔵物と推定され、和鏡の年代と差が大きい。従って、和鏡と錢貨は隣接する別遺構から出土したものと推定される。

付 篇

北田遺跡04号溝出土垂飾品の蛍光X線分析

長友恒人
(奈良教育大学)

はじめに

溝状遺構から出土した金属遺物について、エネルギー分散型微小部蛍光X線分析装置（EDAX Japan製 EAGLE XXL-NR型、分析時のX線管の管電圧は20kV、管電流は $70\mu A$ ）により、定性的な元素分析を行った。分析では

（測定1）青銅製の金属片であるかどうかの確認すること

（測定2）傷（敲打痕？）の部分の成分元素を確認すること

に着目して分析を行った。

測定1

肉眼観察で地の部分を選び、写真1の小孔から1mmほど離れた部位の直径0.1mmの円形の範囲（図1）を分析した。蛍光X線スペクトルを図2に示す。Cr（クロム）のK-X線ピークは検出器に依存するものであり、測定試料の成分ではない。試料の成分としてはCu（銅）、Sn（錫）、Pb（鉛）以外に顕著なピークは見られず、典型的な青銅器のスペクトルを示している。形状から銅鏡片であると推定される。なお、スペクトルの低エネルギー領域で分析装置に組み込まれたプログラムによつてRbL（ルビジウムのL-X線）と表記されているピークがあるが、正確には遺物の表面に付着した微量の土壌に由来するSiまたはAlであろう推測される。

測定2

遺物の表面に肉眼観察で、長さ2mm程度、幅0.1~0.2mm程度の白っぽく傷のように見える光沢のある部分が認められた。この部分を直径0.1mmの円形の範囲（図3）で分析したスペクトルを図4に示す。図4のCu（銅）、Sn（錫）、Pb（鉛）のピーク比は図2と同様であるが、Fe（鉄）の微小なピークが認められる。同じ光沢部分の測定部位を変えて測定してもFeのピークが認められた。

考察

（測定1）の結果から、この金属遺物は銅鏡の一部であると考えてよい。（測定2）の結果において光沢部分にFeが認められることに関しては、2つの解釈が考えられる。そのひとつは、この金属遺物を銅のような固い鉄製品で何らかの加工を施そうとしたときに金属鉄が痕跡として残ったという解釈である。しかし、青銅より硬い鉄で工作したときに鉄の成分が青銅表面に付着するということは考え難い。2つ目の解釈として、遺物の縁の平面部分が図1に見られるようにヤスリ様のもので削られている痕跡が明らかであることから、その削りくずが傷様の光沢部分に付着した可能性が考えられる。ヤスリ様のもので削った後に、布などで表面を磨くなどの操作をしても鋭い凹面に入り込んだ鉄は残るであろう。

この分析では短期間に定性的な分析をしたに過ぎないので、断定的には言えないが、図1のヤスリで削ったような痕跡と測定の結果から、銅鏡片の一部に銅のような固い鉄の工具で何らかの加工を施そうとしたであろうと推定される。

分析装置の使用にあたっては、奈良大学の西山要一教授に便宜を図っていただいたことを付記し、感謝する。

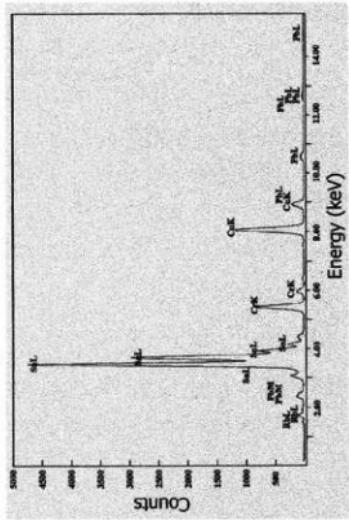


図 1 光沢がある微少部分の分析箇所。

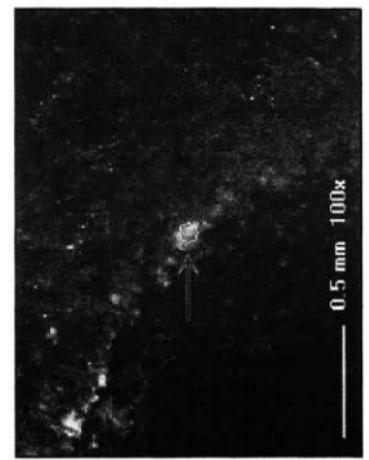


図 2 傷がない分析箇所 次印。緑の平面部分にヤスリをかけたような痕跡がある。

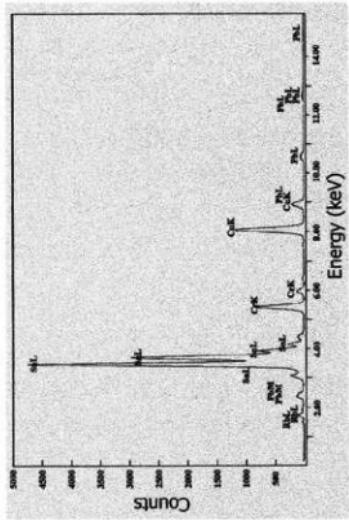


図 2 図 1 に示した部分の蛍光 X 線スペクトル。
(RbLは自動判定の誤りと考えられる)

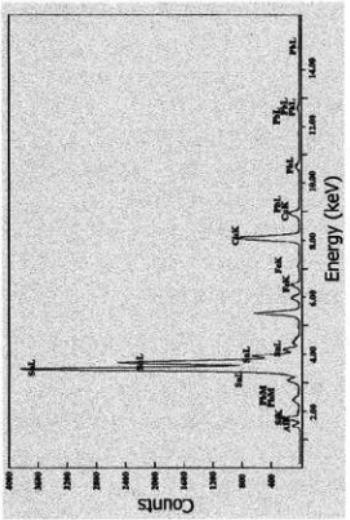


図 4 図 3 に示した部分の蛍光 X 線スペクトル。
(図 2 にではない Fe のビーカーがある)

北田遺跡
写真図版



小岡丸地区遺跡群とその周辺（右が北）

図版2



調査地とその周辺（約25年前）



北田遺跡遠景（南西から）

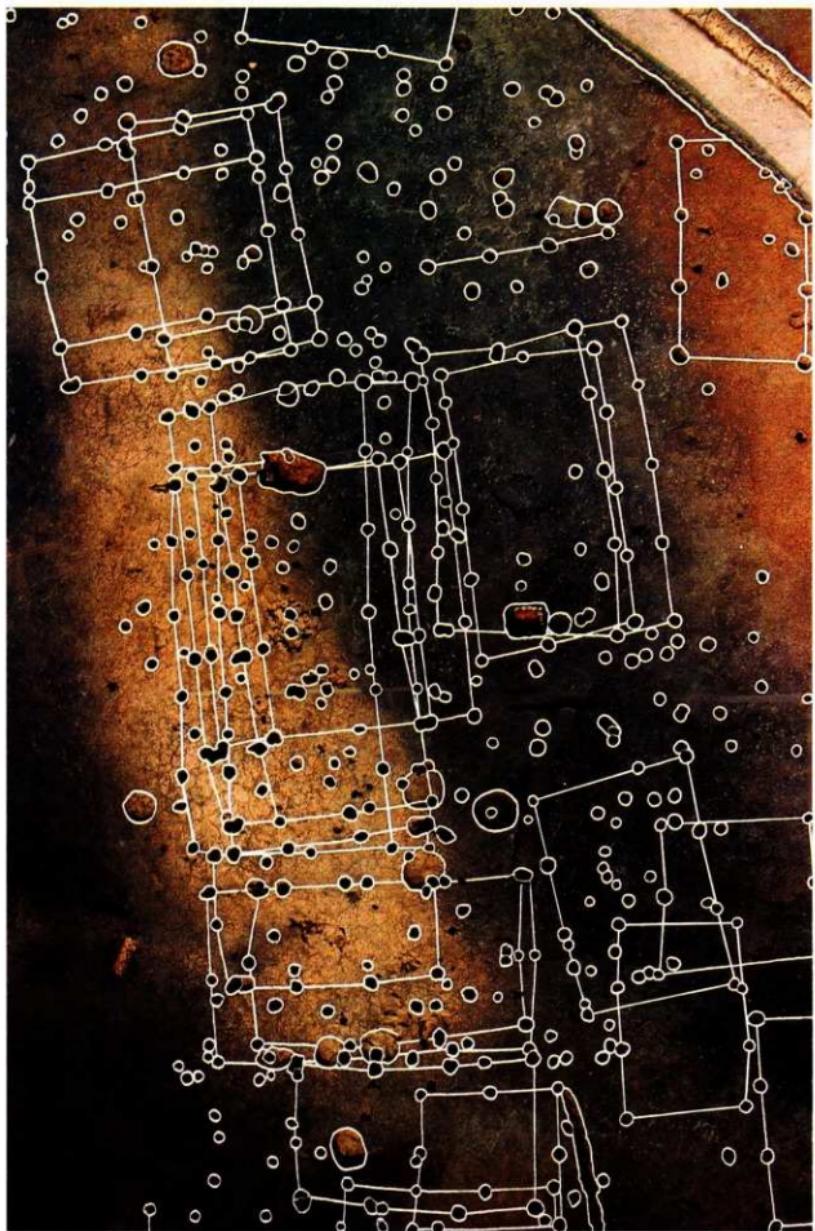


北田遺跡 全景（右が北）

図版4



陥し穴（SK-60）とその周辺



中央 建物密集部（右が北）

図版6



01号道路北半とその周辺



01号道路南半とその周辺

図版8

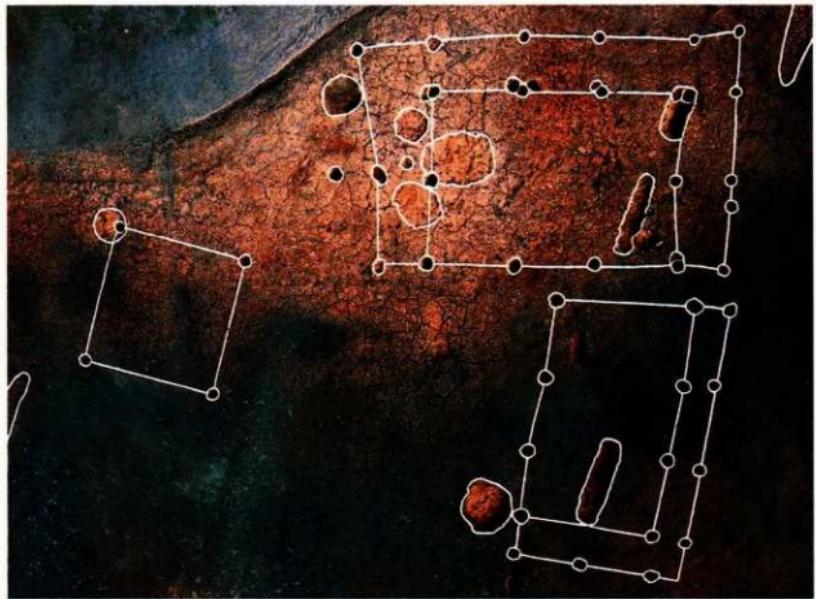


S B-31・61, S F-01 周辺

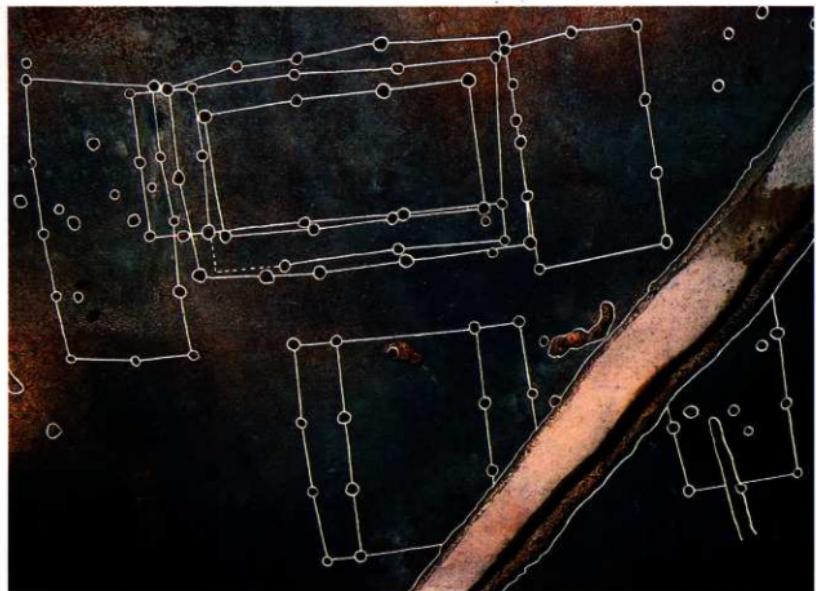


S B-28~30 全景

図版9

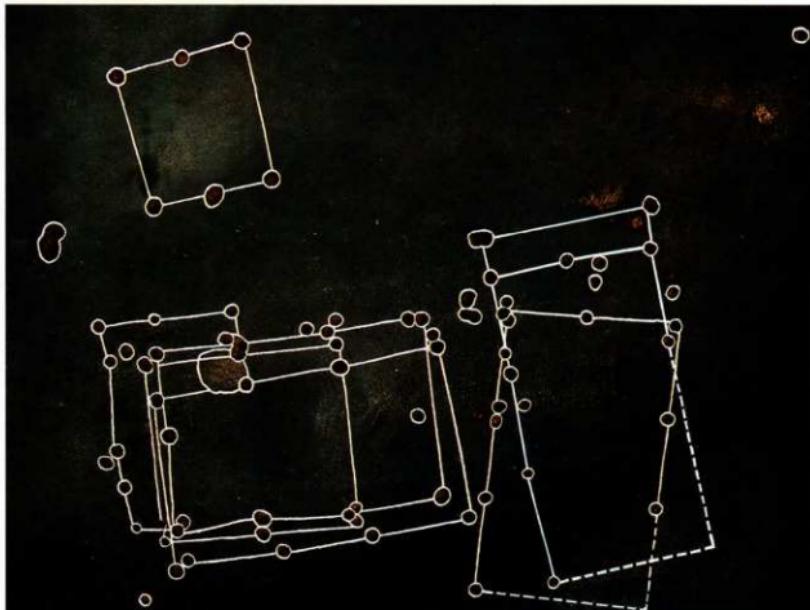


S B-26・27・10 全景

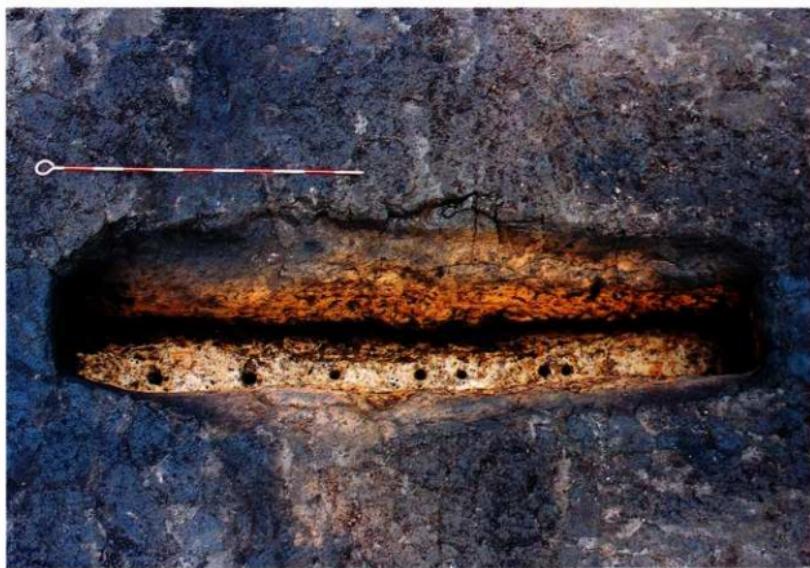


S B-20~24・47 全景

図版10



S B-01~05・69 全景



S K-60 完掘全景（西から）

S K-60

完掘全景

(北から)



S D-04 南壁層序 (A-A')

図版12



SD-04 断面層序 G-G'



同上 F-F'



同上 E-E'



同上 D-D'



S D-04 断面層序 C-C'



同上 南壁

図版14



S D-04 北部 遺物出土状態

(南東から)



同上

南西部 拡大

同上 北東部 拡大





SD-04 南側 遺物出土状態（断面B-B'）



同上 接写

図版16



SK-06 遺物出土状態

(東から)



同上

断面層序



同上

完掘 全景

S A -01

炭化材等

出土状態

(南から)



同上

東西セクション

東側南壁

断面層序



同上

完掘全景

(南から)



図版18



SK-10 遺物出土状態（北西から）



同上 セクション除去 崩落砾・遺物出土状態（東から）



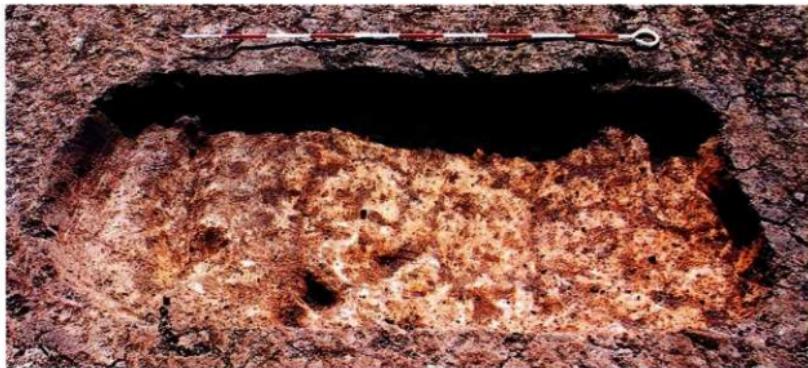
SK-10 完掘・石組状態・炭化物出土状態（西から）



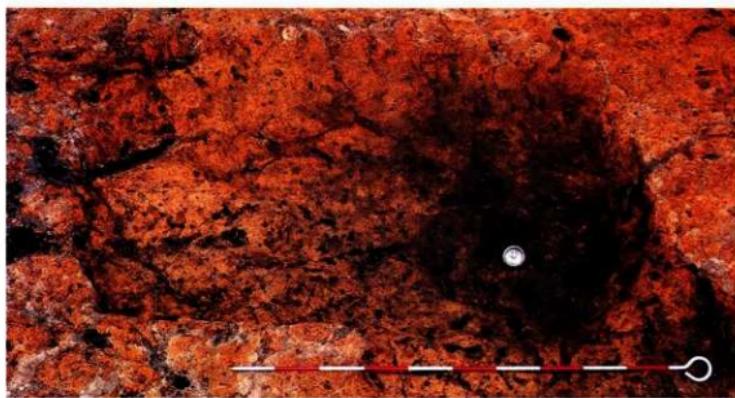
上：SK-41 断面層序（南から）

下：同 完掘全景（南から）

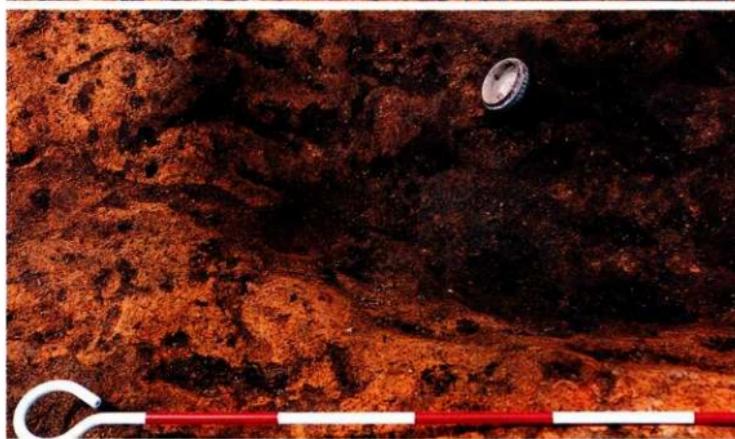
図版20



SK-30 完掘全景（東から）



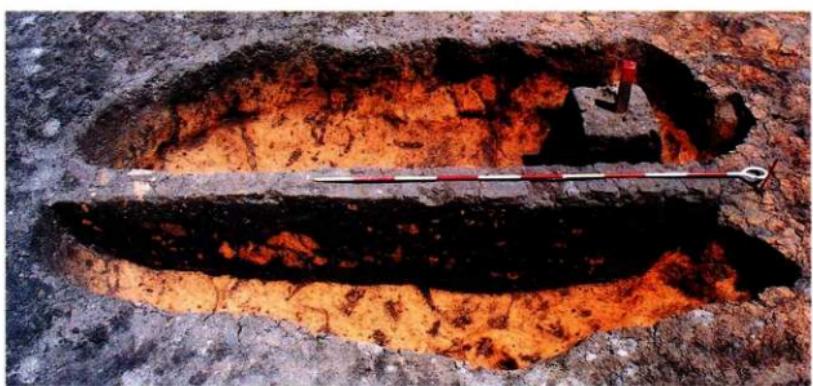
SK-56
完掘
全景
(東から)



同上
青白磁
合子
出土状
態
(北から)

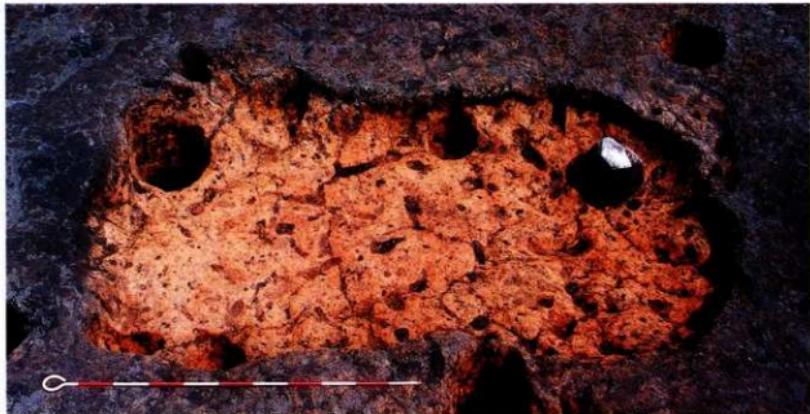


SK-04 完掘全景（南から）

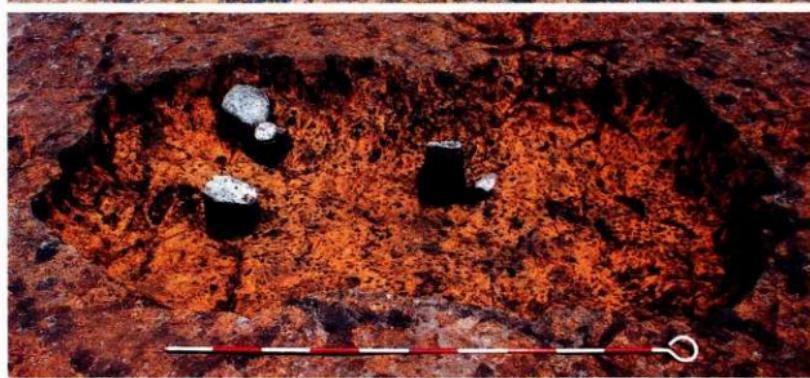


上：SK-13 断面層序（西から） 下：同 完掘全景（西から）

図版22



SK-24 完掘全景（南から）



上：SK-31 断面層序（西から） 下：同 完掘全景（西から）

S K -28

完掘全景

(北西から)



S K -32

断面層序

(南から)



S K -59

断面層序

(西から)



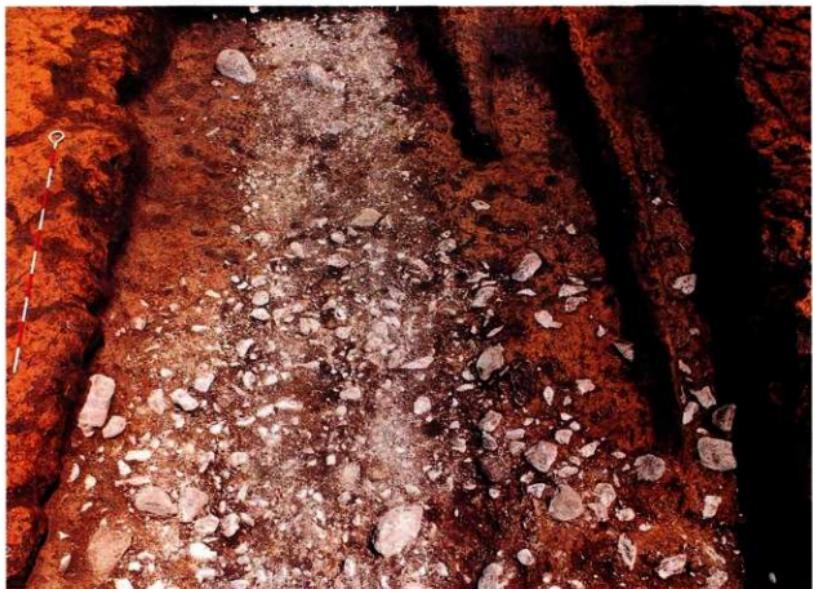
図版24



SR-01 北端部（南東から）



同上 北側セクション北壁層序（北西から）



SR-01 中央やや北側 底面と新旧側溝（北西から）



同 上 南側セクション北壁層序（北西から）

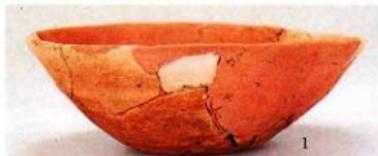
図版26



SR-01 南側セクション北壁とその周辺



同上 南端部底面の石敷



SD-04 出土 土師器 (1)



同 左 (2)



同 上 (3)



同 左 (4)



同 上 (5)



調査区出土 土師器・土師質土器

図版28



調査区出土 輸入陶磁器 外面



同上 内面



17

SK-56 出土 青白磁 合子

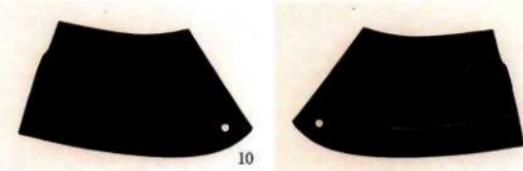


調査区出土 中世・近世国産陶磁器 上：外面 下：内面

S D-04出土

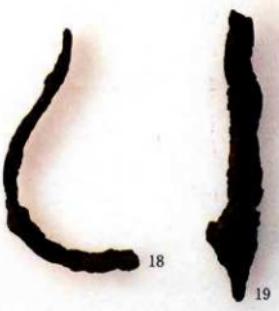
用途不明

金属製品

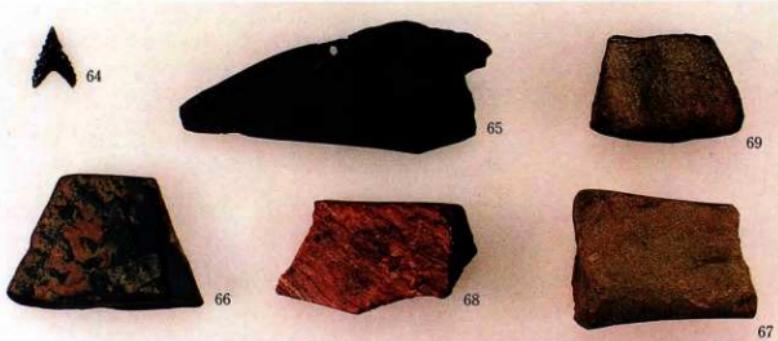


S K-10出土

鉄器



図版30



調査区出土 石器・石製品

田之上城跡
写真図版



田之上城跡と A・B区近景（北から）

図版32



A・B区 近景（右が北）

A区
全景
(右が北)



同上 東壁層序（南西から）



同上 中央部（西から）



同上 南端（西から）